
無謀突撃兵 五十嵐へ～ちょ

続々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無謀突撃兵 五十嵐へくちよ

【Nコード】

N5234C

【作者名】

続々

【あらすじ】

近未来。世界は未曾有の恐怖に覆われていた。人を襲う未知の生命体。次々と侵略される文明圏。この危機に対し、様々な国が最前線に軍隊を送った。日本もまた然り。これは、日本から送り込まれた軍隊から、はぐれてしまった四人の兵隊達の物語である。

登場人物

登場人物

五十嵐奈由 突撃兵 兵長
通称 へ〜ちよ

本小説のタイトルのヒロイン。年齢不詳だが、見た目から若い（10〜20）と思われる。

一応はぐれてしまった兵隊たちの中で一番階級が高いので、隊長をやっているが、有能というわけではない。

むしろ、役立たず？

へ〜ちよというあだ名は、階級の癖にどじつ娘な彼女に親近感を持った、浜田二等兵らによって付けられた。

得意技は無謀突撃という名の、ただのタツクル。だが、まともに食らったら、大の男でもメートルは吹っ飛ぶ威力をもつ。

小さい体に無限のパワーである。

山崎健一 突撃兵 二等兵
通称 山さん（山ちゃん：五十嵐）

はぐれ部隊の筋肉要員。頼れる皆のお父さん役。けど、そろそろ三十路なのか、少し親父くさいところも。

元はフランス軍外人部隊に在籍していた過去を持つけど、その経歴を一切無視されて陸軍の部隊に二等兵として配属されたある意味かわいそうな人。

外人部隊ではスナイパーだったんだけど、なんだか肉弾戦ばっか

りしている。

あと、スポーツになるとやたら張り切る人。

浜田夏雄 工兵 二等兵

通称 浜田（なつちゃん：五十嵐）

はぐれ部隊のバランス要員。地味だけど、気の利く優しいお兄さん役。本当に地味。地味な20歳前半。

本土に弟・妹を残してやってきた大家族の長男。父・母は既に他界しているので、残してきた弟たちの事が心配だけど、弟たちを徴兵されるわけにはいかなないのでがんばっている。はずだったんだけど、はぐれてしまった。

本作のヒロイン、五十嵐にホの字。五十嵐も、ひそかにホの字なので、両思いなんだが、中々煮え切らない。

日本美乳党という、貧乳をこよなく愛する党の黨員。しかも、天然ドジ娘とか、天真爛漫元気娘が好き。そのため、五十嵐にはスタイル的にも性格的にもかなりストライクゾーンである。

上記のように書くと、危ないお兄さんのようだが、いたって健全な人である。

あと、作中にて女装経験有り。

大島五郎 輜重兵 一等兵（元少佐）

通称 大島（島ちゃん：五十嵐）

はぐれ部隊のブレイン要員。かなり危ない切れ者役。実は隊内随一の博識人にして、ツッコミ役。見た目に5歳くらい若そうな20歳代。

元日本軍士官学校卒業のエリートだったらしいが、何の因果か今は輜重隊員に。いわゆる左遷されたいらしいが、本人は特にも気にしていないさそうな様子。ただ、直接の原因になったと思われる、高部

大佐には複雑な心境を垣間見せる。

どっかの掲示板に感化されたような喋り方をするが、たまにマジになると、言わなくなったりする。逆に言ってしまうと、その口調の間は、余裕って事の表れ。

あと、犯罪や軍規違反を、よくも考えずたやすくやってしまうような、危ない面も多々ある。

高部 由紀子 陸軍大佐

通称 鬼の高部

陸軍のエリート街道まっしぐらな女仕官さん。大島と同期で同じ歳だが発育がよく、大島とは身長差がある。

どうやら大島の左遷にかかわったらしい人物。が、どうやら大島の事を好いているらしいという一面も見せる。

極度のパソコン音痴で、大島の指示がないとOSの終了すら出来ない。そのことで、大島には過去に多大な迷惑をかけているらしく、邪険に扱われている。

先述のように非常に発育がよく、胸はそこそこ（日本人女性の平均よりは）大きい。スタイルも良い。さらに、顔も良い。けど、本当は無茶苦茶乙女チックな本性を隠していたりする。

第一話 無謀突撃兵 五十嵐 へ〜ちよ

近未来。世界は未曾有の恐怖に覆われていた。

人を襲う未知の生命体。次々と侵略される文明圏。

この危機に対し、様々な国が最前線に軍隊を送った。

日本もまた然り。

これは、日本から送り込まれた軍隊から、はぐれてしまった四人の兵隊達の物語である。

「無謀突撃兵 五十嵐へ〜ちよ」

ジャングル未明

日本部隊第一隊所属 五十嵐奈由 兵長

五十嵐「みんなおきてー!!」

五十嵐は、眠っているほかの兵隊たちの上でフライパンを打ち鳴らす。

日本部隊第一隊所属 山崎健一 突撃兵

山崎「……ん、朝か」

日本部隊第一隊所属 浜田夏雄 工兵

浜田「おはよう、へ〜ちよ」

日本部隊第一隊所属 大島五郎 輜重兵

大島「うーん、まだねたいお……」

大島以外が起き上がるのをみると、五十嵐は丸いちやぶ台を囲むように座る。ちやぶ台の上には本日の朝食であるうものがきちんと四つおいてある。山崎も浜田も、へーちよと同じようにちやぶ台を囲む。

五十嵐「今日の朝ごはんは、わかめの味噌汁と麦飯、それに玉子焼きだよ」

浜田「へー玉子焼き。卵なんてまだ残ってたんだ」

五十嵐「うん。ただ、そろそろ食べないと危なそうだけどね」

と、食料が乗せてある輜重に目配せをする五十嵐。卵は見たところ、小ダンボール一箱分はあるようだ。

山崎「んじゃ、今日は鳥でも捕まえて親子丼でもするかな……」

浜田「いいですねそれ、山さん」

名案とばかりに頷く浜田。それとは裏腹に五十嵐は不服そうだ。

五十嵐「鳥さん捌くのは山ちゃんがやってね？」

ぶつと頬を膨らます五十嵐。山崎と浜田はそれを見て笑い出した。

山崎「しかたねえな、へーちよは」

浜田「わかってるよ。そういうことは男の仕事だものね」

五十嵐「そうだよ、女の子にそんな残酷なことさせちゃだめだよ」

大島（じゃあへ〜ちよは此処に何しに来てるお）

大島は、寝ぼけながらも声には出さずに突っ込んでみた。

五十嵐「とにかく、そういうのあたしは嫌だからね」

浜田「分かったつてば、へ〜ちよ。ほんとに怖がりなんだから」

山崎「ん、よかったら変わってやっても良いぞ浜田？」

浜田「や、山さん!？」

意地悪そうにほくそえむ山崎。うるたえる浜田。

五十嵐「何よ、なっちゃんも怖いんじゃないの」

五十嵐は眉毛を吊り上げて怒っている。

浜田「いや、そんなことは決して…… その」

山崎「ははは、冗談だよ、冗談。浜田ぼろが出たな」

浜田「で、できますよ僕だって、多分……」

大島「ご飯が冷めるお。早くいただきますするお？」

いつの間にやらちゃぶ台に向かっていた大島が言い、三人は顔をあわせる。

「「「いただきます」「お」

いただきをするもまもなく、玉子焼きにすぐに箸を伸ばしたのは山崎。やたらとでかい一切れを、一口にほお張る。

山崎「うん、なかなかだ…… ゴハア！」

言つや、口内の玉子焼きを力いっぱい吐き出す山崎。

大島「うわ、汚いお!!」

浜田・五十嵐「山さん!?!」

山崎「ケホ、ケホケホ…… へ〜ちよ。これいったい何で味付けした!?!」

山崎が箸先で示すのは無論玉子焼きだ。
当惑した表情で五十嵐は山崎のほうを見る。

五十嵐「えーと。ラベルが全部はがれてて分からなかったら、適当に黒い液体使ったんだけど……」

大島「うあ、それはないお」

浜田「またそんな無謀な……」

五十嵐「けど、ちゃんとおいしかったよ、その黒い液体」

山崎「だったら、お前はコーラを目玉焼きにかけるのか？ ああ!?!」

五十嵐「うう……」

浜田「まあまあ、山さん…… そんなに怒らなくても」

五十嵐「いいもん、私が全部食べれば良いんでしょ!?!」

そついつや、勢いよく玉子焼きすべて口内に書き込む五十嵐。
頬いっぱいにはお張り、膨らませた顔で山崎を見る。

五十嵐「ほはあ、へんふはべはほ はははふ……」

言いかけた途中で顔が青くなる。口元を押さえるや、勢いよく林のほうへと駆け出した。

戻ってきた五十嵐の頬は、ほおばる前よりこけていた。

五十嵐「ごめん山ちゃん…… あれは無理」

山崎「分かれば良い」

浜田「それにしてもいったい何を入れたんだい？ へ〜ちよ」

五十嵐「うん、これなんだけど」

そういうと、五十嵐は小ぶりの瓶を取り出す。

見た感じは刺身醤油といった感じだ。

五十嵐「このまま飲んだときはおいしかったんだけど」

浜田「いったい何なんだろう。コーラとは違う感じだし……」

浜田は瓶を両手に、その中身が何か思案する。あくまで思案するだけで直接確かめるつもりは無い様子だ。

大島「あ…… それは……」

今思い出したといった感じで大島がつぶやく。

浜田「ん、分かるのか大島」

大島「多分黒酢だお」

山崎「黒酢……」

五十嵐「そうか、それでおいしかったんだ」

納得といった感じの五十嵐と、思い出して不快といった感じの山崎。浜田は不思議そうに顔をしかめる。

浜田「けど、何でそんなものが此処に？ どう考えても嗜好品だろこんなもの」

大島「そうだお、嗜好品だお。こっそり魚醤とすりかえておいたお」

浜田「なんでまたそんなことを……」

大島「高部の陳情品だったからだお」

一同（大島を除く）静まり返る。

浜田「高部大佐の…… 陳情品……」

山崎「鬼の高部の陳情品」

五十嵐「?? 高部って誰？」

大島「むかつくおー。 大佐かなんだか知らないけど、自分だけ特別気分で許せないお。

けど、正直どうやって処理するか迷ってたところだから助かったお。

これでみんな共犯お」

血の気の引く音。

浜田（もしこんなことが憲兵にばれたら）

山崎（俺たちはおしまいだ……）

浜田と山崎が立ち上がる。

輜重の卵をご飯の上に割ると、黒酢を上からどっぷりかけ食べた。した。

五十嵐「山ちゃん？ なっちゃん？ 何してるの？」

山崎「見て分からないのか、卵かけご飯だよ」

五十嵐「え？ え？ 卵かけご飯には黒酢はかけな……」

浜田「いやあ！！ 新鮮な卵に魚醤はよく合うなあ……」

五十嵐「あ、え？ な、なっちゃん？」

二人は涙して卵かけご飯を食べ続けた。

日本部隊総督 乃木 三太夫

乃木「ん、磯臭いのおこの部屋」

日本部隊第一隊所属 高部 由紀子 大佐

高部「そうですか総督？」

乃木「ん、何を飲んだのかね、高部君？」

高部「黒酢です」

第二話 鳩胸肉編 Part 1

浜田「大量大量」

浜田は自分が仕掛けた罠から、鳥を引き出す。既に担いでいる袋には何匹が入っている模様。

浜田「これで、今日の夕食（親子丼）は大丈夫だな。

ついでに、から揚げなんか作っても良いかも」

工兵の浜田にとって鳥を捕まえる罠など、夏休みの自由研究程度のものだ。

浜田「黒酢も残ってるし……」

浜田は小刻みに震える。目は虚ろ、口は文字のごとくに開かれている。

よほど高部が怖いのであろう。

浜田「うん、鳥の黒酢あんかけとかも良いかもしれないな」

気を持ち直して、袋に鳥を入れなおしたそのとき。浜田の後ろからなにやら物音が。

浜田「な、何だ……」

おそるおそる振り返る浜田。ゆれている後方の茂み。

????「ガサ ゴソ ガサ ゴソ」

浜田「蛇か？ いや、この大きさからいって、豚か？」

じわりじわりと茂みに近づくと、浜田。すると、あと少しと「いっしょ」
ろで茂みの動きが止まる。

浜田（……気づいた？）

????「コ……」

浜田「コ？」

????「コケコツコー！！」

浜田「……なんだ鶏か」

????「コケー コケ、コケ」

ほつとした感じで胸をなでおろす浜田。

浜田「それじゃ、せつかくだから捕まえておくか！」

????「ハウ！？」

浜田「は、ハウ！？」

あからさまに出た人語に、再び場に緊張の糸が張られる。

????「は……」

ハウドウユドゥー

浜田「……なーんだ、やっぱり鶏か」

って、それはクックルドウドゥーだ！！

????「し、しもたー！！」

浜田「しもたー!? くっそう、ちよつと流暢な英語に危うく騙されるどころだったが、お前さては大阪人だな!!」

つつこむところはそこではない。それに、森林に鳥のまねしにやってくる暇な大阪人も多分居ない。

???「くくく、ばれてしまつては仕方が無いな」

茂みの物音が激しくなる。影を引きそこから現れたものは……

浜田「お、お前は!!」

.....

「ギャー!!!!」

五十嵐「なつちゃん!?!」

山崎・大島「浜田!?!」

食材調達じゃんけん勝ち、ちゃぶ台の前でマターリしていた三人はいつせいに声の方向を向いた。

五十嵐「今の声、たしかになつちゃんだったよね……」

山崎「ああ、ちがいねえ」

大島「というか、こちら辺に居るの漏れただけだから浜田しかないお」

五十嵐・山崎「それもそうか」

納得といった感じに手を合わせる二人。

大島（馬鹿だお）

五十嵐「それにしても何だろうあの声」

五十嵐は心配そうに森を見つめる。

大島「まるでびっくり人間でも見た感じの叫び声だったお」
五十嵐「びっくり人間って？」

振り返った五十嵐は大島の次の言葉を待っているようだ。対する
大島も、いきなり振られて具体名がすぐに出てこない。

一同「「「……………」」」

大島「…………… 首長族とか？」

大島、何とか具体名をひねり出す。

山崎「レイザーラ ンHGとか？」

山崎、すかさずフォローを入れる。

五十嵐「妖怪セーラー服男？」

五十嵐、何を勘違いしたか、とんでもないことを言う。

大島「火の上を歩く男？」

山崎「アマゾネス？」

五十嵐「仮面 イダー？」

大島「恐怖の人間ポンプ？」

山崎「Mr・マック？」

五十嵐「Mr・オク！！！」

大島（底抜けの馬鹿が居るお）

間の抜けてしまった大島。そんな大島をほうって置いて、山崎が
まともに入る。

山崎「まあ要するに。 江頭2：0ってことだな」

五十嵐「なるほど」

大島（納得するのにお）

さらに間の抜ける大島。

五十嵐「つまり重要なのは黒タイツというわけですか？」

大島（マニアックな上に馬鹿だお）

止めとばかりにそれを聞いた大島は、ちゃぶ台に突っ伏した。
と、そこへ男の高らかな笑い声が入る。

????「はっはっはっは。」

お前たち、そんな悠長なことをしていいのかな？」

山崎・五十嵐「だ、誰だ!？」

????「ふっふっふ。私は手羽先銀河ササミ系第七惑星肉団子が

らやってきた、宇宙人……

鳩胸肉マンだ!!」

山崎「は、鳩胸肉だつて!？」

鳩胸肉「そうだ!　とう!!」

そういつて現れた怪人鳩胸肉。頭が鳥で、尻には尻尾。なぜかボ
ディビルダーみたいな体格かつ、格好の怪人である。とりわけ、ベ
ースが人間なので、被り物をしたビルダーにしか見えない。

大島「クツクル先生みたいだお」

山崎「つうか、被り物だろその頭」

五十嵐「肉まん?　鳩のお肉つておいしいのかな?」

鳩胸肉「ひ、ひどい……」

第三話 鳩胸肉編 Part 2

突如五十嵐たちの前に現れた、手羽先銀河ササミ系第七惑星の鳩胸肉マン。いったい、奴の目的は、そして浜田の安否は如何に。

鳩胸肉「もつと怖がるなりなんなりしろよ。張り合い無いだろ！
」

鶏冠を真つ赤にして怒る鳩胸肉マン。鳩胸肉なのに、頭はどう見ても鶏だ。

山崎「お前らと戦うために此処に来てるのに、怖がるも何も無いだろ？」

山崎は正論を吐いた。

五十嵐・大島「「ね〜」だお」

鳩胸肉「うぐ。しかしだな、ヒーロー物とかの鉄則として」

山崎「宇宙人がヒーロー物とか語るなよ」

山崎はもつともらしい正論を吐いた。

五十嵐「それにあたしたち軍隊だし」

五十嵐はあやしい正論を吐いた。

大島（あんたがそれを言うのはおかしい気がするお）

大島は正論らしい正論を吐いた。

山崎「大体、ヒーロー物がどうとかって…… 暗に倒してくださいって言うてるようなもんじゃん」

五十嵐「そうだよな。もしかして、かませ犬さんなのかな？」

大島「負け犬根性が染み付いてるお」

鳩胸肉「うぐー!! うぐー!!」

山崎「それに、どっからどう見たって被り物みたいな頭だし。実際お前、マスクマンじゃないの」

大島「マスクとったらピカーって光るお。『うおっまぶしっ』って。」

山崎「居そうだよな。ああいう超人。悪 超人とかで……」

大島「しかも人気無くて、今後絡んでこない捨てキャラだお。きつと、スプリン マンとかだお」

山崎「いや、ベン マンだろ」

やんやんやんと、キ 肉マン論争を始める山崎と大島。鳩胸肉マンはというと、鶏冠はしなだれ目は濁り全身から不のオーラを発散させている。

鳩胸肉「お前たち、まるで俺をジャ プ黄金期のプロレス漫画に出てる、超人みたいに言いやがって」

山崎・大島「「そうじゃないのか?」お?」

そのとき、何かが切れる音がした。

鳩胸肉「ちがうわー!! おれは、噛ませ犬でも悪 超人でもねえ!! 宇宙人、鳩胸肉マンだ!!」

山崎「はあ」

鳩胸肉「はあ、じゃねええ!! 俺をなめ腐りやがってえ!! ためえら全員、プロイラーの如く炙り焼きにしてやる!! 幼くし

て食肉にされる、鶏の気持ちをちったあ思い知れ!!」

鳩胸肉マンは先程と打って変わり、鶏冠を真っ赤に充血させ、ブロイラーの如く真っ赤な顔をしている。

大島「鳩胸肉マンなのに、顔とやってることは鶏だお」

怯えるでもなく冷静にツツコミを入れる大島。

鳩胸肉「うるせえ!! 好きでこんな顔に生まれたんじゃねえし、名前になつたんじゃねえんだよ!!」

大島の言葉にさらに逆上したのか、鳩胸肉マンは白目をむいて、口をだだびろげにする。

山崎「どうでもいいけどよ、ベン マン?」

鳩胸肉「誰がベン マンだ!!」

山崎「前見る」

いつの間に近づいていたのか、五十嵐が鳩胸肉マンの懐に潜り込んでいた。

五十嵐「無謀突撃!!」

鳩胸肉「うおおおお!!?」

五十嵐の捨て身のタックルが鳩胸肉マンの胸板にクリーンヒットする。当たり所が悪かったのか、五メートルくらい鳩胸肉マンは吹っ飛んだ。

大島「今だお!!」

言うが早いか山崎と大島が、倒れている鳩胸肉マンに駆け寄る。
二人はリ　チよろしく、鳩胸肉マンを蹴りだした。

山崎「オラ！！　オラ！！　オラア！！」

鳩胸肉「やめて、痛い。ちょ、おま。そこは、ふぐう！？　おほ

……」

力いっぱい蹴りを入れる山崎。

大島「宇宙人め、成敗してやるお！！」

鳩胸肉「ぬふう！！　へぶ…　あべし！！」

力こそ足りないものの、えげつないところを平然と蹴りあげる大島。

五十嵐「えーい。えーい」

そこに五十嵐も混ざる。

鳩胸肉「たんま！！　たんま！！　ちよつとたんま！！」

たんまの声に一同の足がやつと止まる。

鳩胸肉「お、お前ら悪魔か！？」

五十嵐「地球を侵略する宇宙人に、容赦など無用なのだ」

山崎・大島「おなじく」だお」

鳩胸肉「人道的に間違ってるだろ！！」

山崎「侵略者にそんな事言われる筋合いなど無い」

大島「侵略者が人道的とか、そっちのほうがどうかしてるお」
五十嵐「ねー、そろそろ再開しない？」

五十嵐の言葉に、鳩胸肉マンの顔が引きつる。

鳩胸肉「わーちょっと。まだ、まだ。あと三分だけ待つて。三分だけ」

五十嵐「えー」

大島「逃げる気だお」

鳩胸肉「逃げないって！！ ちよつと行つてすぐ帰ってくるから。ね？ ね？」

山崎「信用できないな」

鳩胸肉「信用してよ。ほら、すぐそこ。すぐその林に行つて戻つてくるだけだから」

五十嵐「戻つてこなかったら、針千本だからね」

鳩胸肉「針千本でも、千本ノックでも受けるからさ。ね？ ね？」

大島「よし、行つて来るお」

鳩胸肉「よし。そこで、待つてる。すぐ戻ってくるからな！！」

鳩胸肉マンは立ち上がると出てきた林のほうへと駆ける。そして、一度茂みの中にしゃがんだかと思うと、なにやら重そうなものを肩に担ぎだした。

よく見れば、浜田である。

鳩胸肉「お前たち！！ こいつの命がどうなってもいいのか！！」

五十嵐「な、なっちゃん！！」

山崎「べ、ベン マン！ てめえ！！」

大島「汚いお！ ベン マン！！」

鳩胸肉「お前らに言われたかねえよ!!」

ぐるぐるに縄で縛られた浜田は泣きながら五十嵐達に助けを求めている。

五十嵐「なつちゃん!! 大丈夫!？」

浜田「へ〜ちよ助けてー!! こいつ、鶏糞の匂いがして臭いんだー!! それに汗っぱいしむさ苦しいし!!」

山崎「うわぁ!! 最悪だな」

大島「べつとり匂いが染み付いてしばらく取れなさそうなお」

五十嵐「うそ、あたしタツクルしたけど大丈夫かな……」

山崎「どうする、そんな臭いの助けてもしょうがないしな」

浜田「そんな!! 山さん、見捨てないでー!!」

涙を流して嘆願する浜田。

五十嵐「みんな、いくら臭そうだからって、仲間を見捨てたら人間失格だよ!!」

五十嵐がリーダーらしく皆の前に立ち雄弁を振るう。

大島「だったらへ〜ちよが助けに行けば良いお」

山崎「そうだ、タツクルして匂いも移ったし、ちようどいいじゃねえか」

五十嵐「いやよ、これ以上鶏糞臭くなりたくないもん」

五十嵐の雄弁はきっぱりと詭弁に変わった。

浜田「皆酷いよー!!」

鳩胸肉「人間としてどうかしてる……」

あきれた様子で鳩胸肉マンは、誰が助けに行くかでもめている一行を見つめる。

鳩胸肉「えーい。皆の者、こいつを返して欲しくば、そこを動か
なよ」

山崎「く、卑怯だぞ！ どうするつもりだ!!」

五十嵐「皆、ここはおとなしく奴のいう事を聞きましょう」

神妙になった五十嵐たちに、鳩胸肉マンは悪人らしくほくそえむ。

鳩胸肉「よし、それで良い。おとなしくそこでま…… って、
おい!! 何動いているんだ」

浜田「お、大島あゝ!!」

大島は五十嵐の命令も無視して、ちゃぶ台になにやらとりに戻る。

五十嵐「島ちゃん。おとなしくしないと、なっちゃんか!!」

大島「おとなしくしたところで、結局やられるだけだお。だった
ら、別に言うことを聞く必要なんてないお」

山崎「それもそうだな」

五十嵐「山ちゃん!!」

山崎もそれもそうだという感じでちゃぶ台に戻る。一人残った五十嵐はおろおろと浜田の方を見ている。

五十嵐「なっちゃん!! 私は見捨てないからね!!」

浜田「ありがとう、へ〜ちょー!!」

鳩胸肉「くそう、まあ良い。一人ずつ地獄に送ってやるぜ!!」

そういつと、鳩胸肉マンは大きく口を開き力みだした。

五十嵐「な、何？」

山崎「卵でも産む気か？」

それは違う漫画だ。

鳩胸肉「ふふふ、喰らえ!! 八ト…」

大島「それは既出だお」

鳩胸肉マンの動きが止まる。と、同時に鳩胸肉マンの額に一筋の汗が流れる。

鳩胸肉「既出？」

大島「今さつき、『ハト 必殺技』でググツたお。そしたら、既に口からビームを打つのが他の漫画であつたお。違うのにするお」

大島の前にはどこから取り出したのか、ノートパソコン（FMV）が置いてある。

鳩胸肉「え…… ええ？」

大島「違うところからビームを打つお」

鳩胸肉「い、いきなりそんなことを言われても……」

おもいつきり鳩胸肉マンがたじろぐ。

大島「はあ…… 駄目だお、悪 超人の癖に技がパクリだ何て。そんなんだから人気が出ないお」

山崎「そうだそうだ！！ このパクリ超人」

大島「技をパクルなんてやる気以前の問題だお」

山崎「やる気あんのか、コノヤロー」

五十嵐「やる気あんのかー！！」

鳩胸肉マンに浴びせられるブーイングの嵐。いつの間にやら鳩胸肉マンは額に汗をかきまくっている。

鳩胸肉「そ、そんな、ま、まだ出してないから…… パ、パクリとかそういうのじゃ……」

大島「じゃあ早くやるお」

五十嵐「早くやれー！！」

山崎「やる気あんのか、コノヤロー！！ 金返せー！！」

うろたえ気味に周りを見回すと、鳩胸肉マンは硬直する。

鳩胸肉「……」

五十嵐・山崎・大島「……」

鳩胸肉「ち……」

五十嵐・山崎・大島「「ち?」「」」

鳩胸肉「チクビーム!!」

自慢の鳩胸に手をよせてアップする鳩胸肉マン。
しかし、それよりもあたりを包む静寂の方が痛かった。

大島「それもパクリだお」

鳩胸肉「グハア!!」

羞恥心と自尊心からか、鳩胸肉マンは血を吐いてその場に倒れた。
投げ出された浜田に五十嵐たちは駆け寄る。

鳩胸肉「くは、いつつもそうやねん。わし、いつつも人のネタパ
クって

ほんまどうしようもない奴何や…… わいは……」

山崎「ベン マン……」

五十嵐「嘸ませ犬さん……」

鳩胸肉「笑え、笑えよ!! 排気ガスで汚れてしまった黒鳩と笑
っておくれよ」

大粒の涙を流し地面に突っ伏す鳩胸肉マン。そこに、大島が手を
差し伸べる。

大島「立つお」

鳩胸肉「あ、あんた…… わいはあんたらを殺そうとしたのに…

…」
大島「お前は自分を少し見失ってただけだお。ほら鏡をしてみるお」

大島は鳩胸肉マンにそつと手鏡を手渡した。自分の顔を覗き込み、鳩胸肉マンは酷く驚く。

鳩胸肉「この顔は…… お、俺…… そ、そんなまさか……」

大島「そうだお、お前は鳩なんかじゃないんだお。だから、これからは本当の自分を出して生きていくんだお」

鳩胸肉「お、お…… 俺」

大島「もう、大丈夫だお。お前は自分が何者であるか今知ったお。これでもう自分を見失うようなことは無いお。そうすれば、誰もお前をパクリ野郎だ何ていわないお。さあ、胸を張るお」

鳩胸肉の涙は、いつしか感涙に変わっていた。立ち上がると、しっかりと大島の手を握る。

鳩胸肉「俺、やっと分かりました。これからは、本当の自分を皆に見せていきます……」

鶏として生きていきます!!」

大島「いや、お前はチャボだお」

鶏ですらなかった。

第四話 O u s h i m a i s a V I P E R

五十嵐「島ちゃん、お醤油とって〜」

手で探れるほどの調味料置き場に、醤油が無いことを思い出した五十嵐は、暇そうな大島に持つてくるように頼む。

本日の夕飯である親子丼を焚き火の上で作っている五十嵐は、フライパンから手を離せない。

大島「わかったお。浜田醤油もって行ってあげるお〜」

ちゃぶ台でノートパソコンに向かいななやら打ち込んでいる大島は、めんどくさいのか伝言ゲーム調に浜田に命令を飛ばす。

浜田「もう。醤油取りに行くくらい自分でできるだろ大島」

大島「働いたら負けかなと思ってるお」

浜田「わけわかんないよ」

しかしながら、やれやれといった感じで醤油を探し五十嵐の下へ持つていく浜田。人がいいのか、抜けているのか。

なににせよ、大島はそんなことを脇目にも入れずに、ひたすら何かを打っている。

五十嵐「お醤油、お砂糖、だしのもと…… あと、何入れるんだっけ？ 島ちゃん！」

調べようにも、料理の本が無いので仕方なく人に聞く五十嵐。今まで一生懸命何かを打っていた大島も、いったんタイプを中断する。

大島「ちよつと待つお。いまググルお」

浜田「お酒じゃなかったっけ？」

五十嵐「んゝなんか違うと思う……」

大島「わかったお！ みりんが足りないお」

浜田「ああ、みりんか！」

五十嵐「島ちゃんありがとう！」

大島「おいしい親子丼作ってくれだお」

と、そこでライフルの整備をしていた山崎の手が不意に止まる。

山崎「ちよつとまで、大島」

大島「ん、なんだお？」

山崎「それはいつたいなんだ？」

そういつて山崎は大島のノートパソコンを指差す。

大島「F Vだお」

山崎「いや、そういうことじゃない。

なんでノートパソコンが動いてるんだ？」

五十嵐、浜田の手が止まる。

そういえば確かにそうだ。まるで当たり前の如くノートパソコンを使う大島に、今まで疑問のぎの字も思いつかなかった。が、よくよく考えると、ジャングルの奥地でどうやって、ノートパソコンに電気を供給しているのか。

大島「ああ、そんなことかお」

固まる五十嵐・山崎・浜田を前に、気にしないそぶりでキーボードをタイプしながら答える大島。

大島「大型ソーラー発電機があるからそれで発電してるお。ほら」

そういつて引つ張ったFMVの電源コードの先には、確かにソーラー発電機がある。

山崎「なるほど、それでパソコンができるのか」

大島「今は必要ないけど、扇風機とヒーターまわす位の電力は余ってるお」

五十嵐「じゃあ、暑くなっても、寒くなっても大丈夫だね！」

大島「そうだお。さ、分かったら邪魔しないお！」

山崎「……………」

大島「今北産業」

山崎「……………」

大島「やあ（、・・、）」

山崎「まで、大島！！ おまえ、何やってるんだ？」

大島「またかお、今日はいいじゃないどうしたお」

大島は手を止めて、めんどくさそうに山崎をにらみつける。

山崎「おまえ、今いったい何をしてるところだったんだ？」

大島「V Pでスレ立ててたお」

山崎「V P? なんだそれは…… まあいい。つまり、インターネットしてたわけだな?」

大島「そうだよ」

山崎「なんでこんなジャングルの奥地で、インターネットに接続することができるんだ!!」

五十嵐、浜田の手が止まる。

そういえば確かにそうだ。まるで当たり前の如くインターネットをする大島に、今まで疑問のぎの字も思いつかなかった。が、よく考えると、ジャングルの奥地でどうやって、インターネットに接続しているのか。

大島「ああ、そんなことかお」

そういつて大島はLANケーブルを指差す。LANケーブルの先にはなにやら怪しげな装置二つを経由した後、衛星放送受信用のアンテナにつながっていた。

大島「衛星経由でデータを落としてきてるお」

山崎「な、衛星?」

大島「そうだよ。日本軍上空を飛んでいる静止衛星とやり取りして、データを送ってきてもらってるお。で、アンテナに近いほうが衛星モデムで、もうひとつがルーターだよ。まだ腐るほど開いてるから、PCさえあればまだつながるお」

五十嵐「へー。じゃあ、私も一台買ってこようかな?」

大島「だったら、これを譲るお。そろそろ新しいのが欲しかったお」

嬉々として語る五十嵐。

しかし、山崎の眉間には皺がよったままだ。

山崎「山崎。こんなこととして、お前金は大丈夫なのか？」

大島「ん〜。民間使つと月々大体20万円くらいかかるお」

山崎「……どこからその金は捻出してる」

山崎の眉間の皺が重なり、顔がいつそう険しくなる。

大島「大丈夫だお。」

高部の所有物だから、使用量とかの請求は全部高部にい
くお」

山崎・浜田の血の気がさつと引く。

大島「機械音痴のあいつが持つても使いようが無いお。漏れが
使ったほうがよっぽどこいつらも幸せだお」

山崎「つまり、それは高部大佐の陳情品ということなんだな……」
大島「そうだお」

悪びれるわけもなく言い放つ大島。

その態度に、さらに二人の血の気が引く。

浜田「ま、まさかこれも……」

そういつて、浜田が指差したのはソーラー発電機。

即答といった感じに、大島は首を縦に振った。

大島「そうだよ。あいつが持ってても宝の持ち腐れだよ」

山崎・浜田「……」

大島「だいたい、おかしいお。」

インターネットがしたいとか言って、わざわざ自分専用の衛星を打ち上げるなんてどうかしてるお。

あまつさえ、発電機まで用意して、おまけに最新型のノートパソコンだよ。

そういうのはパソコンを終了できるようにしてからするお」

山崎・浜田「……」

大島「昔からそうだよ。何かにつけていい設備だけそろえて、結局どれも使いこなせ……」

大島の熱弁をよそに、二人はどんどん風化していった。

乃木「高部君。パーソナルコンピューターがつけっ放しじゃぞ」

乃木総督はソファアークでくつろいでいる高部をたしなめるように言う。

高部は申し訳なさそうに起き上がると一礼する。

高部「乃木総督。すみません、私終了の仕方がワカランのです」

乃木「なんと、それは困ったのう」

パソコンの前で硬直する大の大人が二人。

乃木「しかし、パーソナルコンピュータが使えるとは。おぬしも中々やるのう」

高部「いえ、私などまだまだですよ」

乃木「どれこの老いぼれに何か教えてくれんかのう」

高部「では、マインスイーパーなど……」

第五話 山さんの憂鬱

山崎健一（29）

元フランス軍外国人部隊所属の狙撃兵。

過去に三度の戦争を体験。その度に、最前線において数々の武功を立ててきた、兵の中の兵。

日本軍の軍隊派遣とともに除隊した彼は、すぐさま日本軍に志願陸軍付けとなり、四度目もまた最前線へと赴くこととなる。

しかしながら、彼が元フランス軍の狙撃兵であることは、知られていない。

一緒に生活をする五十嵐たちでさえも……

山崎「あ〜ついな〜」

浜田「山さん、扇風機の前占領しないでくださいよ」

五十嵐「そうだよ山ちゃん。扇風機は皆のものだよ!!」

扇風機のまん前に座り、風を遮断している山崎に五十嵐たちは辛らつな言葉を浴びせる。が、そんなこと気にするものかと、山崎は扇風機の前に陣取る。むしろ、胡坐をかき居座り始めた。

浜田「山さんってば〜」

山崎「いいじゃねえかよ、食材取りに行つて疲れてんだからよ」

大島（じゃんけんで負けた自分が悪いお）

毒づこうと思ったが、この炎天下。流石の大島も言つのをと戸惑ってしまう。

五十嵐たちのキャンプ地は、ここ数日最高気温を連続更新してい

た。無論、熱帯雨林のジャングル。日本の最高気温などへでもないほどに暑く、そして蒸れる。

最初に音をあげたのは五十嵐。次に大島。浜田。最後が山崎だった。

何とかならないかと、陳情品をあさったところ、これ幸いに扇風機があった。

そのおかげで何とかここ数日、誰も発狂せずにすんでいる。

しかしながら、クーラーの聞いた部屋で生活してきた日本人が、こんな環境下で扇風機だけで到底耐えられるわけがない。

そんな中、たとえばじゃんけんで負けたとはいえ、朝一でわざわざジャングルを歩き回って食材を探してきた山崎に、感謝こそすれ文句などおこがましかった。

だが、だからといって扇風機無しで我慢しろというのも到底無理な話だ。

大島「山崎、独り占めはよくないお。皆あついお。」

五十嵐・山崎・浜田「「おまえが言っな、お前が!!」「」

なお大島は、USB電力で動く扇風機に一人で当たっていた。

五十嵐「とう!!」

いって、五十嵐が扇風機つまみを押し込む。

扇風機は左右に首を降り始めた。

山崎「あ、へ〜ちよ! てめえ!!」

五十嵐「いいじゃん、せめて首振りにしようよ。」

浜田「僕たちだって暑いんですから、いいじゃないですか。」

五十嵐「そうだよそうだよ。食材集めは大変だろうけど、あたし

だつてお料理暑くて大変なんだからね!!」

浜田「僕だつて、皆の洗濯とか、部屋の掃除とかで結構疲れてるんですから」

大島「そつだおそつだお」

山崎「お前は働いてないだろ!!」

それがV Pクオリティとかつぶやく大島をよそ目に、山崎は五十嵐たちを見つめる。

流石に汗だらだら二人にここまで迫られると、最年長としては立場が無い。

山崎「わかつたよ」

五十嵐・浜田「わーい」

山崎をはさむように二人は扇風機に座る。こうして三人は仲良く扇風機に当たり始めた。

五十嵐「あ〜〜」

浜田「あ〜〜」

五十嵐・浜田「あ〜〜」

扇風機の前で仲良くデュエットをはじめた五十嵐と浜田。間抜けな声が当たりに広がる。

山崎「こら、やめろそついつの」

五十嵐・浜田「ヴェ〜〜」

山崎「気持ち悪いだろ」

五十嵐「そんなこと無いよ。ねー？」

浜田「ねー」

仲良さげに、首を横にたらす二人。はあと、山崎がため息をついた。

山崎「ねーじゃない。とにかく、扇風機に向かって声出すのは禁止だ」

五十嵐・浜田「「ヴえ〜」」

山崎「だからやめろつてのー!!」

大島「ヴえ〜」

山崎「お、お、お、し、ま!! お前も禁止だ!!」

振り向いてちやぶ台でネット中の大島をしかる。大島の顔は愉快そうに笑っていた。

五十嵐「か〜え〜るの〜う〜た〜が〜」

浜田「き〜こえ〜て〜く〜る〜よ」

大島「グワア」

五十嵐・浜田「『グワア』」

大島「グワア」

五十嵐・浜田「『グワア』」

大島「グワア」

五十嵐・浜田『『グワア』』

大島『グワア』

五十嵐・浜田『『グワア』』

五十嵐『ケロケロケロケロ』

浜田・大島『『グワアグワアグワア』』

扇風機前の見事な輪唱が終わるとともに、山崎は立ち上がる。

五十嵐『どうしたの山ちゃん？』

山崎「ここじゃ涼めん。川のほうに行ってくる!!」
浜田『じゃあ、山さん。水もついでに汲んできて』

浜田が指差したバケツを見て山崎はため息をついた。

山崎「なんか違うんだよな……」

膝までを水に付けながら山崎はつぶやいた。

山崎「ドンパチするでもなく、訓練するでもなく。日々これサバ
イバル……」

つうか、電気が通ってる時点でサバイバルじゃないか」

ちやぶちやぶと、水音が立つ。大きな木の枝が上を覆っている其処は、絶好の涼みのスポットであった。と、近くの湧き水は貴重な彼らの水源でもある。

山崎「俺がしたいのは戦争であって、サバイバルごっこじゃないんだよね」

思い出されるのは、外人部隊のころ。あのころはもっと一日が充実していた。というよりも、一日に張りがあった。いつ死ぬかわからない緊張感、それは最高に自分が生きているということを証明してくれていた。

それに比べ、はたして今の俺の生活は生きているというのだろうか。日にまして分からなくなっていく俺という生。何もしいという事は死ぬというのと同じなのではないだろうか。たまに、そんなことを考えたりしてしまう。

そう思うようになると、いつの間にか五十嵐たちの前から姿を消すようになっていた。

山崎「やめるんじゃないかな……」

ごろりと横になる。葉の陰から覗ける、ギラギラとした太陽がまぶたを貫く。

目を閉じれば更に自分の生がなんなのか分からなくなっていた。むしろいつそのまま生などと考えなくなってしまうといいと、山崎は思った。

.....

山崎が起きると当たりは真っ暗だった。

急いでバケツに湧き水を汲むと、山崎は五十嵐たちのキャンプへと駆けた。

山崎「やばいな。みんな心配してるだろうか……」

バケツの水はこぼれて既に半分程になっているが、気にした風でもなく走る山崎。

すぐさまテントの明かりが見えてくる。

山崎「悪い皆！！ 寝ちまつてた！！」

山崎が走りこんだ先では、既に五十嵐・浜田・大島がちゃぶ台についていた。

五十嵐「もう、おそいよ山ちゃん」

浜田「ご飯冷めちゃったじゃないですか、山さん」

大島「飯の時間に来ないとはどういう了見だお」

息を切らした山崎を気遣うでもなく、言う三人。ふと、山崎が目をやった先には、冷めた味噌汁と得体の知れない焼肉が四人分置いてあった。

山崎「んだよ。皆して待たなくても良かったのに」

五十嵐「何言ってるんの山ちゃん。食事は家族全員ですから楽しいんだよ?」

浜田「そうですよ、山さん」

山崎が面食らった表情で一瞬固まった。

大島「どうしたお山崎。暑さでついにおかしくなったお?」

山崎「いや…… なんでもねえよ」

そういつて歯を出して笑うと山崎はちゃぶ台につく。

五十嵐「それじゃあ、皆そろったところで

いただきますー!」

浜田・大島「いただきます!」お!

山崎「…… いただきます」

目をつぶって小さな声で言うと、山崎は白いご飯に箸を伸ばした。

山崎(まあ、しばらくはこういう生活も悪くないかもな)

.....

浜田「よかった、気づかなかった様だね」

五十嵐「うん。よかったよかった」

大島「昼飯に牛丼食べたって言ったら山崎きつと滅茶苦茶おこっ
たお」

五十嵐「もう少しで夕食も食べちゃうところだったけど、タイミ
ングよく来てくれて助かったよ」

浜田「しかし、昼飯も食わないでいったい何してたんだろ? 山
崎さんは」

大島「きつといろいろ溜まってたんだお」

第六話 怪談編 Part 1

五十嵐「暑いよ〜」

山崎「暑い」

浜田「暑いね」

大島「暑いお」

五十嵐・山崎・浜田・大島「「「暑い〜!!!」「「お」

電気スタンドひとつポツリとたったちやぶ台に集まりながら、四人はばてた様子で叫ぶ。

既に当たりは闇に包まれ、天幕には星が輝いている。

山崎「夜になってもまだ暑い、ジャングルってのはこれだから嫌だ」

浜田「寝る気にもなれないし、服はべたつくし。勘弁して欲しいよね」

大島「PCからの発熱が凄いわ」

男三人は前のめりにちやぶ台に横たわっている。浜田・大島の目には既に生気が無い。かろうじて、生きた目をしている山崎も、顔中に汗をたらし、目をつぶる体たらく。

五十嵐「みんな弱気になっちゃ駄目!!!」

紅一点にして唯一元気の残っている五十嵐が、ちやぶ台の上に立つ。

五十嵐「暑い、暑いって言ってたら余計暑くなっちゃうよ!!!」

大島（今暑いって三回言ったお）

浜田「だからってどうしろと?」

五十嵐「暑くない、暑くない。ここはぜんぜん暑くない。暑くないか無いんだあ〜!! っと思っのよ。そうすれば暑くなくなる!」

大島（暑いって言ってるのと変わらないお）

山崎「じゃあやって見せろよへ〜ちよ」

五十嵐「いいよ。そこで皆見ててね!」

そういつや五十嵐は、ちゃぶ台の上で胡坐を組み、先程の言葉をつぶやきだした。

一分後。

五十嵐「ごめん、無理です」

ばたりとへばる五十嵐。あきれることも出来ず、ちゃぶだいに突っ伏す男三人。

山崎「なんかこう、気分だけでも涼しくなるような物無いのか、大島?」

大島「それならこういいうのがあるお」

取り出したのは黄金のテープ。大島は扇風機の前まで行くと、それを前面に取り付ける。

山崎・浜田「おお」「

扇風機の風に伴いきらきら輝く、黄金のテープたち。

大島「どうだお？」

山崎「いや、ぜんぜん涼しくならない」

浜田「むしろ、うざったいよね」

五十嵐「贅沢は敵だー!!」

大島「わかったお、ならばすすお」

扇風機の前テープは五分と足らずで取り外された。

山崎「違うんだよ…… もっとこう、ヒヤッとしてゾクッとするようなの」

身振り手振りでその感覚を表現する山崎。

と、それを見ていた浜田がぼんと自分の手をたたいた。

浜田「怪談？」

山崎「そう、それ!!」

山崎が浜田を指差した。

と、途端に涙目になる五十嵐。

五十嵐「嫌だよ。怖いのはパス、パス、パスう!!」

ブルブル首を横に振りながら泣いて懇願する五十嵐。
山崎はそんな五十嵐に無視を決め込む。

山崎「お前は賛成だよな大島！」

山崎が大島に話を振る。

大島「ニヤソ」

大島以外の人間の動きが止まった。
かつて見たことの無い顔つきで大島が立っているのだ。
笑っているのか、といまだかつて大島の笑い顔を見たことの無い
彼らは思った。

大島「いいお、怪談やるお」

同時に彼らは、『地雷を踏んじまった』と思った。

.....

大島「一人ひとつずつ怖い話をするお」

そういつて大島はちやぶ台の前のろうそくに火を灯す。

大島「そして、話が終わったときに、自分の前の蠟燭を消すお」

浜田「あの〜大島さん…… えらく本格的なところ悪いんですが
……これは百物語じゃ」

大島「そうだよ」

浜田「出るんでしょうか？」

大島「出るお」

怯えた表情の浜田達をよそに、一人楽しそうな大島。五十嵐などは先程から子犬のように凍えている。

大島「まずは山崎から。右回りでどんどん話していくお」

山崎・五十嵐・浜田・大島の順になっている。多分自分を最後に持ってきたかったのだろう、と誰もが思った。

五十嵐「ねえ、島ちゃんやっぱりやめようよ」

大島「中途半端にやめると霊が怒るお」

言つや否や、五十嵐の後ろの森がガサガサと音を立てた。それで更に萎縮したのか、五十嵐はちゃぶ台の下に頭を隠してひたすら霊に謝っていた。

大島「それじゃ、始めるお、山崎」

まさか此処まで本格的にやるとはという感じで、大島を見ていた山崎。しぶしぶといった感じで頭をかくと、語りに入った。

山崎「

ある高校にAとBという男がいた。二人は親友で部活も一緒。成績も一緒くらいという似たもの同士だった。

ところが、あるときAの方に彼女が出来た。流石にこればかりはBも一緒とはいかなくて、後ろめたいのか恥ずかしいのかAはしばらくこのことをBに黙っていた。

が、ひよんなことでその事を知ったBは、何で俺に知らせなかつ

たんだと大激怒。それ以来二人はまったく口を利かなくなってしまった。

やがて、卒業の季節が近づくころには二人とも似ても似つかないほどに変わってしまった。

Aの方は大学進学も決まり順風満帆。彼女ともうまくいっておりばら色の青春。

対してBの方は、滑り止めにも引つかからず浪人決定。挙句借金の所為で、直ぐにでも働かなくてはならないという有様。

結局Aは高校を卒業したが、Bは自主退学。その後二人が会うことは無かった。

それから10年後。

Aはめでたく高校のときの彼女と結婚し、一男一女をもうけていた。

そんな彼の元に高校の同窓会の案内が届く。

なんとなしにBに対し後ろめたさを感じていたAは、会ったならばあのときのことを謝ろうと決心し、会場に向かった。

しかし、会場に着けばBの姿は無い。

親しかった友人に聞けば、退学後は年賀状の挨拶もなく、誰もどこに住んでいるのか分からないとのことだった。

その夜Aは友人達と飲み明かし、ついに家に帰ることは無かった。

翌朝、友人の家で朝食を食べていると、面白そうに友人が手紙を持ってきた。

それは、彼が友人に出した今年の年賀状だった。

ただ奇妙なことに、何故か二枚あるのだ。それは、まったく同じ裏面で、何故か住所だけが違っていた。

いや、裏面も少し違う。

よく見ると、真ん中に移っている人物が違っていた。

そう、それは久しぶりに見るが、Aのかつての友人Bだった。

何故、こんなものを。

友人に聞いたはずも、年末に引越してもしたのかと思っていたと
のことで、Bのことは知らないという。

幸い手紙の住所は友人の家から近かったので、AはBにこのこと
を聞いたはずBの家へと向かった。

Bの家はAの家とまったく同じだった。家の外装、駐車場から庭
のつくりまでまったくそのまま。ただひとつ、門の前に掘られた苗
字だけが違うだけだった。

おそろおそろの玄関に近づいたAは、ベルを鳴らす。二度・三度押
してもBが出てくる気配は無い。

留守だろうか。

そう思って、ドアノブに手をかけると、なんとすんなり開いた。

なんだ、いるのではないかと、一応断って中に入るA。中のつく
りもまったくAの家と同じようだった。と、何気なしに向いた先で
目に入ってきたものに、Aは驚く。

自分の息子が、リビングでくつろいでいるのだ。

土足なのも忘れて息子の居るリビングへと走るA。なぜここに居
るんだと、息子をつかみあげる。

すると、その首がポロリと落ちた。

人形だった。

息子だけではない。

キッチンには妻。ソファには娘。それぞれの人形がまるで生活しているかのように、Aの家で暮らしているのと同じように置いてあるのだ。

しかし、自分の人形が無い。

そのとき、不意に二階から物音がした。

Bだろうか。恐ろしいながらも、このことについてBに聞かねば気がすまなくなったAは二階への階段を昇る。

どうやら寝室から、その物音はしているようだった。

ゆっくりとドアノブに手をかける。見渡せば、見慣れた目覚まし時計がけたたましく鳴っていた。

「ピリリリ ピリリリ」

Aの携帯が鳴った。家からの電話だった。多少肝を冷やしながらかも、直ぐに電話に出るA。

「あなた、今どこに居るの？ 泊るなら泊るって事前に言ってくださいよ」

「すまんすまん。すぐに帰る」

男はほっとした表情で、クローゼットにもたれかかった。と、いとおしい子供達の声が微かに聞こえてくる。

「ママ〜。パパ帰ってきたよ」

「「え？」」

「待て、切るな」とAが言おうとした時、電話はもう切られていた。

何がなんだか分からない、いったいどうなっているのだろうか。

Aは苛立ちを抑えきれずにクローゼットを殴りつけた。と、なにやらクローゼットの中から鋭い金属音がする。

震える手でクローゼットの取っ手に手をかける。

そこには、制服からマタニティまで身に着けた、過去の妻の姿をした人形が所狭しと収められていた。

「

.....

山崎「どうだ？」

大島「まあまあだったお」

浜田「げに恐ろしきは人の業なり…… ってやつかな」

山崎「まあこんなもんか」

そう言って山崎は目の前の蠟燭を消した。

大島「さて、次はへ〜ちよの番だお」

五十嵐「……………」

浜田「へ〜ちよ？」

そういって、浜田が五十嵐の顔を覗きこんだ。

浜田「気絶してる……………」

第七話 怪談編 Part 2

浜田「へ〜ちよ！ へ〜ちよってば!!」

五十嵐「う〜ん。はっ、なっちゃん!? あたしいったい……」

倒れていた五十嵐はガバリと立ち上がる。きよろきよろとあたりを見渡して、今ひとつ心の整理が出来てないようだ。

大島「山崎の怖い話で気絶してたお」

五十嵐「え、あ。そっか。たしか、息子さんから電話がかかってきて…… それで……」

浜田「無理に思い出すと、また気絶するからやめた方がいいよ」

五十嵐「え、あうん」

浜田に言われ少し考えた後、五十嵐は席に座った。

大島「さて、山崎の話が終わったところで、今度はへ〜ちよの番だお」

五十嵐「あ、あたしの番?」

大島「びしっ」と怖い話を頼むを」

未だに脳内の整理がついていないのだろうか、五十嵐は何を言っているやら分からず不安げに空を見つめる。

大島「どうしたお、はやくするお」

五十嵐「え〜と、その…… う〜んと……」

五十嵐「ム、ムックは、イエティの子供!」

一陣の風が吹く。何を言っているのか分からず、五十嵐以外の人間がみな固まった。

浜田「へ〜ちよ。それは怪談じゃなくて、トリビアだよ？」

五十嵐「えっ、え？ それじゃ、ガチャピンは恐竜の子供で、二人とも卵から産まれたって言うのは？」

大島「それもトリビアだよ」

山崎「へ〜」

大島、浜田のツツコミに、ますますテンパる五十嵐。あわあわと、目を回しあせっている。

五十嵐「それじゃえーと。二人は師弟関係だったり、実はガチャピンがブログつけてたりするのは？」

浜田「トリビアだね」

大島「というか、全部ウィキペディアからの転載ばかりだよ」

山崎「へ〜へ〜」

五十嵐「そ、それじゃ、あの。たべちゃ〜う」

大島「既出」

五十嵐「はうはう……」

へたりと落ち込む五十嵐。大島はたまらずため息をついた。

大島「まったく、怖い話の一つや二つ知ってないのかお」

五十嵐「知らないもん。聞きたくないし見たくないもん怖い話なんて……」

大島「おこちゃまだお、へーちよは」

五十嵐「うう…… 酷いよ島ちゃん。私一応兵長なんだよ。この中で一番偉いさんなんだよ」

半べそをかきながら五十嵐は、大島をにらみ付ける。大島もなんだという感じで五十嵐をにらみ返す。

険悪な雰囲気、山崎・浜田は息を呑む。

山崎「まあ……いいじゃねえか。怖がつてる奴に無理やり話させる必要はねえよ」

浜田「そつだよ。へ〜ちよも大島も少し落ち着こう。ね？」

たまらず浜田が割ってはいた。五十嵐は大島から隠れるように浜田に飛びつく。しかし浜田の背中越しに大島を睨むのはやめない。そして、大島もそれを緩めるつもりも、五十嵐を許す気も無いらしい。

大島「嫌だお、順番どおりへ〜ちよに怖い話をさせるお」

浜田「大島〜」

大島「だいたい怖い話が嫌いなら、嫌いになった原因があるお。

それを話すお、へ〜ちよ」

五十嵐「嫌だもん！！」

大島「話すお」

五十嵐「嫌つたら嫌！！ 島ちゃんなんか嫌い！！ 大つ嫌い！！」

そういつて、浜田の胸に五十嵐は顔を隠した。流石にやりすぎかと、山崎が大島をとめようとした時、ついに大島が立ち上がって吼えた。

大島「話さないと、霊が怒るお。それでも良いかお！！」

五十嵐「良いもん、どうせここに幽霊居ないし！！」

大島「居るお。いっぱい居るお。そつちの木の影にも、あつちの木の上にも黒い霧がかつた霊が居てこつちを見てるお」

五十嵐「ちがうもん。木の影に居るのはライオン。木の上に居るのはテナガザルだもん!!!」

大島「嘘つくなだお!!!」

五十嵐の浜田をつかむ手がいつそう強くなる。一方の浜田と山崎は顔を青ざめさせている。

浜田「あの〜。へ〜ちよさん、大島さん。さっきから、いったいどこの話をしているのさっしやるんですか?」

大島「どこって、そっちの木の影と、あっちの木の上だお」

山崎「指を指してもらえると助かるんですが、出来れば二人同時に」

そういつて、大島と五十嵐は指を刺す。それはどつちらもまったく同じ場所。つまり。

五十嵐と大島には山崎、浜田に見えない何かが見えている。

大島「だから、動物じゃないお。アレは幽霊だお」

五十嵐「ちがうもん、ちよつと色薄いけどアレは動物さんだもん!!!」

浜田「大島。ちよつといいかな?」

大島「なんだお、見えもしないのに話に割り込んでくるなお」

山崎「いや、気づいてないようだから…… まあ、いいからこつちこいや」

そういつて山崎と浜田は大島を林へと引つ張っていく。一人残された五十嵐はちがぶ台で悔しそうに涙を流し、その後姿を見送った。

数分後

大島「……………」

浜田「……………」

山崎「……………」

男三人は押し黙っていた。
戻ってくるころには寂しさからか、五十嵐もしおらしくなっていた。

五十嵐「ごめんね皆」

大島「……………」

浜田「…………… いいよへ〜ちよ、気にしなくても」

山崎「…………… そうだ、お前は何にも悪くない。悪いのは全部大島だ」

大島「悪かったおへ〜ちよ。このとおりだよ」

大島は五十嵐の前に膝をつき土下座をする。

五十嵐「島ちゃん！？ そ、そんなことまでしないでいいよ！！」

大島「いや、すみませんでしたお。自分がおろかだったお。中途半端な靈感で、威張ったりしてすみませんでしたお」

五十嵐「もういいよ。それよりほら、早く顔を上げて？ ひとつだけ怖い話思い出したの、皆に悪いからその話するね」

というや否や、顔を上げ五十嵐の前のろうそくを消す大島。

五十嵐「え、島ちゃん！？ まだ、私怖い話してないよ！！」

山崎・浜田・大島「「「いいえ十分怖い思いさせてもらいました」
「お」

五十嵐「??？」

第八話 怪談編 Part 3

五十嵐「それじゃあ、次はなっちゃんだね……」

意気消沈し、舵取りが出来なくなった大島に代わり、その場の流れで何故か怖い話に不本意だった五十嵐が仕切り始める。

浜田「ん」。実のところ僕もそんなに怖い話って詳しくないんだよね」

山崎「ならやめとくか？」

浜田「でも、大島が……」

と、大島の方を向く浜田。

大島「いいお〜。別に話さなくてもいいお〜」

浜田（これはこれで、気の毒なんだよね……）

いじけてちゃぶ台の前に座る大島。耳をかくと、浜田はうーんと悩みだした。

浜田「昔話みたいな物だけど良いかな？」

山崎「全然OK」

五十嵐「い、いいよお〜」

五十嵐は既に涙目になっている。

大島「別になんだっていいお」

超投げやりな大島の同意を持って、浜田は咳払いをし、語りに入
った。

浜田「

江戸時代にね、一本首桜というそれはきれいな花を咲かせる桜の
木があつたそうなんだ。

一本首というのは、その木がそこに立てられたきっかけに由来し
ていてね。戦国時代にある高名な落ち武者の首の褒章として植えら
れたからその名前が付いたんだ。一本の首が縁で植えられたから、
一本首つてね。

ある春のこと、その一本首桜が血のように真っ赤な花を咲かせた。
その余りの見事さは、近くの大名様が一本首桜を見に出向くほどで、
村人達もこぞつては出かけその眺めを楽しんだ。

しかし、この桜。なぜか、今年は六月に入っても花を散らさない。
それどころか、七月・八月・九月とたつても枯れるどころかますます
す紅くなる一方。

これには流石に肝を冷やした村人達は、もしや落ち武者のたたり
ではと村を上げて供養をした。それでも尚、紅さは落ちることは無
い。

もうどうしようもない。村人皆がそう思い、会議の結果、罰当た
りにもその木を切り倒すことにしたんだ。

が、切り開いてみて驚いた。

なんと、桜の年輪までが真っ赤に染まっていたのだ。そして、切
り倒した斧には血のように赤い液体が。

呪われてはたまらんと、木を切り倒した村人達は一目散に家へと
戻って戸を閉めた。その日は流石に村の誰も、一本首桜の前を通
ろうとはしなかった。

一晩明けて。村人がおそるおそる一本首桜の前を通りかかると。なんとそこは血の海になっていた。

それから何日もの間、一本首桜の周りは血の海のままだった。まるで、人間の傷から血が滲み出すように、じわりじわりとそれは湧き出てくるのだ。そんな様を見れば、村人達も正気ではいられない。呪われると思いつながら村人達はついに、根元から一本首桜を処分することに決め、一本首桜の周りを掘り起こすことにした。

しかし、流石にそんな不気味な木にこれ以上係わりたいという物は居ない。

そんなところに、一人の浪人が差し掛かった。

村人達はこれ幸いと、浪人に桜の掘り出しを頼んだ。浪人は快く引き受けると、たった一人で日が昇りきる前に木を掘り出してしまった。これにはたまげた村人達。すぐさま浪人の前に集まり、その力を称えた。

と、そこで誰かの悲鳴がこだまする。

なんと、掘り起こした桜の下に五つ、六つの大きな桶が。しかも、桜の木が根を張っていたらしく、桶の蓋には穴が開いていた。

もしやおもった村人が、その桶の蓋を開ける。

すると中には、紅い紅い血の海が広がり、その中に二・三の骸骨が浮かんでいた。

村の長寿に聞けば、桜の木下には落ち武者との戦いで死んだ村人達を供養のために埋めたという。

つまり、桜は死んだ村民の血を吸って紅い花を咲かせていたんだ。それに気付いた村人達は、何のことはないと胸をなでおろし、そ

の後であれば見事な桜を切ってしまったと、一本首桜のことを悲しんだ。そして、せめてもと想い桶の中の仏様たちを改めて供養してやることにした。

村人達は桶に溜まった水を全て出し、そして底に溜まった骨を集め改めて墓に埋葬することにした。これには村をあげて皆が協力し、通りがかりの浪人も快く協力した。

やがて、最後の桶に手をつけた。最後の桶はやけに軽く、木もその桶には根を張っていなかったらしく、蓋に穴は開いていなかった。村人がその蓋をどける。

桶いっぱい溜まった血。血を捨てるのと其処から出てきたのは、なんと鎧をつけた死体だった。それも、何故か骸骨化していない。戸惑う、村人。と、そのとき、浪人がいきなり飛び上がりその死体を奪い取った。

「体は返してもらったぞ!!!」

そう叫ぶと、いきなりその浪人の顔が鬼の顔に変わり、息つくまもなく山を飛び越えていった……

五十嵐「……そんなに怖くないね」

浜田「まあね。昔話みたいな感じだからね」

五十嵐「鬼が黒幕だったって事でいいのかな?」

浜田「たぶんね」

大島「さあ、次は漏れの番だお」

嬉々として浜田の前の蠟燭を吹き消すと大島は言う。先程の話がつまんなかったかどうかは別として、大島のモチベーションを回復させることはできたらしい。

浜田（よかった、少し元気が戻ったみたいだ）

浜田は何も言わずに微笑んだ。
しかし。

山崎「お、おい皆……」

珍しく怯えた様子の山崎。歯をカタカタ言わせ何やら浜田の後ろを指差している。

と、ここで他の三人が一斉に振り向く。

五十嵐「え!?!」

浜田「うえ?」

大島「お」

其処には大きな桜の木が立っていた。しかも、先程の浜田の話と同じく、真っ赤な桜を咲かせている。

浜田「こ、これはいつたい……」

五十嵐「き、きつと…… なっちゃんの話が幽霊さんたちを呼び寄せちゃったんだよ」

それを幽霊の類だと認識したのか、五十嵐はガタガタと膝を揺らして驚く。が、五十嵐よりも靈感の低いはずの大島はじっとして動かない。

山崎「ちょっと、やばくないか？」

浜田「けど何でこんなジャングルの奥地で日本の幽霊が……」

と、そのとき。鬼火が桜の木の周りを舞い、血飛沫がどこからとも無く桜の周りに散った。

五十嵐・山崎「ぎゃ、ギャー！！！！」「」

五十嵐と山崎は驚いて後ろに飛びのく。そのとき足を引つ掛けたのか、ちゃぶ台が音を立てて揺れた。

????「うゝらゝめゝしゝやゝ」

五十嵐「悪霊退散！！ 悪霊退散！！ あつちに行つてゝ！！」

山崎「てめえ、それ以上こつちに來たらぶつ殺すぞ！！」

????「死んでる人間を殺すことなどできるかゝ！！」

もやがかつたものが、桜の周りに現れる。それはいわゆるステレオタイプな幽霊で、頭に毛が三本生えているような感じだった。

五十嵐「うああああ！！ やつぱり！！ こんなことしてる

から幽霊を呼んじゃったんだよ！！ 島ちゃん何とかしてえ！！」

山崎「そうだ大島、それと浜田！！ 何とかしろあ！！」

棒立ちの大島と浜田。と、放心状態かと思われた二人であったが、不意に口元に笑みが浮かぶ。

大島「わかつたお」

浜田「この話をしたのは僕ですしね」

と、つかつかと桜の方に歩き出した。

驚く人間二人と幽霊。

????「お、お前達！ 私に何する気か知らないが、罰当たりだぞ。こちらら、幽霊なんだぞ！？」

やたらうるたえる幽霊。そんなことにも聞く耳持たず、つかつかと歩み寄る二人。

大島「浜田、後ろから押さえつけてくれたお」

浜田「分かった。ほどほどにね？」

????「ちよ、おま。何する気だ。ま、マテ！！」

問答無用に浜田が幽霊を押さえつける。

????「へ、平和的に話し合おう。な？ そつすれば分かり合える。うん」

大島「どうでもいいけど、中身が出てるお」

????「え！？」

幽霊はとつさに下を向いた。

大島「嘘だお」

幽霊の顔面にパンチが炸裂。ぐうと言う音を上げて、幽霊は地面に倒れこんだ。

そして、その足元には、見るからに足と思しきものが付いていた。

.....

五十嵐「でも、どうして気付いたの？」

幽霊を簀巻きにした四人は、幽霊を取り囲みつつ談笑する。

大島「幽霊の雰囲気じゃなかったお。鮮明に見えすぎてて、あからさまに生きてる感じだったお」

浜田「僕は遠目に布かぶってるって言うのが分かったんだ」

五十嵐「何で？」

浜田「ん〜。仕事柄かな？」

先程から幽霊を睨みつけているのは山崎。よくも怖がらせてくれたなといった感じで、がんを飛ばしている。それに終始ビビりまくりな幽霊。既に頭から上の方は汗でびっしょりで、スケスケだった。

幽霊星人「すみません。私は、UO1星雲から来たオバケ太郎左衛門といます」

山崎「ほう。その太郎左衛門さんが一体俺達になんのようなのだ」

幽霊星人「いえその…… 私達宇宙人は他人を驚かすことにより分泌される、オドカシルフィンという成分を摂取して生きてるんです」

山崎「つまり俺達を驚かして、そのオドカシルフィンを摂取しようと思ったわけか」

五十嵐「まったく、なんて酷い子なの!!!」

五十嵐が顔を膨らませて怒る。浜田はなんともといった感じで苦笑いをしている。

浜田「で、そのオドカシルフィンはどうやって摂取するつもりだったの？」

幽霊星人「その…… オドカシルフィンというのは人間の冷や汗に含まれるんです……」

山崎「ほほう」

山崎が邪悪な笑みを浮かべる。すると、いきなり靴と靴下を脱ぎ捨てて幽霊星人の前に出す。

山崎「舐める」

幽霊星人「え」

山崎「冷や汗から摂取するんだろ？ 協力してやるよ」

五十嵐・浜田・大島（（ひ、酷い！！）（お）

山崎「それとも何か、汗のたっぷりしみこんだ靴下を頭の上で絞って欲しいか？」

五十嵐・浜田・大島（（ひ、酷い！！）（お）

流石に見かねた、浜田が止めに入る。

浜田「山さん、流石にそれは可哀想というか、人としてやっちゃいけないよ」

山崎「こいつは死んでるから人じゃない。人じゃないから問題ない」

幽霊星人「い、生きてま……」

山崎の眼光が鋭く光った。

大島「まあまあもちつくお。ここは俺に任せるお」

浜田「大島？」

大島「平和的にかつ、穏便にここは話でけりをつけるお」

幽霊星人「ああ、地球人にも優しい方は居るんですね……」

幽霊星人が羨望のまなざしを大島に送る。大島はいつに無くさわやかに笑っていた。

大島「山崎、こいつ借りるお」

そういつて大島は幽霊星人を森の奥へと引つ張っていく。

浜田「へーちよ、山さん」

五十嵐「なに？ なっちゃん」

浜田「今さつき大島の奴、笑いながら「たつぷり聞かせてやる」
つてつぶやいたんですけど」

五十嵐「……」

山崎「……」

しばらくして、幽霊星人の悲鳴が木霊した。

浜田「やっぱり、怪談ですかね」

山崎「……」

五十嵐「……」

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

一時間後

大島「終わったお」

そういつて雑巾かすのようにしおれてしまった幽霊星人を片手に、大島が森から帰ってきた。

右手に幽霊星人、左手には謎の液体で満たされた一升瓶。

浜田「大島……」

大島「ん？ なんだお？」

浜田「その、一升瓶の中身何？」

大島「オドカシルフィンだお」

第九話 一つ屋根の下

浜田「はぁ……………」

五十嵐「……………」

浜田「はぁ……………」

山崎「……………」

浜田「はぁ……………」

簡易台所で皿を洗いながらため息を連発する浜田。誰が最初に気付いたのかは知らないが、五十嵐たち三人はそれを不安げに見つめる。

五十嵐「なっちゃんどうしたんだろ？」

山崎「浜田らしくないよな」

大島「めずらしいお、浜田がため息なんて」

そこでまた、中空を見つめてため息をつく浜田。先程から一向に食器洗いは進んでいないらしい。というか、さっきから同じ皿を何べんも何べんも繰り返し洗っているだけだ。

五十嵐「私ちよつと聞いてくる」

山崎「頼んだぞ、五十嵐」

五十嵐は立ち上がると、そつと浜田の後ろに歩み寄った。

五十嵐「なっちゃん？」

浜田「……はあ」

五十嵐「ちよつと、なっちゃん？」

浜田「え、あ。何？へっちよ。何か用？」

「ここでやつと浜田が五十嵐の方を振り返る。

五十嵐「どうしたの、何か少し変だよ今日のなっちゃん。心ここにあらずって感じで……何か悩み事でもあるの？」

五十嵐は上目遣いで心配そうに浜田を見つめる。

浜田「そ、そうかな……」

照れくさそうに頬を掻く浜田。少し照れた感じで頬を赤らめると、頬に汗を伝わせる。

五十嵐「皆心配してるよ？遠慮しないで言ってみてよ」

浜田「え？」

浜田がちゃぶ台の方を覗き込む。急いで山崎は熱くも無い湯飲みに向かい息を吹きかけ、大島はノートパソコンを打っている振りをした。少しばかり、浜田の動きが止まる。

山崎「お、おほん……いやー、熱いな今日のお茶は」

大島「むむむ、このネタはダウトっばいお」

五十嵐「ちよつとみんな……」

五十嵐が、知らん顔するなといわんばかりにこぶしを振り上げる。ずたずたと山崎の方へ向かうといきなり殴りかかった。山崎が持つ

ていた湯飲みが転がり、ちゃぶ台の周りが水浸しになる。大島はすかさずノートPCを持ち上げ、別の場所に避難。二人の戦いに参加した。

どんどんと大きくなる砂埃。

と、ここで浜田が唐突に笑い出す。

浜田「ふふふ、はははは」

五十嵐「なっちゃん？」

大島・山崎「浜田？」

浜田「ごめんね皆、心配かけちゃって」

そういつて、台所から布巾を持ってくるとちゃぶ台を拭く浜田。濡れた布巾を台所で絞るとちゃぶ台に戻り、居並ぶ三人の前に座った。

浜田「僕は全然大丈夫だよ。ただ、少し家族のことを思い出してナイーブになってただけなんだ」

五十嵐・大島・山崎「家族？」

浜田「うん。宇宙人と戦うために強制徴兵されてから、一度も連絡取ってないからね。ちゃんと生活できてるか心配で……」

大島「それで、あんなにため息をついてたのかお」

五十嵐「家族思いなんだね、なっちゃん……」

感心といった視線を浜田に送る三人。浜田は俯き気味に照れ隠しをすると、少し寂しげな表情をする。やはり心配という気持ちの方が勝っているのだろう。

山崎「しかしまあ、本土の方はまだ宇宙人の攻撃受けてないから大丈夫だろ」

山崎が中指を立てて言う。確かに、現在彼らが戦っているジャングルこそ、人類の宇宙人戦線の最前線であり、日本にはまだ一体たりとも宇宙人は上陸していない。

浜田「いや、それはそうなんだけど」

山崎「なら大丈夫だろきっと。心配し過ぎだつて」

五十嵐「そうだよ、お父さんも母さんもついてるんでしょ？
ちゃんとご飯食べて、元気に暮らしてるよ」

少しばかり浜田の顔に影が指す。

浜田「そ、そうだね。きっと皆元気で暮らしてるよね」

はにかむように浜田が笑う。五十嵐も山崎もそれにつられて笑い出した。

が、大島だけは何か感じ入ったように、立ち上がった。

大島「浜田、少し待つお」

浜田「大島？」

大島は非難してあつたノートPCをちゃぶ台に持ってくる、何やらし始めた。何を始めるのか、不安そうに見つめる三人。

山崎「大島、また高部大佐に迷惑かけるようなことをする気じゃ

……」

大島「まあ黙って見ておくお」

大島は黙々と何やらマウスを動かしている。

しばらくした後

大島「浜田、電話番号を教えるお」

浜田「え、何でまた？」

大島「Skype使って電話をかけるお。家族とこれで話せるお」

淡々とした口調で言う大島。目つきは真剣だった。はじめてみる大島の顔に、三人唾然とする。

大島「どうしたお、話したくないのかお？」

浜田「い、いや。今言うよ」

そう言った浜田の顔は嬉々としていた。

.....

浜田「もしもし？」

浜田「うん、うん。兄ちゃん。夏雄兄ちゃんだよ！！」

目を潤ませて会話をする浜田。三人はそれを微笑ましく見守る。

浜田「元気にしてたか？ 幸一は、雄太は？ 弘子は今年から大
学だったよな、ちゃんとやってる？」

五十嵐「なつちゃん、とっても嬉しそうだね」

山崎「そうだな……」

浜田が袖で涙を拭う。

それにしても良いところあるじゃないかと、五十嵐・山崎は大島を見直す。じつと、視線を注がれると、気恥ずかしくなったのか流石の大島も顔をちやぶ台にうずめた。

大島「なんだお、別に漏れがこんなことしたっていいお」

五十嵐「ちよつと見直しちゃったよ、島ちゃん」

山崎「そうだな、俺も少し見直したよ」

大島「なれないことはするもんじゃないお」

顔を真つ赤にして伏せる大島。二人は微笑んだ。

山崎「それにしても、今回もやっぱり高部大佐の……」

大島「山崎。野暮なことは詮索しないお」

五十嵐「そうだよ、なつちゃんはまじめに頑張ってるんだから、これくらいのご褒美はOKだよ」

山崎「そうだな…… そうしておくよ」

山崎は幸せそうに笑う浜田を見てそうつぶやいた。

浜田「そうか。うん。兄ちゃんが居なくても、ちゃんとご飯食べてるんだな。うん。今度帰ったら、食べさせてもらおうよ」

大島「浜田、今出てる画面上の番号に電話すれば、いつでも会話できるお、弟さんたちに番号を伝えておくお」

浜田がぐつと親指を立てる。五十嵐と山崎は、再び大島を見てはやし立てた。

浜田「え、あ、うん。へ〜ちよ、ちよつといいかな?」

五十嵐「え、あたし?」

急に呼ばれた五十嵐がきよとした顔で答える。

浜田「妹が、お世話になってる隊長さんにお礼を言いたって」
五十嵐「え〜。お世話になってるだなんて、そんな。照れるな〜」

えへへと赤ら顔で頭をなでる五十嵐。

山崎「どつちかって言うと、お世話されてるよなへ〜ちよは」

大島「まったくだお」

無論、鋭いツツコミが入った。五十嵐はむっとして二人を睨みつける。

浜田「ほら、へーちよ。早くして？」

五十嵐「あ、うん」

五十嵐は浜田から渡されたヘッドホンマイクを、装着した。

.....

五十嵐「どうもわかりました、なっちゃんの上官の五十嵐兵長です」

浜田妹「え、こんにちは。いつもお兄ちゃんがお世話になってます。え〜と、五十嵐さんは女性の方なんですか？」

五十嵐「そうですね。ちよつとびつくりしました？」

浜田妹「ええ。隊長って言うから、おじさんみたいなのかと思っりました」

五十嵐「あははは、そんなこと無いですよ〜。世の中実力主義ですから」

山崎「本隊からはくれた中で、たまたま一番階級が上だったただけだろ」

五十嵐「山ちゃんうるさい……」

五十嵐はそこら辺にあった石ころを山崎に向かって投げつけた。

浜田妹「あの、お兄ちゃん元気にしてますか？ 身勝手な話かもしれませんが、お兄ちゃんあんまり体丈夫じゃないので、無茶させないでくださいね」

五十嵐「うんうん。まかせて。私が誓ってなっちゃんを、無事本国までつれて帰ってあげるよ」

浜田妹「お、お願いしますね。五十嵐さん」

五十嵐「どーんと大船に乗った気でいてね！」

浜田妹「…… よかった、やさしそうな隊長さんで。」

私達兄弟、小さいころにお父さんとお母さんを事故で亡くして、それ以来お兄ちゃんが私達の親代わりだったんです」

五十嵐の笑顔が一瞬止まった。

五十嵐「……」

浜田妹「それで、お兄ちゃんが強制徴収されちゃってとっても不安だったんです。それにとっても悲しかった。もし、お兄ちゃんが死んじゃったらどうしようって。私たちのことに一生懸命で、まだ自分の幸せも何も手に入れてないのにつて。」

けど、隊長さんが優しい方で安心しました」

五十嵐「え…… うん」

浜田妹「隊長さんお願いします、お兄ちゃんをどうか死なせないでくださいね？」

五十嵐「わかったわ、約束する」

浜田妹「よかった……」

五十嵐「じゃあ、なつちゃんに変わるね？」

浜田妹「いえ、弟達の食事の準備もありますので、今日はこの辺で」

五十嵐「そ、そうですか……」

浜田妹「それじゃあ、今日は本当にありがとうございました」

五十嵐「う、うん…… バイバイ」

浜田妹「さようなら、五十嵐さん。お兄ちゃんをよろしくお願いします」

電話が切れた時の電子音がヘッドホンに流れる。五十嵐はゆつくりと耳にかかっているヘッドホンをはずし、ちゃぶ台の上に置いた。

浜田「あれ、切っちゃったの？」

五十嵐「え…… う、うん。ご飯の準備があるから、今日はこのへんでって……」

浜田「そっか。まあ、電話番号も言ったし、またいつでも話できるしね」

浜田はにつこりと微笑む。五十嵐も、釣られたように声を出して笑い始めた。

いつしか、ちゃぶ台は四人の笑いで囲まれていた。

五十嵐「なつちゃん……」

既に寝入ってしまった浜田の方を五十嵐は向く。隣で寝ている浜田の寝顔はいつもより幾分か幸せそうだった。

五十嵐「…… 私だけじゃないんだね……」

そういつと、自分の上にかかっているタオルケットに顔をうずめた五十嵐。少しして、そのタオルケットの一部が濃くなった。

五十嵐「お父さん、お母さん……」

涙声で五十嵐は言った。

第十話 鬼が来たりて

「ピリリピリリ」

大島のPCから電話の着信音が鳴り出す。夕食の後片付けをしていた五十嵐は、不意の音に肩をすくめた。

五十嵐「なっちゃん！！ 電話！電話！！」

浜田「うん、わかった」

夕涼みにキャンプ地から少し離れたところで寝ていた浜田は、すぐさま起き上がるとちゃぶ台へと駆ける。

浜田「もしもし、兄ちゃんだよ！！」

浜田は嬉々とした表情でヘッドホンをつけると、開口一番そういった。

が、次の瞬間浜田の顔が青ざめた。

と、同時にヘッドホンが音声出力から外れる。

高部「誰か知らんが、不肖この高部。一人たりとも兄を持ったことは無いぞ」

浜田「ギャ、ギャ、ギャアアアアーーーー！！！！！！」

.....

山崎「ついにばれたのか.....」

浜田「やばいよ、僕達絶対軍規違反で銃殺刑だ.....」

山崎「鬼の高部ならやりかねんな……」

五十嵐「そんなこと無いって、大丈夫だって…… 多分」

浜田「そうだよね……」

山崎「死にたくないな……」

浜田「そうだよね……」

五十嵐「ふ、二人ともお、元気出してよお!!」

げんなりとした表情で縮こまる山崎・浜田。既に生きた心地がないというのを、顔全体を蒼白に染め上げて示している。そんな二人をかるうじて元気、というよりも現状を把握しきれしていない、五十嵐が慰める。

余りの驚きに大声しか上げられなかった浜田にあきれた高部は、後でかけ直すと言付けていったん電話を切った。その為彼らは今、かかってくるであろう高部の電話と、その用件がなんであるかに怯えているのだ。

山崎「で、次は何時かけてくるんだって」

浜田「11時位だって……」

既に、パソコンの時計は11時を指している。いつ電話がかかってきてもおかしくない。

浜田「ああ、こんな時に大島はどこ行ってんだよ……」

山崎「大体こんな夜中に、用事だ何て……」

山崎・浜田（まさか、逃げたか？）

大島「よんだかお？」

茂みを割って大島が出てきた。と、いつせいにつかみかかる山崎

と浜田。

山崎「大島！！ お前の所為で、今大変なことになっているとい
うのに、どういうつもりだあ！！」

大島「へ？ なんのことだお？」

浜田「どうするんだよ大島あ！！ 僕達もう、生きて日本に帰れ
ないよ！！」

そのとき、パソコンから呼び出し音が鳴り響く。

大島「ん、電話だお。早く出るお、浜田」

浜田「い、いやだ…… 出たくない」

がくがくと振るえ首を振る浜田。きよんとした顔で首をかしげ
ると、パソコンに向かう。

山崎「まで、大島何をするつもりだ！！」

大島「何って、電話をとるに決まってるお。居留守は流石にまず
いお」

山崎「ちょ、マテ！！ 早まるなああああ！！」

必死の形相で止めようと迫る山崎。が、それよりも早く、大島が
電話に出た。

大島「もしもし、大島だお」

高部「高部だ」

大島の目が見開く。途端に険しい顔になった大島は口を一字に
結んだ。

高部「その声、大島か。久しぶりだな。どうだ、輸送部隊の任務は？」

大島「ああ、おかげさまで楽しかったお。藻前も相変わらず嫌味つたらしいところは変わってないようだよ」

高部「それは良かった」

皮肉が通じていないのか、帰ってきた言葉は本当に安心して居ようだ。それが癪に障るのか、大島の頭に青筋が走る。

大島「良かったお」

高部「フッフ。おっと、そうだ。今日はお前に聞きたいことがあって、電話をかけたんだ」

と、ここで山崎・浜田が身構える。自分達の探りを入れている。

山崎（もし、本軍からはぐれて、こんな山の中で毎日のんびりしてるなんて知られたら）

浜田（生かしていられるはずが無い。さらに輸送品に手をつけたから軍法会議ものだ）

大島「一体なんだお？ どうせ、くだらないことだよ」

山崎・浜田（そんなわけねえだろ！！）

高部「いや、その。すまんがな……」

大島「なんだお！！ 早く言うお！！ まさか、またOSの終了のさせ方が分かんないんじゃないだろうなあ！！」

山崎・浜田（んな、失礼だろ！！ いまどきそんな人居る訳無

いじゃんー!」)

高部「ち、ちがうぞ…… その…… あの……」

パソコンの終了の仕方がわかんないだけ……」

大島「同じ事だお!!!」

山崎・浜田（ええええええー!!!）

緊張が一気に吹っ飛んだ感じで、二人はのけぞった。

高部「わ、私は、機械を使うのは苦手なんだ!! 人には得意・不得意があるものだろう!」

大島「だからって毎回毎回。漏れに聞きに来て…… いい迷惑だお!!!」

高部「いいからとつと教える大島。どうやって終了するのだ」
大島「最近のPCは起動する時に押すボタンを押せば自動で終了するお。押してしばらく待ってるお」

高部「わ、わかった。まだ切るなよ、ちゃんと終了するまで、待っていてくれ……」

というや、ごそごそと言う音がパソコンから聞こえてくる。

高部「…… よいしょつと。……消えたあ」

山崎・浜田（……） 何か聞こえてきたんですが（）

大島はイライラと机を指で叩きながら、高部を待っている。

高部「うむ、今消えたのを確認した。ありがとう、大島。恩に着る」

大島「そう思うなら、二度とかけてくるなお。大体、どうやってこの電話番号調べたお」

高部「む、最新版のタウンページに乗っていたぞ？」

山崎・浜田（嘘だあ！！）

二人の目が白目を向く。まさしく、信じられないといった様相とでもいおうか。

大島「…… まあ、どうでもいいお。とりあえず、二度とかけてくるなお」

高部「そ、そんなことを言うな大島。私にはお前しか…… その……」

大島「分かったかお！！ それじゃ、切るお」

高部「あ、大島！！」

と、ここで大島が電話を強引に切った。

大島「あーもう。あいつの声聞いた瞬間、どうせこんなことだろうと思ったお」

立ち上がると地面を踏み荒らし、怒りをぶつける大島。そんな大島に山崎・浜田が近づく。

山崎「あの一人大島さん。高部さんにあんなふうな事言っつて、良かったんですか？」

大島「なんでだお？ 何を遠慮する必要が在るお？」
浜田「いや、というか。何でそんなタメ口で話せるんですか。相
手上官ですよ？」

大島「何でつて、あいつとは仕官候補生の時同期のサクラだった
お。同級生に敬語使う奴なんていないお」

山崎・浜田に電撃が走った。

山崎（ということとは、今の階級は）

浜田（危険人物とみなされて、落とされたということ？）

大島「まったく。漏れだつてちょっと頑張れば、あいつくらい…
…」

五十嵐「ねーねー。仕官候補生って何？」

五十嵐は、何も気付いていなかった。

.....

高部「はあ……… これで104回目か………」

高部の右手には某夢の国の入国チケットが握られていた。

高部「いかな……… 私は。こんな時しかチャンスは無いという
のに」

憂鬱げに頬に手を付く高部。その視線の先には、仕官生の制服に身を包んだ高部と大島の姿があった。

第十一話 古今東西編 前編

山崎「古今東西…… アイドルグループ！！ ピンクレディ！！」

浜田「モーニング娘！！」

山崎「メロン記念日！！」

浜田「SPEED！！」

二人は卓球台の前で、古今東西ゲームを繰り広げる。浜田の卓球の能力は普通だが、山崎の動きはプロと見まごうほど素早く的確だ。

山崎「SMAP！！」

浜田「え、えーと…… あー！！」

きわどい所にきたボールを浜田は取りこぼしてしまった。

山崎「よし！！ 俺の勝ちだな！！」

ガッツポーズで勝利を喜ぶ山崎。

浜田「強いなー山さん。普通にやっても勝てる気がしないよ」

山崎「まあな。俺は昔、男版福原愛と呼ばれた男だからな」

大島（微妙な喩えだお）

五十嵐「ねーねー。次はあたしね、あたし！」

山崎「よし、それじゃ俺と交代な」

ピョンピョンと卓球台の前ではねる五十嵐にラケットを渡すと、

山崎はちゃぶ台の前に座った。

渡された五十嵐はうれしそうにラケットを振り回すと、今まで山崎がいた場所に立つ。

五十嵐「よし。負けないぞ、なっちゃん」

浜田「僕だつて負けないよ、へ〜ちよ〜!!」

五十嵐「古今東西」…… 日本のお菓子!! おはぎ!!」

浜田「みたらし団子!!」

五十嵐「お饅頭!!」

浜田「わた飴!!」

先ほどとは違い、どっこいどっこいな試合が始まる。山崎はそんな試合を見ながら息も荒げず茶をすすする。

山崎「それにしても、卓球台まで輸送するなんて…… 上のやつらはいったい何考えてんだろうな？」

大島「案外何も考えてなさそうなお」

パソコンになにやら文字を入力しつつ、大島が言う。あまり興味が無いのか、先ほどから試合には一度も参加していない。

山崎「どうだ、お前もやってみたら？」

大島「めんどくさいお。そんなことする位なら、寝たほうがマシだお」

山崎「随分なこと言ってくれるじゃないか…… さては、お前運動オンチだな」

大島「そんなことないお。ただ疲れるのがいやなだけだお」

淡々と答えるあたり、あながち運動オンチではないようだ。

山崎はこのなんとも突き放すような会話に少々辟易して、五十嵐たちの試合が行われている卓球台のほうを向いた。

五十嵐「ねり飴!!」

浜田「金平糖!!」

五十嵐「かき氷!!」

浜田「きんつば!!」

五十嵐「ぼた餅!!」

大島「へ〜ちよ。ぼた餅とおはぎは一緒だよ」

五十嵐は困惑の表情を浮かべ、大島のほうを振り返る。と、そこを狙ってすかさず浜田。

浜田「お煎餅!!」

五十嵐「ああ!! も〜…… 島ちゃん変なこと言わないでよ、負けちゃったじゃない!!」

大島「おはぎとぼた餅は別定義で、ルール上でありなのかお？」

浜田「う〜ん。難しいところだけど…… どう、山さん？」

山崎「無しだな! 同じだもん」

大島「というわけで、漏れがいうより先にへ〜ちよは負けてたお」
五十嵐「ええ〜、そんな〜」

へたりと膝をつく五十嵐。ラケットを卓球台の上に置いた浜田は、笑いながらちやぶ台へとむかう。水出し麦茶の容器に手を伸ばすと、自分のマグカップにそれを注ぐ。

浜田「久しぶりに運動すると疲れるね……」

息の上がつた様子でお茶を飲み干す浜田。汗がダラダラと額から流れている。

五十嵐「も〜。なっちゃん、早く早く!!」

浜田「ちよつと待ってへ〜ちよ。もう一杯だけ飲ませて」
五十嵐「早くやろつよ〜」

????「では私が相手をしてあげましょう」

五十嵐・山崎・浜田・大島「?????!?」

ジャージ姿に、何故か帽子。ちらりと見える目もなぜだか流し目風。色白のわけのわからない男が卓球台の前に立っている。

五十嵐「誰？」

卓球王子「私の名前は卓球王子。青春星雲卓球星から来たエイリアンだ」

山崎「エイリアンだと!!」

大島「よくもまあノコノコと出てきたお!!」

いやや否や殴りかかろうとする山崎と大島。だが、ちゃぶ台から立ち上がるうとした瞬間、何か彼らに向かって飛んでくる。とっさに腕でガードした山崎。しかしながら、モロに急所の眉間に食らった大島はたまらず後ろへ仰け反った。

浜田「大丈夫か、大島!？」

どうやら打ち所が相当悪かったらしい。大島の目は白目を向いて、口は泡を吹いている。息はしているから、軽く気絶したのだろう。

山崎「これは…… 卓球のボール。まさか、お前が？」

卓球王子「そうさ、卓球の王子を名乗るこの僕だ、こんなことは造作も無いことさ。まあ、君に見切られたのは想定外だったけどね

……」

山崎「てめえ…… 何が目的だ。俺たちの命か」

卓球王子「そんなものに興味はないさ。いったらう、僕が相手をしてあげるって」

そういつて、卓球王子は今まで浜田が持っていたラケットを手に握る。

卓球王子「正々堂々卓球で勝負しようじゃないか!! この地球の支配権をかけてね!!」

対面の五十嵐を指差し叫ぶ卓球王子。すると、どこからとも無く光が差し込み、なにやら上から降りてくる。

ファン「キャー卓球王子!!」

ファン「頑張つてー、卓球王子!!」

ファン「キスしてー卓球王子!!」

あつという間に、五十嵐と卓球王子の周りには、女エイリアンが集まり始める。

浜田「な、なにこれ……」

山崎「頭の痛い展開になってきたな……」

五十嵐「え、ちょ…… ええ!? どうなってるのおく 助けてえ、なつちやくん!!」

既に無数の女の子エイリアンに囲まれた卓球台のほうから、ピョンピョンと跳ねて助けを求める五十嵐。

卓球王子「敵を前にして逃げるといふのかい? まあ、僕が相手なら仕方ないか……」

さらりと髪をなびかせ、女の子たちに流し目をする卓球王子。とたん、女の子たちの中から悲鳴が上がった。

ファン「キャー卓球王子!!!」

ファン「しびれるー、卓球王子!!!」

ファン「強く抱いてー、卓球王子!!!」

五十嵐「だ、だって。そんな事言ったって……」

卓球王子「ふ、まあそれもいいさ。

けどね、人は逃げてばかりじゃ前に進めない。いつかは戦わなくてはならないときがくるんだ。

そして、今がそのときだ!!!

ここで逃げたら君は一生負け犬のままだよ、五十嵐君!!!」

五十嵐「あたし、今日始めて卓球やるのに、勝てるわけないよ!!!」

再び起こる大歓声。完全に威圧されたのか、犬ころのように五十嵐はおびえきってしまった。

山崎「やれやれ、仕方ないな……」

ぼりぼりと頭をかくと、卓球台を囲む女の子の間を割っていく山崎。後ろから浜田も着いていく。

山崎「おい、卓球王子。そこらへんにしときな、みっともないぜ。それとも、弱い者いじめはお前のプライドが許すのか?」

卓球王子「ふ、勝負には常に強者と弱者が付きまとうものさ」

山崎「ほう、なら遠慮なくいじめてやるよ」

ぴたりと卓球王子の動きが止まる。ゆっくりとその首は、卓球台の前に出てきた山崎に向けられた。

浜田「山さん、どうするつもりなの？」

後ろについてきていた浜田は、卓球王子の雰囲気には威圧されつつも、山崎に問いかける。

不適に笑うと山崎は、五十嵐からラケットを奪い取った。

山崎「俺が相手をしてやるぞ、卓球王子。お前に、敗北の味というやつを教えてやる!!」

びしっと握ったラケットで卓球王子を指す山崎。

おもしろそうに、卓球王子はほほをゆがめた。

大島「後半へつづくお……」

第十二話 古今東西編 後編

卓球王子と山崎はネットを挟んで互いににらみ合う。

卓球王子「純粹に卓球で勝負するのも面白いが、私も忙しい身でね、時間が惜しい。そこでだ、君たちが今さっきやってきた、古今東西ゲームで勝敗を決めようじゃないか」

山崎「いいぜ。だが、お互いフェアな題目で行こう。地方駅とか、マニアックな題目は無しな」

卓球王子「勝負は三回。先攻は、ハンデだ。君からでいいよ……」
山崎「後悔するなよ？」

山崎は、玉を片手に構えに入った。

浜田「山さん大丈夫なの？」

山崎「まかせろ、浜田。俺は昔、東洋のフォレストガンプと呼ばれた男だぞ」

大島（またしても、微妙な例えだお）

五十嵐「頑張っつてね山ちゃん。応援するよ」

浜田「頑張っつて」

頷き大島はラケットを持つ手の親指を立てる。そしてゆっくりとラケットを後ろに引き、ボールを前に出し前かがみになった。サーブの体勢。

山崎「古今東西……！」

山崎の鍛えられた四肢が隆起する。右手にもたれたラケットは微動だにせず、見れば万力のように右手は絞られている。

一瞬大きく後ろに引いた右腕が、振り子のように球へと向かい戻っていく。

山崎「寿司のネタ！！ マグロ！！」

力強く球筋は対角線上の台の隅へと飛ぶ。白線上で弾けたボールは鋭く宙を舞う。

そこに吸い込むように現れる、赤いラバー。

卓球王子「ツケ！！」

空中で一旦静止したように見えた球が、オレンジのラインになり山崎の目前へと迫る。

止めるのが精一杯、勢いを殺すように山崎はラケットを止めて前へと出す。

山崎「イクラ！！」

卓球王子「玉子！！」

山崎「ウニ！！」

卓球王子「イカ！！」

山崎「タコ！！」

両者ともに一步も引かず、球は空中を激しく舞い飛ぶ。

と、ここで卓球王子が、甘い球を中空にあげる。弧を描き大きく舞った球に狙いを定め、山崎は大きくラケットを振りかぶった。

山崎「シャコ！！」

風きり音を伴った大きな振り。その軌跡は球に伝わり、一直線を描いて飛ぶ。

卓球王子のラケットとは反対側に弾けて飛んだ球。

少し遅れて、山崎の力強い地面を踏み抜く音が辺りにこだました。

ファン「キャー、王子〜!!」

ファン「いや〜負けないで卓球王子〜!!」

五十嵐「いいよいいよ、山ちゃん!!」

浜田「山さん、ナイススマッシュ!!」

不適な笑みを顔にたたえ女の子たちに手を振る王子。向き直り山崎に目をやる。流し目気味だった目の端が、鋭さを含んでいる。

卓球王子「やるじゃないか。初めてだよ、僕から点を取った人は」

山崎「さっきの様子じゃ、初めての敗北もそう遠くないぜ。卓球王子？」

ニヤニヤと、ラケットを肩に山崎は笑う。卓球王子のファンたちからのブーイングが上がった。

とうの卓球王子は、ファンから投げられた球を受け取り、済ました顔でサーブの体勢に入る。

が、その腕はまるで大木の枝のように力強く、ゆっくりと大きく開かれていく。

卓球王子「古今東西……」

ピタリとその腕の動きが止まった、その刹那。風を斬り、ラケットが球を叩く。

卓球王子「花の名前!! ラベンダー!!」

コート手前。浅いところに球が落ちる。山崎はすくうようにラケットを下に滑り込ませると、大きい弧でそれを返す。

山崎「バラー!!」

卓球王子「ユリ!!」

防戦一方。先ほどとは違い、初手より鋭い手で攻め一辺倒の王子の球筋に、山崎は合わせることにしかできない。

山崎「ハイビスカス!!」

卓球王子「スズラン!!」

山崎「えくと…… ラフレシア!!」

卓球王子「アサガオ!!」

山崎「えくと…… くそっ!!」

山崎は球こそ返したが、お題を言うことができなかった。が、本来ここで終了なのだが、王子は大きく振りかぶり止めとばかりのスマッシュを放つ。

山崎のほほを掠めたスマッシュは、そのまま後ろにいた浜田に当たった。

ファン「キャー、王子っ!!」

ファン「素敵よ、卓球王子っ!!」

ファン「抱いてっ、卓球王子っ!!」

五十嵐「なっちゃん、大丈夫!？」

浜田「いてて…… っど、どんまい、山さん……」

痛そうに額をさする浜田。山崎は舌打ちすると卓球王子をにらみつけた。

卓球王子「ふふふ、花の知識も、卓球の腕も今ひとつ僕に及ばなかつたようだね？」

山崎「けっ、悪いか？」

卓球王子「君のような男に花は似合わないさ。君のような男にはね……」

山崎「なら俺らしいお題で次はいかせてもらっせ……」

ラケットで口元を隠しながら笑う卓球王子。

浜田から返された球を、ラケットの上で転がすと、山崎は構える。先ほどよりも慎重にかつ力強い構え。武士のような気迫すら漂ってくる。

その、武士が微かに揺れた。

山崎「古今東西！！ 麻雀の役！！ タンヤオ！！！！」

山崎の鋭いサーブスが、卓球王子の肘もとめがけて飛ぶ。一歩引いた卓球王子は、少し苦悶の表情でそれを返す。

卓球王子「チンイツ！！」

山崎「イツツー！！」

卓球王子「イーペイ！！」

山崎「リャンペイ！！」

両者の球筋はまるで矢の如し。ネットすれすれを鋭く、そして素早く飛んでいく。どちらも決して譲らない大激戦だ。

卓球王子「サンシヨクドウボン！！」

山崎「トイトイ！！！！」

卓球王子「スーアン！！」

山崎「コクシー!!」

だんだんと、本当に少しずつではあるが、山崎が押され始める。的確に相手を振り回す王子の球筋に、体力を奪われ始めたのだ。

卓球王子「チートイー!!」

山崎「小三元!! つつう!？」

斜めに入れたラケットに辺り、大きなロブが卓球王子のコートに舞い込む。しまったという表情で次の一手に備える山崎。

そこに、正面から挑戦するかのごとく、鋭いストレートのスマッシュが入った。

卓球王子「大三元!!!!」

山崎「うおりゃ、ジュンチャン!!」

何とか返した、山崎にたたみかけられるように卓球王子が、もう一打と迫る。

が、そのとき。

卓球王子「…… つ、大車輪!!」

答えにつまった所為か、少しばかり球筋が緩かった。そして、そこを山崎は見逃さない。

十分にひきつけ狙い済ます、山崎。

山崎「天和おおおおお!!!」

終りと言わんばかりに、思い切り振り切った山崎。球は風を斬る。そして、卓球王子のラバーの先に直撃する。

際どい入射角で当たったそれは、明後日のほうへと飛んでいく。そのとき、山崎は勝ち誇った顔でラケットを振り上げた。

山崎「いよっしゃああああ!!!」

吼える山崎。汗が輝くその顔は、日光に照らされてきらきらと光った。

五十嵐「やったあ!!! 山ちゃん流石だよ!!!」

浜田「すごいよ山さん!!!」

喜び勇んで二人は山崎に駆け寄る。

山崎はそんな二人の顔を見て、歯を出して笑って見せた。

山崎「いっただろ、俺は卓球界のタイガーウッズと呼ばれた男だ
って」

大島（わけわかんない喩えだお）

やいのやいのと騒がしい山崎たち。それとはよそに、卓球王子の
ほうも騒がしい。

ファン「キャー、王子〜!!!」

ファン「負けちゃうなんてあんまりよ、卓球王子〜!!!」

ファン「あなたの子供を産ませて〜、卓球王子〜!!!」

大島（なんか一人とてつもなく痛いファンがいるお）

膝をつき崩れ折る卓球王子。悔しさに涙が出るといふこともない
のだろうか、ただ信じられないといった悲壮な表情で、地面の一点

を凝視していた。

山崎「良い試合だった……　これが、古今東西じゃなかったら、負けてたかも知れねえな」

卓球王子「僕は……　僕は、何故負けたんだ？」

山崎「それは、言葉に詰まったお前が一番良く分かってるんじゃないか？」

卓球王子「ローカルルール……　くそっ……　僕の乾杯だ」

卓球王子は何度も何度も地面に拳をぶつける。

ファン「もー。弱い王子になんて興味ないわ」

ファン「そろそろ門限だし、帰りましょう、みんな」

ファン「もっともっとちょうだい、卓球王子〜!!」

大島（いいかげん止めたほうが良いお……）

大島君、気絶しながらのツッコミご苦労様。

それはそうと、わらわらと王子の前から去っていくファンたち。ついに、王子は一人だけになってしまった。

五十嵐「なんだか、かわいそう……」

山崎「よしとけ、こういう奴には良い薬だ……　それに、放って

おいてくれた方が、あいつも気が楽なはずだ」

浜田「勝負の世界は厳しいな……」

山崎たちは崩れ折る卓球王子に背を向けた。

卓球王子「うう…… ううう……」

夕日に向かいむせび泣く卓球王子。と、そこに一枚のハンカチが差し出された。

卓球王子「せ、先輩！！ どうしてここに!？」

真つ黒に日焼けした丸刈り長身のナイスガイが、そこには立っていた。先輩と呼ばれたナイスガイは、ハンカチで卓球王子の涙をぬぐう。

先輩「大事な後輩が心配でない奴がいるかよ…… 一人卓球星から飛び出したお前のことが心配でこっそり後をつけていたのさ」

卓球王子「先輩…… そこまでに僕のことを心配してくれてたんですね……」

先輩「当たり前だろ」

卓球王子「先輩!!」

先輩に力強く抱きつく卓球王子。よしよしと、先輩は卓球王子の背中をさする。

先輩「王子、お前はまだ強くなる。俺なんかよりずっと強くなる」

卓球王子「本当でしょうか」

先輩「ああ、俺が保障する。お前は紛れもない卓球の天才だ」

卓球王子が潤んだ瞳で先輩を見上げる。そして、ふと何かに気づ

いたように、顔を赤面させた。

卓球王子「先輩…… その…… 先輩のあそこが……」
先輩「ふふふ、かわいい後輩に見つめられたら、そりゃ元気になるさ」

卓球王子「あ!？ もう…… 先輩…… (はあと)」

先輩「それじゃ、汗もかいたことだし。シャワー室で汗の流し合いでしようか」

卓球王子「ほんとうにそれだけですかあ？」

先輩「ほんとうに、流すだけだよ？」

卓球王子「う・そ！ 先輩のここは正直ですよ？」

先輩「こいつ！」

筋肉質な男たちの顔が二つ、夕日の中で赤らんだ。

ダン!! ダン!!!!

音がするや否や、二人のこめかみをゴム弾が襲った。そのままくるくるとその場で回ると、しりに折り重なるように倒れる二人。

山崎「他所でやりやがれ!!」

山崎の右手にはやたら古めかしいライフル銃が握られていた。

第十三話 初めての作戦 Part 1

大島「サルベージ対象は、元看護婦の湯野鈴鹿を隊長とする約八名。全員が女性。」

全員が一箇所の施設内にまとめて収容されている模様だお。

施設内で何が行われているかはわからないが、彼女達はある程度の行動の自由が認められているらしく。衛星から洗濯物を干す隊員の姿が確認されているお。

以上、へーちよ、どうぞ

「ガガ……」

五十嵐「こちら五十嵐、浜田。現在、西方に目標と思しき建物発見。島ちゃん、照合お願い」

「ガガ……」

大島「分かったお、今そちらの位置情報と照合してみるお」

「ガガガ……」

山崎「こちら山崎。同じく東方に目標物らしき建造物を発見。確認を頼む」

「ガ……」

大島「了解。へ〜ちよ、照合の結果まず間違いないお。山崎の照合が終わるまでしばらく待機お」

「ガガ……ガ……」

五十嵐「了解」

「……ガガ……」

大島「山崎、照合の結果間違いないようだお。戦闘準備を開始してくれだお」

「ザガ……ガガガ!!」

山崎「こちら山崎。了解した。午後6:00。夕闇にまぎれて、建造物に突入する」

無線の電源を切る山崎。胸ポケットに無線をしまつと、アサルトライフルを腕に抱える。

山崎「しかし、久しぶりだなこついうの。まあ、まさかこの面子でミッションをこなすとも思わなかったが」

局地戦とはいえ、建造物内での戦闘になるかどうかは分からない。それゆえのアサルトライフルの選択であろうか。

山崎「50分か…… はてさて、どうやって攻めるかな」

そうやって茂みの中から建造物を覗く。

建造物の周りに見張りは居らず、山崎ほどの手練でなくても進入は容易そうだ。

裏口の状態を確認した山崎は、茂みの中に戻る。

建造物の方に背を向けると、アサルトライフルを腹上に尻をついた。

作戦の手はずはこうだ。

まず、山崎が単騎で建造物に突入。衛生兵達に救援の旨を伝え、建造物からの脱出を扇動する。

後、目的地の途中で五十嵐たちと合流。五十嵐たちのトラップに、宇宙人がかかった所で五十嵐たちと共に殲滅戦に入る。

ここで宇宙人が退却すれば、衛生兵達と共に高部が指定したポイントへ移動。

もし、宇宙人が食い下がるようであれば、玉砕覚悟で衛生兵たちのポイント移動の時間を稼ぐ。

脱出の合図は、無線で入れることになっており。夜七時まで、連絡がなかった場合は敵に捕獲されたものとして、五十嵐たちは本拠地に撤退する。

山崎「失敗は許されない。つっても、相手は宇宙人。つかまって殺されるかは分かんないけどな……」

一呼吸置いて、山崎は尻を上げる。前かがみに茂みの中を移動すると建造物へと接近する。

建造物は、ジャングルの奥地だというのに何故か立派なお屋敷だ

った。

宇宙人の科学力で立てたのか、はたまた元からあった誰かの別荘地か。

だがしかし、厄介なのは窓の存在だ。既に辺りは暗くなっているとはいえ、自分の存在を宇宙人に知られるのはやっぱりだ。

作戦の成功率から行って、出来れば拘束されているサルベージ対象者に状況を説明するまでは知られたくない。

ゆつくりと、館の壁伝いに裏玄関に近づくと山崎。

頭上の窓を常に警戒しながらも、何とか裏口までたどり着くとゆつくりと館の中へと足を踏み入れた。

入った場所はどうかやら台所のような。厨房にはプラスチック製の白い皿と白いお茶碗、そして何やらトレイのようなものがたくさん重ねられている。

山崎「ずいぶん綺麗だな……」

きよろきよろと辺りを見回す。

右側は行き当たりのようで光が差していない。左を向けば、木製のドア。

ゆつくりと、今度は音を立てないようにドアに近づくと。

少し開いて見てみればそこは廊下のようなのである。

必要最低限開けたドアから山崎は体を滑らせるように出る。

山崎「ん……」

何やら人の話す声が聞こえてくる。

いざという時のために山崎はアサルトライフルのロックを外し、臨戦状態に入る。

二歩三歩と歩み寄ると声のする部屋に背中を合わせる。
振り向き、少しだけあいたドアから中を覗く。
その光景に山崎は目を見開いた。

宇宙人1「看護婦さん…… リンゴ剥いてくれ、リンゴ……」

衛生兵1「はいはい。そうだ、ウサギさんが良いですか?」

宇宙人1「ウサギさん、ウサギさんにしてくれえ」

宇宙人2「すみませんねえ。下の世話までさせちまって」

衛生兵2「仕方ないですよ動けないんですから…… ころ、じつとして」

宇宙人2「はあああ…… ほんとにすみませんねえ、看護婦さん」

衛生兵2「もう、これが私達の仕事なんですから、そんな気にしなくていいんですよ」

まさしく、病院の風景そのものである。

ベットに寝ているのはまさしく宇宙人たち。しかも、どいつもこいつも体のどこかに包帯を巻いている。まさしく重症という感じの奴らばかりだ。

山崎「ど、どうなってんだこりゃ?」

と、その時そっと山崎の後ろに手が伸びた。

山崎「!?!?!」

ガタリと音を立てて後ろを振り返る山崎。宇宙人に気付かれたの

かと、すぐさま銃を手の主に近づけた。

しかし、立っていたのは中にいる衛生兵と同じいでたちの女。

????「しー！ 下手に騒ぐと気付かれますよ……」

口元に人差し指をやり静かにのポーズをとる女性。長い黒髪がナ
ース服に美しく映える様に、山崎も思わず気後れした。

と、山崎を制した彼女はドアを開ける。

壁とドアの間に挟みこまれるようになった山崎は、彼女の顔をじ
っと見つめる。すると、何を思ったのか彼女は山崎にウィンクをし
て見せた。

????「みんなごめんなさい。うつかりそこで転んじゃって」

宇宙人ALL「か、看護婦長さん!!!!」

衛生兵3「だ、大丈夫ですか鈴原婦長!!!!」

衛生兵1「直ぐに赤チンでも!!!」

鈴原「大丈夫、心配しないで。」

それより、今日はミーティングを行うから、十五分後に私の部屋
に来るように皆に伝えておいて」

衛生兵ALL「わかりました」

鈴原「それじゃ、私は婦長室に行ってるから。あとはよろしくね」

鈴原は落ち着いた表情でそれだけ言うとはたりとドアを閉める。

なんとも肝が据わった女に、感心を抱いた山崎。呆けた顔が今ひ
とつしまりが無い。

それを見てか、鈴原はくすくすと笑う。

山崎「な、何がおかしい？」

鈴原「別に…… それより、お話があるんでしょう。婦長室は上

よ、ついて来て」

鈴原は口元を手で押さえながら歩き出す。

アサルトライフルにロックをかけた山崎は、少し間を置いて彼女のあとを追った。

第十四話 初めての作戦 Part 2

ちゃぶ台の前に居並ぶ五十嵐たち四人。ちゃぶ台の上には大島のノートPCが整然と置かれている。

高部「今日、お前たちに電話をかけたのは他でもない」

山崎・浜田（（ついにばれたかー！！！！））

「ごくりとつばを飲み下す山崎と浜田。何食わぬ顔で聞いている五十嵐。めんどくさそうに半目の大島。

高部「任務だ。前線部隊から逸れた小隊を救出してほしい」

ほっと息をつく山崎。その横で浜田は胸をなでおろす。

五十嵐は任務と聞き何がうれしいのかはしゃぎ出した。

五十嵐「高部大佐、五十嵐小隊すぐに出動するであります！！」

高部「まで五十嵐。救出対象の情報もなしにどうするつもりだ、早まるな」

浜田「そつだよへへ」ちよ。落ち着いて」

とりあえず床に五十嵐を座らせる。それから、こほんと咳こんで、高部は話を続ける。

高部「救出対象は、第七衛生部隊。これは本土の病院から出向した義勇軍的部隊で、殆どの人が医療のスペシャリスト。反面、戦闘兵が殆どいない部隊だ。第三大隊所属の部隊だったが、第三部隊の撤退戦のおり奥地で孤立。現在、未確認宇宙人達に拘束されている」

山崎「なるほどな。戦闘兵がないから自力での脱出も不可。だが、大群で攻め入れれば何とかなるんじゃない」

高部「無理だ、彼らに最も近い大隊で、現地到着に三日はかかるなかつ、先日の大規模迎撃戦でどの隊も状態が良くない。とても宇宙人の包囲網を突破する力は無い」

五十嵐「それで、あたし達の出番なんですね」

高部「そうだ…… 資料によれば君達は、敵地の包囲網の中に孤立する形で陣取っている。ここからならば、直接救出に迎えるし、大規模な戦闘にも発展しない」

山崎「局地戦。さらに、ごくごく小規模な戦闘を想定して話しておられますね」

高部「ああ。撤退兵の情報によれば、第七衛生部隊を包囲した宇宙人の数はそう多くないそうだ。ゲリラ的戦闘で活路を開き、第七衛生部隊を救出してもらう」

大島「けど、包囲網の突破はどうするお？ 一部隊を早々包囲網の中から出すとはとても思えないお」

高部「それについては、既に手は打ってある。君達は、敵の手から第七衛生部隊を解放することだけに専念してくれ」

大島「まあそういうなら、そっちに任せるお。ただ、捨て駒にしたら容赦しないお」

大島の表情に陰りが入る。気のせいか、パソコンの向こうの高部が少しもったようだった。

高部「それと、君達はこの作戦以後も敵陣内に潜伏してもらいたい」

五十嵐「な、何ですか」

浜田「今回の作戦で、本隊に合流できるんじゃないんですか？」

浜田と五十嵐が不満な表情でパソコンへと顔を乗り出す。

高部「つい先ほどの会議で、今後今回のような事態が起きた時の保険に君達を敵陣内に残留させたほうがいいのではという意見が出てな、君達の本隊合流はしばらく延期してもらおう事になった」

五十嵐「そんな」

心底がつくりと肩を落とす五十嵐。浜田も山崎も、ため息混じりに肩を落とした。

高部「まあ我々も君達の実力を、我々上層部は高く買っているのだ。それに、帰還した際にはそれなりの恩給がある。しばらく我慢してくれ」

五十嵐「はい。分かりました」

浜田「…… そういわれたら仕方ないよね……」

山崎（輸送品に手を付けたから、差し引きゼロだろうけどな……）

大島「で、高部。救出対象の詳細情報が欲しいお」

高部「うむ。救出対象だが、現在確認されている拘束地は……」

大島「いやデータで欲しいお。メールか何かで送ってくれだお」

「ガシャン」

ノートPCからガラスの割れるような音が響く。そして、ガチャガチャとまるで受話器が揺れるような音がする。

高部「め、メール？ 手紙のことか？」

大島「何言ってるお。メールって言ったら電子メールの事だお。手紙なんか送ってる時間なんてないお」

高部「あ、うんそうだな。よし、電子メールか…… で、それで何を送るんだ？」

大島「救出対象のデータだお！！ お前のパソコンから、軍部のサーバーにアクセスできるお？」

高部「サーバ？？？ 鯖にアクセスしてどうするんだ、大島？」

大島「さっきから何言ってるお、高部！！ まさか、おまえ……」

しばらく続く沈黙。

高部「いきなりいろんなこと言われても、素人には分からん。もつと一般的な言葉を使ってくれ」

大島「メールは一般的な言葉だお。高部、まさかメールやったことないのかお？」

高部「ば、馬鹿者！！ そんなもの、ちょっとくらい。ほんのちよつと位は……」

大島「やった事ないお？」

高部「…… ない」

疲れたように前倒れになる大島。

むくりと立ち上がると、眉間に青筋を立てパソコン前に座る。

大島「せっかく、学術機関並みのスーパーコンピュータ所有してるんだから、少しは使いこなせるように努力するお！！」

高部「分からないものは、分からないのだ仕方ないだろ！！」

大島「だから藻前はムカつくんだお！！ この七光り！！」

高部「な、貴様あ！！ この私を愚弄するのか！！」

大島「ああ、いくらでも言ってるお！！ この機械オンチ！！ 筋肉女！！ 万年独身！！」

高部「うるさい、この引きこもり！！ 運動オンチ！！ 貧弱男！！」

飛び交う罵詈雑言。流石に見かねた、浜田と山崎が止めに入る。

パソコンから流れてくる、高部の声は少し上ずっているようで、よほど精神的にこたえたのが分かる。

素早く飛びかかった浜田が、大島を羽交い絞めにする。それと同時にノートパソコンを大島から遠ざける山崎。

浜田「ほら、大島。怒っても何もならないんだ、みつともないからやめようよ」

大島「離すお浜田！ あいつにはガツンと言ってやらないと気が済まないお！！」

山崎「すみません、高部大佐。大島の奴が馬鹿なこと言って」

高部「ふー、ふー……ふん、まあいい……今回は特別に大目に見てやる」

大島「何が大目に見てやるだお！！！」

浜田「大島！ やめろつてば！！！」

数分後。

大島「これで、救出対象のデータは揃ったお」

大島は高部のPCをリモートコントロールして救出対象の情報を入手した。

山崎（まさか、ハッキングするとは）

浜田（凄いことには凄いが……）

高部「どうだ、データは取れたか、大島？」

山崎・浜田（自分のパソコンをハッキングさせるこいつも凄い）

高部「しかし流石大島。凄いなお前は……」

大島「いいかお。次も何か用事があつたら、さつき教えた手順でVNCサーバを立ち上げるお」

高部「分かった大島。また何かあつたときは頼む…… あと、その…… メールというのも教えてくれ」

大島「そのうち教えてやるお。それじゃ、切るお」

高部「あ、おおし……」

何か言いたげだった高部を半ば無視する形で電話を終了する、大島。

大きなため息をつく、へたりとちゃぶ台に倒れこむ。

大島「あいつの相手は疲れるお……」

山崎・浜田「お、お疲れ……」

五十嵐「それにしても、凄いやね島ちゃん。パソコンオタクって奴？」

大島「何とでも言えばいいお」

少し不機嫌そうに起き上がると、大島は高部のパソコンから取得した資料を表示する。

拘束されている対象の位置情報と、現在の自分達の位置情報を画面いっぱいに表示した。

山崎「いや、実際凄いな大島」

浜田「いとも簡単にハッキングしちゃうなんて……」

大島「ただリモートコントロールできるようにしただけだお。こ

んなのハッキングなんていわないお」

浜田「リモートコントロール？」

何を言っているのか分からないという顔をする浜田。頭が痛そうに手を頭にやる大島。

大島「もういいお……」

あきらめるように大島は言った。

山崎「それにしても、高部にハッキングがばれたらどうするんだ？」

大島「だから…… もう！ 本人同意の上でやったんだから、別に罪になんかならないお」

山崎「そ、そうなのか……」

また、あきらめた表情になる大島。

大島「それに……」

大島が言うや否や、再び電話の呼び出し音がノートPCから鳴り出す。

大島は本当に面倒くさそうに電話に出た。

高部「大島、PCの終了の仕方を……」

大島「こんな奴に、そんなこと一生理解なんてできないお」

第十五話 初めての作戦 Part 3

元看護婦 鈴原綾子 衛生兵

鈴原「さて、いったいどういった用件なんですか」

綺麗に整頓されたワークデスクを挟み、座りあった鈴原と山崎。鈴原は落ち着いた表情で山崎に問いかける。

もっと救援に喜ぶかと思っていた山崎としては、あまりに落ち着き払った鈴原の対応は今ひとつ拍子抜けだった。

山崎「あんたらが敵軍の真ん中で拘束されたって言うから、俺達の小隊が救出要請を受けてな」

鈴原「私たちが救出しに来てくれたんですか」

山崎「そういうことだ。もう安心していいぞ」

ここで鈴原は少しほっとした表情をする。

落ち着き払っていても現在の状況に危機は感じていたのだろうか。なんとも気丈な人だと山崎は感心する。

山崎「既に仲間が外でスタンバイしている。こっちの準備は万端だ。あんたらは、ただ東に向かって駆ければいい」

鈴原「しかし、ここは敵陣の真ん中。どうやって敵の戦線を通過するつもりなんですか？」

山崎「それについては俺達も本隊から聞かされていない。ただ、東の丘陵地で待機とだけ言われている」

鈴原「信頼して良いんですね」

山崎「たぶんな」

ぐつと胸元の前で、ペンダントを握る鈴原。中に入っているのは恋人の写真だろうか。

目を瞑り一呼吸置いた後、鈴原は山崎に向き直った。

鈴原「了解しました、えーと……」

山崎「山崎だ」

鈴原「山崎さん。決行は……」

山崎「すぐにでもだ。七時までに脱出が確認されなかった場合、仲間は撤退する手はずになってる」

とここで考え込むそぶりを見せる鈴原。

山崎「なんだ、何か不安なことでもあるのか？」

鈴原「ええ…… 私以外の隊員達のことなんです……」

山崎「さつき下にいた奴らのことか？」

鈴原「ええ。彼女達が果たして納得するか……」

妙なことを言うものだ。山崎は眉間にしわを寄せる。

山崎「この状態から開放されるんだぞ。なんでそれを納得しないんだ？」

鈴原「それは……」

とって鈴原は目を逸らす。と、そのとき扉からノックの音が聞こえた。

衛生兵1「婦長、入ってもよろしいでしょうか」

鈴原「もう全員そろっているの？」

衛生兵1「はい、六人全員揃っております」

山崎（六人？ 話じゃ八人と聞いていたが……）

鈴原「そう、じゃあ入ってきなさい」

山崎は立ち上がり部屋の壁際へと身を移す。

入ってきた衛生兵とは名ばかりの看護婦達は、鈴原に一礼すると横一列に並ぶ。

鈴原「それじゃあ、始めてちょうだい」

凜とした鈴原がそういうと、看護婦達は脇に抱えたボードを前に持ち、報告を始める。

衛生兵1「山田洋太郎さん。本日特に異常なし。三食ともに食べ、リハビリも良好な模様」

衛生兵2「雪島勝さん。体の不調を訴え、本日は一度も起き上がりません。食事も半分ほどしか喉を通っていません」

山崎「こ、これは…… ミーティング？」

山崎の額を一筋の汗が流れ落ちる。

看護婦達は山崎に気づくでもなく、ただ黙々と宇宙人の患者の容態を告げていく。

鈴原を、それをさも当然のように聞く。
果たしてここは敵の本拠地の中なのか。病院ではないのだろうか。

山崎が当惑している間に、報告は終わりを告げた。

鈴原「だいたい分かったわ。引き続き担当の患者のケアをお願いします」

衛生兵A L L「はい!!」

元気な声で返事をする衛生兵。と、ここで山崎の存在に気がついた。

衛生兵3「鈴原婦長。その方はいつたい……」

手に持っている銃に機がついたのか、おそろおそろ質問する衛生兵。

鈴原がにこりと微笑むとこちらに近づく。

鈴原「私たちと同じで退却に失敗したそうなの。ねえ、山崎さん？」

いきなり話を振られて当惑するも、ここはそう答えたほうが無難なのかもしれない。

山崎「あ、ああ……」

山崎は軽く頷く。

にこりと鈴原は微笑むと居並ぶ衛生兵たちのほうを向く。

鈴原「患者さんたちには黙っておいてね。おびえるといけないから……」

衛生兵A L L「はい……」

衛生兵たちの顔から疑心の色は消えていないが、とりあえず納得はしてもらえたみたいだ。

鈴原「さあ、みんな持ち場に戻って!!」

鈴原が手を二回たたくと、衛生兵たちは一礼して入ってきたドアから出て行った。

残された山崎は鈴原のほうを向く。

山崎「…… いったいどういうことだ。宇宙人を看護するだなんて。何か弱みでも握られてるのか？」

鈴原「いえ……」

鈴原は残念そうに首を振る。

山崎「んじゃ、操られてるのか？」

鈴原「いいえ、全員が全員、自分の意思で看護を行っているの」

山崎「な、何でそんなことを……」

鈴原「怪我をしている人、体調の優れない人がいたら、それがどんな悪人だって放っておけない。」

看護婦なんてそんなものなのよ……」

うつむき気味の鈴原。

ここで言わんとせん事を察した山崎も黙り込んだ。

ようは、彼女達が人が宇宙人たちを見捨てられないということだ。

山崎「何とかならないのか？」

鈴原「だまして丘陵地まで連れ出すことはできるわ、けど……多分彼らをおいていくことに戸惑うでしょうね」

山崎「宇宙人への未練を断つ…… 何かいい策はないか？」

鈴原は黙り込み。そして意を決したように山崎を見た。

鈴原「一つだけ」

その目に答えるように見つめ返す山崎。

山崎「成功の見込みは？」

鈴原「まず間違いなく、彼女達は宇宙人に対する未練を断ち切り
ます。ただ……」

鈴原「あなたの協力が必要です……」

第十六話 初めての作戦 Part 4

山崎「おまえら、静かにしろ!!!」

銃声が屋内にこだまする。

一瞬何がなんだか分からなかった衛生兵たちは、その銃声で急に静まり返った。

ベッドで寝ている宇宙人達も、一同に山崎のほうを向く。

手に婦長を抱き、銃を持ちこちらに威嚇する男。

山崎「どういう了見かは知らないが、敵の宇宙人をかくまうんなぞお前達気でも狂ってるのか？」

衛生兵1「なっ…… あな」

鈴原「駄目!!! 下手に刺激しちゃ駄目よ!!!」

鈴原が食って掛かろうとした部下を止める。

苦渋に満ちた顔で衛生兵の顔が歪んだ。

山崎「そうだ、こいつのように大人しくしてれば、命だけは助けてやる。人間だけはな!!!」

山崎は銃口を宇宙人の上に向けると、二・三発ほど発砲する。

天井は打ち抜かれ破片が寝ている宇宙人の布団へ舞い落ちる。

宇宙人たちの顔がさっと青ざめた。

衛生兵2「あなた、分かっているの？ ここは敵陣のど真ん中なのよ。こんなことしても無意味でしかないわ!!!」

鈴原「や、やめなさい七瀬!!!」

山崎「ああ？ 何だとてめえ」

一人の衛生兵が前に出る、眉を吊り上げ酷く怒っているようだ。

衛生兵2「ここでこの人たちを殺しても、仲間が必ず報復に来るわ。敵のど真ん中、逃げ切れるわけないじゃない！！」

山崎「それが、いつたい何だって言うんだ？」

衛生兵2「殺すだけ無駄だって言うのよ！！ 命を大切にしないでなんて馬鹿じゃな……」

山崎が衛生兵の頬を打った。

衛生兵2「な…… 何すんのよ！！」

山崎「うるせえ！！ 俺はな、宇宙人に仲間殺されてんだよ！！
いくら弱っているからってなあ、見逃すなんてできねえんだよ！！」

辺りはしんと静まり返る。ぶたれた衛生兵もそういわれては言葉が出ない。

衛生兵をはじめ飛ばすと、鬼気迫る顔で銃を構える山崎。

今度は先ほどと違い、しっかりと銃口が宇宙人に向けられる。

山崎「おめえたちはよお。ずるいよな。

泣いてわめいたら、助けてくれる人が居るんだぜ。

飯だって食わせてもらえるし、惨めな思いもしなくていい」

引き金に手をやると山崎は宇宙人に一步近づく。

一番近くのベッドに寝ていた宇宙人に銃口を突きつけると、下目に睨み付けた。

衛生兵3「や、やめて！！ けが人に酷いことしないで！！」

山崎「甘ったれんな！！ 戦争なんだよ！！」

宇宙人と山崎の目が会う。

山崎「死ね」

山崎が銃口を引こうとしたその瞬間。何か、山崎の方へと飛んできた。

花瓶だ。そう山崎が判断したとき、既にそれは彼の頭を揺らしていた。

鈴原「今よ、みんな！！ 逃げて！！」

鈴原の声に、全員が我に返ったように動き出した。

たった一つのドアに向かい、衛生兵と宇宙人が一斉に駆け出した。

山崎「ま…… 待て……」

鈴原の足をつかむ山崎。頭から血を流しながらもその力は強い。

衛生兵1「ふ、婦長！！」

宇宙人2「婦長さん！！」

鈴原「いいから行って！！ できるだけここから遠くへ！！」

少しずつ立ち上がるうとする山崎は、血を滴らせながら逃げようとする彼らをにらみつける。数々の戦場を潜り抜けてきた兵の目は、見るものを圧倒する。

衛生兵「すみません、婦長！！」

く。
衛生兵、宇宙人達は後ろめたさをこまかすようにドアから出て行

喧騒の跡に残された二人。

山崎「…… まあ、こんなものか？」

山崎がへたりと尻をついた。

鈴原「山崎さん！！ 大丈夫ですか！？」

包帯をぐるぐると頭に巻きながら鈴原は山崎に謝る。

山崎「あんたが謝る必要はねえよ。それに、作戦は成功してるんだからよ」

鈴原「それでも、まさかこんなことになるだなんて」

山崎「こんなの戦場じゃ日常茶飯事さ……」

包帯を巻き終えると、山崎は急いで立ち上がる。同じく鈴原も、横で山崎を支えるように立った。

山崎「で、最後の切り札って奴はいつたいたいどこにあるんだい？」

鈴原「いえその…… あるっていうか、居るといっつか……」

怪訝な顔をする山崎。

山崎「なんだそれ…… いったいどういう」

鈴原「あってみれば、あなたも分かると思います……」

そういつて鈴原はドアを開ける。

未だ脳のゆれが収まらない山崎は、支えながら部屋の外に出ると、少し暗めの廊下に入った。

第十七話 初めての作戦 Part 5

衛生兵1「大丈夫みんな!!」

館から少し離れたところで、彼らは座り込んでいた。

婦長が居ないのが不安ながらも、館に戻れば銃を持った男。

一体どうすればいいのか分からなくなり、途方にくれた彼らは、いったん歩みを止めたのだった。

とりあえずリーダー格の一人が、衛生兵の数そして宇宙人の数を確認する。

六人の衛星兵と、四人の宇宙人を指差し数えると、ほっと胸をなでおろした。

衛生兵1「大丈夫、全員居るわ」

そういうと木の根元に座り込み、一息つく。

逃げる途中で怪我を負ったものも居たのか、衛生兵も宇宙人も慢心相違の格好だ。

疲れたのかはたまたま先ほどの事件の衝撃がまだ収まらぬのか、皆往々として口を閉ざしている。

衛生兵2「ねえ、これからどうするの?」

沈黙を破り、不安そうに言う衛生兵。

静かだった場が微かにざわめいた。

衛生兵3「どうするってそれわ……」

衛生兵2「婦長はあいつに捕まっちゃったし、館には戻れない。」

敵陣のど真ん中で、いったいどうやって生きていけば」

衛生兵1「…… だいたい、あいつ最初に見たときから怪しかったのよ…… 何であんなの婦長は匿ったりしたんだろ」

衛生兵3「婦長大丈夫かな……」

逃げてきた方向に目をやる衛星兵たち。宇宙人もおなじく館の方向を見る。

と、とたん一人の衛生兵が泣き崩れた。

衛生兵2「うう…… もうやだよ。これ以上誰かが居なくなるだなんて…… 先代も、鈴原さんも……」

衛生兵3「な、七瀬さん…… 泣いちゃ駄目だよ…… そんな……」

つられるように泣き出す衛生兵3。次々にそれはあたりに広がっていく。

夜の森に女達の泣き声が響く。

宇宙人たちはそんな光景を不安げに見つめている。
ふと、一人の宇宙人が前に出た。

宇宙人1「泣かないでください、皆さん……」

衛生兵2「や、山田さん……」

衛生兵1「けど、私たち…… もうどうしていいやら……」

宇宙人2「大丈夫です。私たちが、何があっても他の宇宙人からあなた達を守ります!!!」

衛生兵1「雪島さん!!!」

ひしりと宇宙人に抱きつく衛生兵たち。

満天の星空の下、彼らの姿は美しく照らし出された。

????「い、いゝのゝ。そのたくましい腕でもっと抱きしめてええええ!!」

宇宙人A L L「!!!!」

衛生兵A L L「!?!」

宇宙人3「な、何だ今の声……」

衛生兵1「今の声、そしてあの恥ずかしくてとてもいえそうにな
いセリフ…… まさか!!」

宇宙人4「う、うわあゝ!!!! み、みんな助けしてくれえゝ!!」

その叫び声の元に彼らは一斉に振り向く。

宇宙人に負ぶさる奇妙な生命体。頭には帽子、上下一体となった服。年期が入ってしわくちやのストッキング。

それは、姿だけは看護婦の山姥と違っていいような女だ。

????「たくましいのう。うるおしいのう。はりがあるのう。
このこの」

宇宙人4「や、やめてくれえ。乳首をつねらないでくれえ!!
き、気持ち悪い!!」

????「すなおじゃないのう。気持ちええ癖に、ほれほれ」

宇宙人の胸元に手を滑り込ませて、乳首をいじくる山姥。

月光に照らし出された顔はだらしなくにやけ、まさに妖怪といっ
た表情である。

衛生兵A L L「ゆ、湯野婦長!!」

衛星兵たちが驚きの声を上げる。

宇宙人3「ゲエツ!! あの女は確か、始末したはずじゃ……」

衛生兵1「え…… 野原さん、今なんて……」

宇宙人3「い!! いえ、その、なんでもな……」

しまったという感じで宇宙人がたじろぐ。そのときである、少し高めの丘に二つの影がかかった。

???「みんな、目を覚まさない!!」

衛星兵たちが一斉に振り返る。

衛生兵ALL「す、鈴原婦長!!」

鈴原「みんな、宇宙人たちの顔をよく見なさい。それが、彼らの本性よ!!」

いわれて衛生兵たちは手前に居る宇宙人達の顔を見た。

どれもこれもにやけ顔、とても人を心配するような顔ではない。

そして、どいつもこいつも分かりやすいくらいに、鼻の下が伸びきっている。

と、興奮した宇宙人の鼻息が衛生兵にかかった。

衛生兵2「い、いやああああ!!」

衛生兵1「七瀬!? ひ、ああ!!」

皆が皆、まるで糸が切れたかのように宇宙人から離れたです。

宇宙人たちは伸びきった鼻の下はそのままに、しまったという表情で汗をたらした。

鈴原「わかった、みんな。その人たちはね、私たちのことを本気で心配してるわけでもなければ、困っているわけでもないわ。私たちの行動を観て楽しんでるだけなの!!」

衛生兵1「そ、そんな……」

衛生兵3「嘘……」

鈴原「もっといえば……その人たちは、病気でもなければ怪我もしてない!! いたって健康体よ!!」

病気の振りをして、私たちを振り回して楽しむ……

地球人で言うところのミュンヒハウゼン症候群患者なの!!」

衛星兵たちがじりと後ろに下がる。

衛生兵2「わ、私たちを騙してたのね……」

神秘的な宇宙人たちの顔。

不意に一人の宇宙人が狂ったように笑い出した。

宇宙人2「そうさ、俺達はナース好き好き、コスプレ系第三惑星から来た宇宙人。白タイツ星人だ!!」

宇宙人3「君達のような若いナースの働く姿がどうしても観たくてね、病人の振りをしていたのだよ」

宇宙人1「そのババアは俺達の趣味の範囲外だったから始末したつもりだったんだが……まさか、生きてやがったとはな」

宇宙人4「ああ、そそんなところ……ら、らめええええ!!」

そついうと、くると振り返り鈴原を睨み付ける宇宙人たち。

宇宙人2「いつから気づいてたんだ鈴原さん？」

鈴原「湯野婦長が居なくなった日だよ。あの日、心配になってつけてみて正解だったわ。おかげで湯野婦長も助かったし、あなた達の本性に気付くこともできたんですもの」

宇宙人3「余計なことをしてくれたものだ……」

宇宙人1「大人しくしていれば、もう少し長生きできたものお」

目を光らせ威嚇する宇宙人。

身構える鈴原。

鈴原「私たちをどうするつもり!!」

宇宙人2「今までどおりさ…… 館に戻って俺達の世話をしてもらおう……」

宇宙人1「一生な!!!!」

山崎「はいはい。そういう妄言は……」

すかさず、鈴原の横ですましてたっていた山崎が、宇宙人たちの前に出る。

寝ていたときには気付かなかった、山崎より宇宙人は大きい。

山崎を見下す宇宙人。

山崎「とりあえず、俺を倒してからにしろ？」

宇宙人1「うるせえぞチビ野郎!!」

宇宙人が殴りかかる。しかし、それは大きくからぶった。

宇宙人の目が山崎の目を捉える。そして、次の瞬間それはまった

くあさつての方向へと飛ばされる。

山崎の蹴りが見事に宇宙人の顔にヒットしたのだ。

山崎「ここはとりあえず、俺に任せて！！ 早くみんな逃げろ！

」！

鈴原「みんな、こっちよ！！ 早く！！」

鈴原が山崎の横を通り過ぎる、それを止めようとする宇宙人を制して山崎は拳を握り締めた。

第十八話 初めての作戦 Part 6

五十嵐「山ちゃん遅いね……」

浜田「もしかして僕達忘れられちゃったのかなあ……」

五十嵐「それは無いよ。今さっき連絡入ったし」

東方の森にて潜伏中の五十嵐と浜田。

茂みの中から望遠鏡で辺りを見渡すと、浜田はため息をつく。

浜田「しかし、何でまたそんなことしなくちゃならないんだろ」

五十嵐「なつちゃんはやりたくないの？」

浜田「そりゃ…… やりたくないよ」

俯きぎみにつぶやく浜田。一方の五十嵐はといえば、何やらとてもうれしそうにしている。

と、そのとき五十嵐たちの後ろの茂みが激しく揺れた。

大島「お待たせだお、例のモノを持ってきたお……」

茂みを裂いて出てきたのは軽装の大島。手には紙袋を抱え、息を切らしていた。

大島「それにしても、山崎も突然すぎるお…… こっちの身にもなってくれだお」

浜田「ほ、本当にあったんだ……」

五十嵐「うわ、早く見せて島ちゃん!!」

そついうと、五十嵐は大島から紙袋を奪った。

鈴原「山崎さん!! 早く!!」

宇宙人の足止めを終え、先行した衛生兵部隊へと向かっていた山崎は、心配になり一人戻ってきた鈴原と鉢合わせた。

鈴原は山崎を見るや酷く驚き、すぐさま山崎に駆け寄る。

当の山崎はといえば、へらへらとさも何でもなさそうに満身創痍の身で笑う。

鈴原「凄い血…… それに、酷いあざ」

山崎「まあ、少しばかり油断しちまってな。大したことは……」

鈴原「そんな強がり言わないでください!! さあ、私の肩に掴まって……」

鈴原が山崎の手を肩にかける。鈴原が思った以上に山崎の足取りは重たく、少しずつしか前にしか進めない。

鈴原「よく、こんな体で、こんなところまでこれましたね」

山崎「俺のことはどうでもいい…… それより、みんな無事に東の待機ポイントに着いたのか……」

鈴原「だから、そんなことより自分の心配を!!」

山崎「着いたのか?」

山崎は怒気を含み荒げる声でそういう。

臆したわけではないが、その怒気に何かを感じ取った鈴原は仕方なさそうに出かっていた言葉を飲み込む。

鈴原「……無事였습니다！ みんな、丘陵地で待機中です」
山崎「そうか、よかった……」

と、ここで山崎が倒れる。
安心したのだろうか、覗き込んだ背中には酷く抉られた傷跡があった。

鈴原はその傷を見て悲鳴を上げる。

鈴原「山崎さん！！」

山崎「しつ、大声を出すな！ あいつらが、目を覚まして追ってくるともかぎらねんだぞ」

鈴原「いいからじつとして下さい……」

鈴原は自分の服の右肩口から袖口までを引き破る。胸ポケットから取り出した消毒液で傷口を消毒すると、破った服をそこにあて包帯で固定した。

山崎「鈴原、お前も早く行けよ……俺なんかにかまってないでさ」

鈴原「やめてください！！ そんな言い方！！」

鈴原が涙を流して叫んだ。

鈴原「そうやって、自分の命を犠牲にして！！　なんで、なんでそんな……　残される人のことも考えないで……」

大の大人が声をあげ、顔をくしゃくしゃにして泣いている。

山崎「何だよいきなり……泣くなって」

鈴原「勝手なんですよ、かっこいいとでも思ってるんですか！！」

こんなこと、ちつともかつこよくなんか無いのに」

ぼたぼたと山崎の頬に落ちる涙。

山崎（こんな表情をこの女もするのか）

山崎は残った力を振り絞り立ち上がる。

涙を臉に湛えたまま鈴原は山崎を見上げた。

山崎「すまねえ。そうだな、かつこ悪いよな女一人も守れなくち
や」

鈴原「山崎さん……」

山崎「もう少し肩貸してくれ。あと少し行ったところで、仲間と
の合流地点なんだ……」

鈴原「……ん、はい！」

鈴原が再び山崎の手を担ぐ。上りだした月へと向かい二人は再び
歩き出した。

五十嵐「島ちゃん！！ ちょっと来てえ！！」

大島「なんだお…… つつ！！ 山崎！！」

浜田「山さん大丈夫！？」

鈴原「大丈夫、命に別状はありません」

五十嵐「あなたは……」

鈴原「第七衛生部隊所属、鈴原綾子二等兵です」

大島「とにかく、はやく横にさせるお。どこか、平らな場所はないかお……」

大島が山崎を担ぐのに加わる。五十嵐もそれに手を貸す。すかさず、浜田も加わった。

山崎「おう、みんな。悪いな……」

五十嵐「びつくりさせないでよ山ちゃん。心臓に悪いんだからね……」

浜田「そうだよ、山さん。らしくないよ、こんなの」

大島「丈夫だけがとりえのお前が…… 情けないお」

山崎「っ、大島おまえは」

大島「いいから、ほら。横になるお」

五十嵐たちは草の生い茂った場所へと山崎を下ろす。

傷口に触れたか、一瞬顔を山崎はゆがめたが、すぐに穏やかな顔になった。

いつしか、山崎は寝息を立てて眠り始めた。

鈴原「眠りました……」

大島「よくもやってくれたお、宇宙人の奴ら!!」

五十嵐「けど、山ちゃんが帰ってこれただけでも、よかったおもわなくちゃ」

浜田「そうだね…… けど、」

五十嵐・浜田・大島がいつせいに振り返る。

山崎が歩いてきた方向から、聞こえてくる物音。そして、時々見える明るい光線。

宇宙人たちはすぐそこまで来ている。

だがそれなのに、三人の顔がいつせいににやついた。

五十嵐「しつかりと、報復はしなくちゃね……」

大島「調子付かせるのは、漏れの主義じゃないお……」

五十嵐・浜田・大島「……次はこっちの番だ!!」「お!!」

第十九話 初めての作戦 Part 7

森の中を怪しい光を目から放ち徘徊する者が四人。

頬を赤く染め上げ、全身に痣を作り。それでもなお、ナースを求めの変態たち…… 白タイツ星人の四人組だ。

山崎との激闘でだいぶ痛めつけられたのか、その足取りはおぼつかない。

しかしながら、目は死んでいなかった。

宇宙人1「あいつら、どこへ行きやがった……」

宇宙人3「この包囲網を簡単に抜けられるはずが無い。きっと、その辺に……」

と、ここで宇宙人の一人が足を止める。

宇宙人2「どうした、見つけたのか？」

宇宙人4「い、いや。あれを見てくれ」

そういつて、宇宙人が指差した方向には、白熱灯で照らし出された看板が一つ。

「メイド喫茶 極楽浄土」

宇宙人ALL（（う、うさんくせー！！！！）（（

メイド服を着た仏像みたいなものがその横に置かれ、ようこそと書かれた板を持ってにやついている。

宇宙人が見ても罰当たりと思うその光景に、四人は息を呑んだ。

宇宙人1「メイドと冥土をかけたのか……」

宇宙人3「微妙にかかってない気もするがな……」

宇宙人2「な、なんて罰当たりな。謝れ！！ 両方に謝れ！！」

仏様にも、メイド様にも！！」

宇宙人4「！！ おい、みんなよく見る。看板の下のほうを！！」

再び指を刺す、宇宙人。

仏様がもつ看板には、五メートル先から見えるか見えないかくらい
の大きさで、こう書いてある。

「おさわりしほうだい。ご利益まちがいなし！！」

宇宙人A L L () () (ぶ、仏様が！？) () ()

宇宙人2「まさか、仏像のメイドが出てくるとかそういうのじゃないよな」

宇宙人3「言うな、萎える」

宇宙人1「俺なんか気持ち悪くなってきた……」

目に入れないようにと看板に背を向ける宇宙人たち。

だが、やはり気になるのかその場から動こうとはしない。

宇宙人2「だいたい、メイドなんて邪道だよな邪道。実際そんなのありえないって」

宇宙人3「そうそう。金持ちがメイド雇うなんて、何世紀前の話だつて」

宇宙人1「夢見すぎだよな、本当に。それに若い女の子がそんな仕事をすすんでするはず無いじゃん」

宇宙人3「現に日本には、メイド派遣会社とか無いじゃん。あつてせいぜい家政婦の派遣会社だろ」

宇宙人2「殺人現場とか見られるのがオチだつて」
宇宙人1・3「あるある!!」

宇宙人4「けど、一度は言われてみたいよね『ご主人様』つて…」

宇宙人の体の動きが止まる。
しばらくの静寂の後、ごまかすように笑い声が上がった。

宇宙人1「だいたい、俺達メイドよりナースだつっの、なあみんな」

宇宙人2「そ、そうそう。メイドなんてここ数年出てきた、ぽつと出だよ。ぽつと出。王道はナース!!」

宇宙人3「白衣の天使こそ最強だよな」

宇宙人1「ああ、白い制服!!」

宇宙人2「ナースキャップに注射器!!」

宇宙人3「白いタイツ!!」

宇宙人4「けど、白いニーソックスも魅力的だよね……」

宇宙人ALL「……」

また宇宙人たちの動きが止まる。

しかし、今度は先ほどとは違い、ごまかすような笑い声は上がらない。

かわりに、四人全員がいつせいにメイド喫茶のほうに向いた。

五十嵐「お帰りなさいませ〜 ご主人様あ〜」
「???」お…… お帰りなさいませ〜……」

メイド服に身を包んだ美少女二人。

一人は五十嵐。もう一人は、前髪で顔を隠しているので分からないが、ぱつと見た感じ内気少女という感じだ

宇宙人（（メ、メイドさん、キター!!!））

五十嵐「すみません、最近変な人がよく現れるので、落とし穴を掘っておいたんです〜」

「???」す、すみませんでした……」

メイド服姿の五十嵐ともう一人がフランクに謝る。
けっこう説明になっていないような謝り方ではあったが、衣装のパワーというか、メイドパワーというか。宇宙人たちは風きり音が聞こえるほどの勢いで左右に首を振る。

宇宙人2「い、いいいいよ。僕達も、よく前確認してなかったし。なあ、みんな」

宇宙人4「うんうん。いやー、ぜんぜん前確認してなかった。うん」

宇宙人3「ちょっと最近視力が落ちてきたからな〜。全然気付かなかったよ。メガネ買おうかな〜」

赤らむ顔で五十嵐たちを見つめる宇宙人。仲間が畏にかかり一瞬引き締まった顔も、既にだらしなく元に戻っていた。

五十嵐「そうですか〜。すみませんでした。」

それじゃあ、ご主人様。こちらでかけてお待ちくださいー!!」

席に案内される宇宙人たち。

何の躊躇もなく席に着くと、さらに顔をだらしなくして笑い出した。

宇宙人2「いやゝ入って良かったな、メイド喫茶」

宇宙人4「あんなかわいい娘がいるなんて、思わなかったな」

宇宙人3「俺、あの元氣そうな方が好みだわ」

宇宙人2「だよなゝ、元氣っ娘萌ゝって感じだよな」

宇宙人4「僕は前髪で顔隠してるほうかな。薄幸少女ってかんじで……」

宇宙人2「ああ、彼女もいいよなゝ。ちょっとオドオドしてるところもポイント高よな」

メイド談義に入った三人。

そこに五十嵐が、水を運んでくる。

五十嵐「み、水をお持ちしましたご主人さまあゝ」

宇宙人3「あ、はゝ……」

返事をしようと振り返った宇宙人、その顔に五十嵐が持ってきたお盆がクリティカルヒットする。

顔面にお盆を食らった宇宙人は後ろに向かい物凄い勢いで吹っ飛ばす。

その光景にあっけにとられる宇宙人達。

五十嵐「あ、すみません……」

宇宙人3「い、いいですよ。気にしないで、ください……」

五十嵐「てへ！」

五十嵐が舌を出してごまかす。

宇宙人3「ど、どじつ娘。萌〜……………」

宇宙人2「……………も、萌〜……………」

宇宙人4「……………」

五十嵐「すぐに、代わりをお持ちしますね〜」

林の奥へとかけていく五十嵐。それを目で追い終わると、今度は吹き飛ばされた仲間のほうへ眼をやる宇宙人達。

宇宙人2「幸せそうな顔して死んでるな……………」

宇宙人4「南無……………」

と、五十嵐が入っていった林の中から、今度は謎の美少女が出てくる。

さつきと同じく、手にはお盆を持っている。

???「さ、先程はすみませんでした……………お、お水です……………」

おずおずと、水をテーブルに置く美少女。

そのなんともし丁寧な仕草に、宇宙人ははっと息を呑む。

宇宙人2「君可愛いね、名前なんていうの」

宇宙人4「そうそう、ちょっと教えてくれないかな〜」

???「えっ、えっと。僕の名前は……………」

宇宙人4「え！？ 僕？」

しまったと肩を震わせる美少女。

「わ、私の名前は……」

急いで言い直す美少女に二人は顔をほころばせる。

宇宙人2・4（僕娘、萌〜！！）

と、さっと宇宙人が美少女の尻に手を這わす。

「ひゃっ！！ な、何するんですか！！」

宇宙人2「何って、おさわりし放題なんですよ？」

「ち、違います！！ そういう意味じゃ… あ、ちょっと。ご主人様」

宇宙人4「いいだろ、別に減るようなモノじゃないんだし……」

美少女の尻を撫で回しながらえへえへと悦に入る変態宇宙人。

「ほんとに、やめてください。あ、嫌あ！！」

宇宙人2「胸小さいね。サイズ何かな？ ハアハア」

「そ、そんなの…… は、測ったこと無いです……」

宇宙人4「そ、それじゃあ僕達が測つてあげるよ…… ハアハア」
「い、いやあ〜 助けて〜！！」

宇宙人が美少女の上着に手を書けた瞬間。物凄い勢いで五十嵐が林から飛び出してきた。

そして、振り向きざまの宇宙人を手に持っていた鈍器で思い切り

殴りつけた!!

五十嵐「ご主人様!! おさわりしほうだいなのは、この彫り物でございます!!」

宇宙人2「そ、そうなの…… ご、ごめんね…… ぐふ……」

殴られた宇宙人は血を頭から噴水のごとく放出しながら息絶えた。残された宇宙人はその惨劇に、いまだ美少女の尻から手を離していない。

五十嵐「ご主人様!! はやく、その手をどけて貰えますか!!」

宇宙人4「え!! あ、はい……」

臆した感じで手を引こうとする宇宙人。しかし、ここで彼に悪魔のささやきが。

宇宙人4「ここであっさり引き下がっちゃまっていいの?」

宇宙人4「もうちょっとくらいはっちゃけても、罰は当たらないって!!」

にやりと怪しい笑みをあげると、ぐらっと体を揺らす。そして、尻から前のほうへと手を滑らした。

宇宙人4「おおっと、手が滑っちゃまった。いや〜ごめ……」

と、いやらしく撫で回す手に、妙な違和感がわく。

浜田「うう…… もう僕お婿に行けない……」

五十嵐「なつちゃん気にしすぎだよ…… それに、お婿さんにならあたしがもらってあげるよ？」

メイド服姿で泣き崩れる浜田と、それを慰める五十嵐。

そんな彼らを他所に、大島は宇宙人たちを縛り上げていた。

大島「さて、これで今回のミッションは無事完了だよ」

鈴原「お疲れ様です……」

ぐるぐる巻きにされた宇宙人は未だ意識が戻っていないらしくぐったりしている。

一箇所にまとめて、折り重ねると、大島は五十嵐達のほうへ向かった。

大島「ほら、浜田。しっかりとするお。男ならこの程度のことできじけちゃ駄目だよ」

五十嵐「そっだよなつちゃん…… くよくよしてたらいけないよ」

浜田「じゃあ、お前がやればよかったじゃないか!!」

目に涙を湛え、鬼の形相で浜田が振り返る。

怖いもの知らずの大島もこれには肝を冷やしたのか、うっとうしく感じに一歩引く。

大島「いや、それはその…… 人には向き不向きがあるからお」

浜田「僕に向いてて、大島に向いてないって言うの!!」

五十嵐「けどなつちゃんとっても似合ってたよ。とっても綺麗だったよ」

浜田「そんなの聞きたくないよ!!」

いじいじと下を向いて落ち込む浜田。

これは時に任せるしかないかと、二人はその場から離れた。

五十嵐「ところでおさわりしほうだいの彫り物。あれって、いったい何なの？」

またしてもたじろぐ大島。

五十嵐と目をあわさないように、ゆっくりと横を向く。

大島「え！！ えっと、あれはその…… 亀、亀の神様の彫り物
だお！！」

五十嵐「ああ、それで亀の頭のような形なんだ……」

大島（男のあれだなんてとてもじゃないけど言えないお……）

大島（つつか、いったい上層部は何がやりたいお！！）

第二十話 初めての作戦 Part 8

山崎が目を覚ます。未だ空には満点の星。
気を失ってからそう長い時間はたっていないようだった。

鈴原「気が付きましたか、山崎さん……」

顔を覗きこんできた鈴原に、少し驚いたのか顔を赤らめる山崎。
上半身を起こすと、辺りを見渡した。

山崎「鈴原…… それに、五十嵐・浜田・大島……」

大島「やっと目を覚ましたかお」

山崎「…… 結局どうなった？」

浜田「山さんが寝てる間に、ほらこのとおり」

浜田が指差す方向には、縄で縛られた宇宙人達。

宇宙人たちは意識はないらしく全員ぐったりしている。

山崎「お前らにしちゃ上出来じゃないか」

大島「随分ないかただお」

浜田「もう、僕達だってやる時はやるんだからね」

五十嵐「そうそう！」

山崎「…… ふ。ははは、ははは」

山崎につられるように、全員が笑い出す。
しばらくの間その笑いがやむことはなかった。

と、そこに割り込むように入ってきたヘリコプターの回転音。

衛生兵2「鈴原婦長〜！！！」

鈴原「七瀬！？」

空を見上げれば日本陸軍付きのヘリコプター。開かれたドアからは衛生兵たちがこちらに手を振っていた。

大島「なるほど、ヘリコプターによる救出かお」

高部「すまん大島！！ 情報漏洩を防ぐために、あえて言わなかったのだ許せ！！」

大島「な！？ 高部、何で来てるお！！」

スピーカーから放たれるのは高部の声。助手席からこちらを覗いている女性、おそらく彼女が高部であろう。

高部「すまなかったな、五十嵐小隊！！ 恩給は追って報告する！！」

五十嵐「はい、ありがとうございます！！」

ヘリコプターから梯子が下ろされる。上って来いと言っことだろう、鈴原の前にちょうどそれは落ちて来た。

衛生兵1「婦長、上ってきて下さい！！」

鈴原「ええ、今行くわ！！」

梯子につかまる鈴原。軽く五十嵐たちに一礼すると、一歩一歩足場を確かに上へと登っていく。

五十嵐たちは直立不動、敬礼で彼女を送る。

山崎「鈴原！！」

一人寝ながら敬礼をしていた山崎が鈴原を呼ぶ。

鈴原は、梯子の途中で足を止め山崎の方を振り向いた。

山崎「あんたみたいに芯の強い女、久しぶりに見たぜ。

まだ戦争は続くだろうが、お互い生き延びられるよう努力しようや！！」

ぐっと拳を前に突き出す山崎。山崎が親指を立てると、鈴原も笑った。

鈴原「ええ！！ いずれまた会いましょう山崎さん！！ その時までお元気で！！！」

そういうと、また鈴原は梯子を上りだす。

鈴原と梯子を収納したヘリコプターは、五十嵐たちの上で旋回すると、北に向かい飛んでいった。

山崎「そうだな、また会えてえもんだな……」

寂しそうな顔でつぶやく山崎。

と、周りが面白そうな顔で笑っているのに気が付いた。

大島「山崎いゝ。また会うのかあ？」

五十嵐「山ちゃんもすみにおけないなあ」

浜田「このお、女泣かせですね山さん」

はっと笑い飛ばす山崎。

だるそうな足取りで立ち上がると、ヘリコプターが飛んでいった方の空を見上げた。

山崎「さ、帰ろうぜ。夕食まだだろ、腹減っちゃったよ俺」

五十嵐たちの顔が綻んだ。

五十嵐小队 初任務 第七衛生部隊救出作戦 成功

第二十一話 秋の味覚編 Part 1

大島「いやー、それにしてもジャングルにも秋が来るとは思わなかったお」

赤色に染まったジャングルを前に、大島がさも圧巻といわんばかりに言う。

浜田「だよな。普通、ジャングルって年中緑ってイメージだよな」

山崎「イメージってどうか、そうたる普通」

男三人。山の中腹辺りから赤いジャングルを見渡す。

背中には竹箆。手には軍手とつかみが一つ。頭にはヘルメットの代わりに、白いタオルを巻いたといういでたちだ。

と、そこに上から何かが滑り落ちてきた。

五十嵐「こら。みんな、さぼっちゃ駄目だよ！！ 折角ジャングルが秋になったんだから、今のうちに食べれるものを集めないとね」

浜田「ごめんごめん。今探すよ」

五十嵐「真面目にやないと、たとえなっちゃんでも、今日の晩御飯は抜きだからね」

山崎「そう急かすなよ、へーちよ。それに、ここら辺には俺達しか居ないんだぜ？」

五十嵐「駄目よ、それが駄目なのよ山ちゃん！！ みすみす腐らせたらもつたないじゃない」

ぶんすかと音を立てて二人に食って掛かる五十嵐。その背中は既にきのこで一杯である。とはいえ、それらの全てが食えるというわ

けでは無さそうである。

大島「やぶ蚊がウザイお。早く帰りたいお」

五十嵐「文句を言わない！！　ちゃっっちゃかやるの！！　ほら、早く！！」

大島「いやだお、帰りたいお！！　あちこち刺されて痒いお」

五十嵐「駄目ったら駄目！！　この籠一杯になるまで、今日は山から下りないんだから」

大島を押したて下っていく五十嵐。取り残された浜田と山崎は、はあとため息をつく。

山崎「いつちまった」

浜田「どうします、山さん。へ〜ちよのことだから、きっとこの籠一杯なんか採らないと帰れませんよ」

山崎「つってもなあ」

そういつて、山崎は辺りを見回す。

所狭しと敷き詰められたといわんばかりに生えるシイタケ・シメジ・マツタケ。

ころころとあちらこちらに散らばる毬栗。

集めるには集められる。だが、どうにも拾うのがめんどくさそうだ。

そしてなにより。

山崎「こいつらを籠の中に適当に放り込むのは良いんだが……」

浜田「足りないですよね……」

山崎・浜田「肉」

二人同時にため息もついた。そう、彼らはここ最近秋になってからというもの、これといった動物性たんぱく質を摂取していないのだ。

といつても、魚はちよくちよく食べている。問題は、豚とか牛とかそういう肉を食べていないことなのだ。なぜかそいつらは、山に居ないのだ。ほんのつい最近まで、ジャングルが赤く染まるまでは、結構というわけでもないがちよくちよくは取れたというのに。

浜田「秋が実りの季節といつても、流石にこればかりはどうにもならないですよね」

山崎「そうだよな。こればかりはな」

浜田「畏にも何もかかっていなかったし、本当にどうなってるんだろう」

浜田は、はあとため息をつく。若い身空に、ここ数日のベジタリアンな生活は随分と堪えたのだろう。

山崎は笑うと、きのこを拾い出した。そして、ふっと思い出したように腰を張る。

山崎「もしかして、宇宙人たちの仕業なのかもな」

浜田「まさか」

「???」「なぜばれたのだ」

不意の声に二人の顔が引きつる。声の主の居所は分からないが、意外と近くにいらっしゃるらしい。

山崎「……まさかな？」

浜田「まさか……ね？」

顔を見合わせ、青くする二人。と、そこに竹やぶから一人の男が現れた。

マッシュルームのような頭をした、サングラスをかけたその男は、亀の甲羅を背負ってこちらにやってくる。

???「わしの名前はか」

山崎「まで、それ以上言うな!!」

浜田「著作権的にまずいし、ネタとしても最悪なくらいにまずい!!」

山崎と浜田が必死に止める。

???「し、しかしのう。それじゃわしのことを何と呼んでもらえば……」

山崎「まで、ちょっと考える。けど、それはメジャーすぎるので、無しだ!!」

浜田「百歩譲っても、バイケンだけど…… それでも、一部のコアにはあれだろうし」

大島「公然猥褻カットも、パクリだお」

にゅつと山崎と浜田の間から大島が顔を出す。

山崎「大島!!」

浜田「大島!! へ〜ちよはどうしたの?」

大島「下のほうにキノコが群生しているのを見て一人で駆けていったお。それより、その宇宙人の名前をどうするかお」

浜田「え、ああ、うん。そうだね」

山崎「つってもいきなりは思いつかねえな…… そうだ、爺さん。あんた仇名かなんか無いのか?」

???「ん、あるにはあるが……」

浜田「それだよ！」

山崎「爺さん、なんて呼ばれてたんだ？」

???「わしの故郷は難波星とってのう。わし等兄弟三……」

大島「マテ！！ それは、肖像権とか人権的にかなりまずいお」

山崎「だあ、また振り出しじゃねえか！！」

???「す、すみません……」

数刻後

浜田「それじゃあ、爺さんの仇名は醤油ということぞで」

醤油「醤油ですじゃか……」

第二十二話 秋の味覚編 Part 2

甲羅を背負った爺さんが地面に正座している。それを取り囲むように、男三人。

山崎「で、醤油よ。あんた、いったいなんでまたこんな事を？」

大島「ジャングルを真つ赤にするなんて、まったくわかんないお。説明するお」

醤油「実はそれには深い訳がありまして……」

もじもじと下を向いて口ごもる醤油星人（仮）。

浜田「僕達に害を与えるつもりではないんだね？」

醤油「はい。もちろんです」

浜田のほうを上目遣いで見つめる醤油星人（仮）。それを見て、山崎と大島は浜田の後ろに回った。

大島「悪そうな奴には見えないお」

山崎「いや油断ならねえぞ。最近の宇宙人は演技が上手いから」

醤油「そんなこと無いですじゃ〜。この目を見てくれ〜」

浜田にまるで恋する乙女ばりの視線を送る醤油。思わず、浜田がのけぞった。次にその視線は山崎へと向けられる。山崎の頬を冷や汗が伝った。

山崎「分かった、分かった。分かったから、その恋する乙女のようにな目を止める」

醤油「分かってもらえたですじゃか」

浜田「心臓が止まるかと思った」

大島「達の悪い爺さんだお」

もじもじと身体をくねらせて、地面に正座する醤油。ひとたび座れば普通の爺さんのそれにはなった。

山崎「で、その深いわけって言うのは？」

醤油「実はですのう。わし等の星には二つの部族が存在しましてな」

浜田「二つの部族？」

山崎「なるほど部族間のいざこざという訳か」

醤油「そうですね。それで、わし等山の幸系部族と海の幸系部族は、長年に渡り血で血を洗うジェノサイドを繰り返しておるのですじゃ」

つつと醤油の目に涙があふれる。皺くちやの顔に浮かんだその憂いは、寂しげでそして疲れを感じさせる。

はつと、浜田と山崎は息を呑んだ。

浜田（可愛そうに）

山崎（抗争に疲れて、ここまで逃げてきたって事か。まったく、不憫だな……）

浜田はすつと醤油から視線を逸らし、山崎は握りこぶしを作り表情を険しくする。

二人とも醤油の境遇に少なからず心を動かされたようだ。どちらも苦渋の表情だ。

ただ、大島だけは平然とした顔をしている。

大島「それで、抗争に疲れて地球に逃げてきたって事かお？」

醤油「いや、ただの観光ですじゃ」

浜田・山崎（なんじゃそりゃ！！）

あっけに取られた感じで、ずっこける二人。

醤油「地球の女の子をとつかえひっかえ、そりゃもう常夏のアバンチュールを楽しむ予定だったの、あいつらときたら……」

大島「常夏のアバンチュールって、もう秋だお」

浜田「そうですか、観光ですか……」

山崎「心配するだけ損したぜ、このエロジジイ！！」

醤油「やつら、ワシが石油王の息子じゃから、こんなことまで追っかけてきよった。ワシの家の金が目的なんじゃ」

浜田「石油王？」

醤油「そうじゃ、ワシの親父は石油王なんじゃ。わしゃ遊んどつても次代の石油王なんじゃ」

大島「ニートかお！！」

山崎「ブルジョワジ―……」

浜田「あはは、あはははは……」

醤油は頭に青筋を作っけて怒りをあらわにする。

浜田も山崎も、あまつさえ大島さえも同じように怒りをあらわにする。無論、醤油に対してであるが。

山崎「なるほど、つまり違う部族間の奴らに狙われてるって事だな？」

醤油「そういうことですじゃ。それで、追っ手から身を隠すためにこんな風にジャングルを秋色に染めたというわけですじゃ」

悔しそうな表情をする醤油に対して、山崎一同は既にしらけきつ

ている。

大島「こんな奴放っておけばいいお。道楽放題で命狙われてって身から出た錆だお」

山崎「それはまあ…… そうだな」

浜田「僕もそう思うよ……」

醤油「そんな酷いですじゃー！！ 今ならサービスしまっせ、だんな」

そういつて、乙女座りでちらちらと上目使いをする醤油。ちらちらと着物のすそから、汚らしいふんどしをみせる。その行動に、山崎一同のモチベーションは、急降下。

大島「帰るお」

山崎「そうだな」

浜田「へーちよー！！ そろそろ帰るよ、出ておいでー！！」

???「マテー！！ お前ら、それでも誇り高きZ戦士か！！」

大声が秋の森にこだまする。樹の陰から現れたのは、栗の頭をした宇宙人だった。

醤油「おお！！ 天津は……」

大島「マテー！！」

山崎「どう見たってそれは違うだろうが！！ どういうネーミングセンスしてるんだあ！！」

醤油「天津甘栗のご飯だから略して天津は……」

大島「それは、栗ご飯だおー！！」

山崎「中華料理屋で栗ご飯出てきたらびっくりするだろうがー！！」

醤油・栗ご飯」「普通に出来るよなあ、中華で栗ご飯?」「

山崎・大島」「うるせえ!!!」「

第二十三話 秋の味覚編 Part 3

大島「で、栗ご飯は醤油の仲間ということでもいいのかお？」

栗ご飯「はい、そうです。どうもすみません」

山崎と大島にぼこぼこにされた二人は、地面に膝をついて正座している。

先ほどと同じく、男三人に二人は囲まれている。しかし眼には生氣が無く、体は満身創痍だ。

栗ご飯「おねげですだ、オラ達を助けてくんろー」

山崎「オラとかいうな、なまめかしいわ」

浜田「というか、それは主人公の口調だよな」

栗ご飯「だってオラ栗ご飯だし。主人公の息子だし」

大島「じゃあもうお前栗でいいお」

山崎「……なんだか卑猥だな」

いまさらながら、二人の様相を見て息を呑む三人。

亀の頭みたいな頭をしているマツタケ爺。なぜか知らんがメイド服で筋肉ムキムキの栗男。

浜田「放送禁止すれすれって感じのキャラだよな」

大島「もしかして、狙ってやってるのかも知れないお」

栗「まさかそんなわけ無いじゃないですか。狙ってませんよそんなこと」

醤油「ね〜」

なんともむかつくスマイルに、山崎と大島の眉間に皺がよる。ついでに山崎の拳もなる。

それを制するように浜田が前に出た。

浜田「まあ、助けてあげない事も無いけどさ。具体的にどうすればいいの？」

山崎「そうだな。そのお前ら付け狙ってるやつらを倒すとか、お前らが逃げるのをアシストするとか。そういうことを言ってもらわねえと、どうしようも無いぞ」

大島「そうだおそうだお」

醤油「そんなことを急に言われましても」

栗「ね〜」

殴りかかろうとする山崎の動きに、びっくりと反応する宇宙人二人。まるで、雨に当てられた捨て猫のようにプルプルと震えている。

一方の大島や浜田も、こればかりは止める気にならず、じっと下を向いていた。

浜田「そんなこと急につて…… 助けを求めているんじゃないの？」

醤油「今実際危機に瀕してるわけではないんです」

山崎「今がよければそれで良いってか」

大島「やっぱりニートだお」

心底頭が痛そうな表情をする浜田に対し、醤油と栗はあくまでマイペースだ。

指をくわえて僕ちゃんわかんないといった表情の醤油と栗。深いため息を浜田はついた。

浜田「とりあえず、君たちはどうしたいわけ？」

栗「毎日楽しんで楽しく暮らせたらそれでいい」

醤油「ついでに、女の子が居たらもつとええのう」

栗「メイドさんなんかいいよね〜 萌え〜って」

醤油「ワシは、メイドさんより巫女さんかえの〜」

浜田「まじめに答えろよ糞爺ども。裁断して海に捨てちまうぞ」

醤油・栗「ふあい。すみません」

普段は絶対見せないような鬼の形相に大島も山崎もやや引く。普段の彼を知る人が見たら、完全に引いてしまうような怒りの形相。流石に温厚な浜田も、彼らのいいかげんさに我慢ならぬのだろう。

山崎「浜田もあんな表情するんだな……」

大島「びつくりだお……」

浜田「で、どうしたいの？ 地球から去って、違う星にでも行く？」

醤油「はい、すぐにでも違う星へ移動したいのでその手助けをお願いします」

栗「すぐに準備させていただきます」

浜田「それじゃ僕たちがその君たちを狙ってる宇宙人をかく乱するから、その間にすばやく逃げるんだよ」

ほぼ浜田が言うがままに、話がまとまった。と、とたんにいつもの笑顔に戻る浜田。

この切り替わりの速さに、仲間の二人も啞然とする。

浜田「で、その付け狙ってる相手の情報はあるの？」

醤油「あります…… こいつですじゃ」

爺が渡した写真には、一匹の秋刀魚の顔をした宇宙人が乗っつい

る。ちゃんまげなど結わえて、どういった時代錯誤なのだろうか。

一昔前の時代劇のドラマに出てきたようなキャラクターの匂いがふんぷんする。

山崎も大島も、それを覗き込んで思わず吹き込んでしまった。

山崎「こんなやつに命狙われてるのか」

大島「ギャグとしか思えないお……」

浜田「名前は？」

栗「磯……」

山崎「もうそれはいい!!」

第二十四話 秋の味覚編 Part 4

浜田「それにしても、マツタケに粟に秋刀魚か…… 秋の味覚って感じだよな」

大島「そうだよ……」

山崎「俺は秋刀魚かな。あの腸の辺りの油ののり具合がたまんない。まあ、腸も上手いけど」

浜田「腸ってたまに鱗とか入ってたりしない？ 僕あれ苦手なんだよね」

大島「おまえら腸なんて良く食えるお」

木の上で件の秋刀魚星人を待ちながら、山崎たちは秋の味覚の話題で盛り上がっている。

既にあたりは夕日で照らされ始めており、赤いジャングルが何処までも続いている。

浜田「それにしてもあの二人。ちゃんと逃げる準備してるのかな」
大島「今日の夜陰にまぎれて出発するっていったお…… 信用するしかないお」

山崎「まあ、力づくで出て行かすのも一興だがな。あんだだけ小ばかにされておいてなんだし」

浜田「暴力沙汰は良くないよ。穏便にね」

にこりと笑う浜田に、山崎と大島が顔を見合わせる。

山崎「いや、お前のあのやり口は穏便なのか？」

浜田「え、あ。あれは、流石にあそこまで言われるとね……」

大島「そうだお。びっくりしたお。浜田も中々やるお」

山崎「なあ、俺もびっくりしたぞ」

浜田「も、もう二人ともよしてよ。僕だって人間なんだから、機嫌が悪くなることくらいあるよ!!」

恥ずかしそうに後頭部に手をやる浜田。ただただ笑うしかないといった感じの表情だ。

あまり本人としても本意ではなかったのだろう。あからさまにその話題は避けたいといった感じもする。

大島「わかったわかったお。これ以上言って怒られたらたまったもんじゃないお。お、山崎？」

山崎「そうだな。あんな感じに脅されたらたまったもんじゃないもんない」

浜田「だ〜から!! もう!!」

山崎・大島「ははは!!」お

と、そのとき彼らの居る木から西側で微かに何かが揺れた。この森の西側には実は河が面しており、そう遠く無いところに海岸がある。もし、地球上の魚類と同じように、水気の多いところを好むとするならば、秋刀魚星人はこの西側からやってくる可能性が高い。

浜田「きたのかな…… 皆、今更だけど作戦は良いね？」

大島「大丈夫だお。任せろお」

山崎「まだ明るいが…… まあ大丈夫だろう。やるか……」

そういつて山崎は携帯用のライトを取り出した。赤いボディのそれを肩に担ぐと、山崎はテンポ良く木の上を飛び去っていく。残された浜田と大島は、黒い暗幕を木の間で釣るしはじめた。

すぐに、山崎が戻ってきた。と、同時に下の林を裂いて走る謎の影が一つ。

山崎「当たり前だ！ やれ、浜田・大島！」

それは山崎の持っているライトの光から逃げるようにこちらへと走ってくる。二人はじつと身構えると息を殺す。と、その謎の影はついに浜田と大島がつるした暗幕の下に逃げ込んできた。

と、ここで浜田と大島が勢い良く飛び降りる。黒い影は、突然振ってきた天井に恐れをなしてか、じたばたと暗幕の中で暴れている。

浜田「観念しろ秋刀魚星人！！」

大島「大人しくしないと、丸焼きにして食っちゃおうお！！」

秋刀魚星人「なあ！！ 船底だと思つて入つていたら、畏だつたとわ！！ 拙者としたことが一生の不覚！！」

浜田「…… いや、ここ陸だし」

大島「馬鹿だお」

秋刀魚星人を抜け出せないようにぐるぐると簀巻きにする二人。

また、秋刀魚星人も不利と悟つたのか、あえて何もせずおとなしく二人にされるがままに任せている。

やがて、だいたい巻き終わると、秋刀魚星人が抜け出せぬようにさらにその上に麻縄で縛り付ける。

こうして出来上がった秋刀魚の巻き寿司を、三人は取り囲んだ。

秋刀魚星人「いや、お見事。地球人はほんくらばかりかと思つていたが、中々貴殿らのような気骨のある方も居られるのですな」

浜田「気骨って言うか、まあ君が間抜けなだけだよ」

大島「そうだお。間抜けというか馬鹿、馬鹿というか所詮魚類だお」

秋刀魚星人「またまた。そんなご謙遜を。いや、それがし感動し

たでござるよ」

秋刀魚星人は、エラをパクパクさせながらしみじみと目を閉じる。なんとも変な侵略者である。

掴まったというのになんともんきな宇宙人。それこそ、顔は見せてもらった写真と同じであるが、こんな陽気で気さくな宇宙人が刺客というのも今ひとつ信じがたい。と、三人はそれぞれ顔を見合わせる。

浜田「もしかして人違いならぬ、宇宙人違いかな」

大島「けど、もらった写真と同じ顔お」

山崎「着てる服もまったく同じだよな」

ぼろつちい着物に刀を三本。結わえた髪の毛と、なぜか顔だけ秋刀魚な異星人。まさしく、こいつしか居ない。が、外国人の顔が分からないように、もしかすると人違いかもしれない。

浜田「あの〜。もしかして、この写真アナタの写真ですか？」

そういつて、浜田は写真を秋刀魚星人に手渡す。しばらくそれを見ると、秋刀魚星人はこくりと頷く。

浜田「そうすると、秋刀魚星人さんでよろしいんですね？」

秋刀魚星人「ああ。だが、違う」

大島「何がだお」

秋刀魚星人「拙者は秋刀魚星人だが名前は秋刀魚星人じゃない。名前はサイラ・シーマ。誇り高き秋刀魚族の勇者だ」

誇り高き秋刀魚族の勇者。思わずその発言に同様というか笑いを隠し切れない三人。三人が三人とも微妙な笑い声を微かに漂わせる。

山崎「……で、いったい何が目的なんない。秋刀魚族の勇者さ

んが？」

だいたいわかってるお

大島

サイラは少し考えた風に頭をしかめる。そして、何かを決意したような表情でこちらを見た。

そのしっかりとした戦う意識に満ちたその目は、三人の心を振るわせた。

サイラ「実はな、宇宙刑法に違反した犯罪者を追っており途中なんじゃ」

山崎・大島「……は、犯罪者?!?!?」

サイラ「そうだ。これがその犯罪者達の顔なんだが…… すまん、

誰か拙者の懐から写真を取り出してくれ」

第二十五話 秋の味覚編 Part 5

懐から出てきた写真に驚く三人。というのも、その二つの写真に写っているのは、紛れも無く先ほどの宇宙人たちであった。

浜田「どういうこと？ いったいこれはどういうこと」

大島「あいつらが嘘をついてたってことかお？」

サイラ「もしや、貴殿らこの男たちを知っているのですか？」

簀巻きにされたサイラの視線をよける様に三人は顔をそらす。

山崎「どうする。もしかすると、俺たちとんでもないことに加担しちまったんじゃないか？」

浜田「宇宙人の言うことなんて信用するんじゃないかった」

大島「それを言ったら、こっちの言ってることも信用できないお。なにより奴の格好だお」

そういつてちらりとサイラのほうを向く三人。きよとんとした、まるで魚の死んだ目のような目で見つめ返されて、思わず三人は嘖出しそうになりきびすを返した。

秋刀魚が侍の格好して、それでいて体はマツチヨという、わけの分からないいでたちなのだ。それで、死んだような目でこちらを見つめ返されれば、嫌がおうにも嘖き出してしまう。

山崎「信用できねえ…… あんな、ギャグキャラ信用できねえw
ww」

浜田「駄目だよ笑っちゃ。あれが、彼の星では普通の格好なんだよ……」

大島「あのちゃんまげ……クオリティ高すぎるお」

山崎「魚のくせにどこを結び上げるんだつつの。なあ？」

大島「まったくだおwww」

もちろん尾である。

サイラ「あのくもし。よろしいでござるか？」

山崎「ええ、よろしいでござるよwww」

浜田「よろしいでござるwww」

大島「よろしいでござるおwww」

にっこりと笑って振り返る三人。特に大島はつぼにはまったのか、今にも笑顔で歪んでしまいそうな顔の皮を一生懸命伸ばしている。と、そんな顔を見て、残り二人の笑顔も少し歪み始める。

サイラ「地球人の貴殿らが拙者のような宇宙人を警戒するのは良く分かるでござるよ。しかし、このようなやり方は、双方気持ちの良いもではないと思うのでござるよ。ここはやはり、話し合いで解決するのが、最良だとはおもわぬか」

大島「お、おもうでござるwww」

サイラ「そうでござろう。しかしながら、拙者の立場を理解してもらわぬことには話しようがないでござるな。よし、では拙者がなぜこの地球に来たのかからお話いたそう」

大島「よろしくたのむでござる」

三人の思いもいざ知らず、いたって冷静なサイラ。目を細めてまるで諭すように語り始めるのだが、その姿は笑いを誘うものでしかない。ふと、大島が噴出した。

サイラ「はて、何か言いましたかな？」

大島「い、いえなんでもないですよ。続けてくれだお」

山崎・浜田（「あ、あぶねー」）

サイラ「それでは…… まず、拙者は……」

と、ここでピコリとサイラのちょんまげが動く。一瞬のため、思わず三人目を疑ったが、すぐにまた動く。右へ、左へ。上へ、下へ。小刻みにまるでサイラの話に相槌を打つように、ちょんまげのように結び上げた尾っぽが動くのだ。

山崎（だ、駄目だ。笑ってはいけない）

大島（笑ってはいけないお）

浜田（笑っちゃいけないんだけど）

山崎・浜田・大島（「（気になって、話に集中で気ねー）」お）

山崎（まるで、捨てられた子犬のようにフリフリと）

大島（それでいて活き造りのごとく荒々しく）

浜田（何故かわかんないけど、新鮮に輝いて……）

三人が三人、顔を隠すためアンドちょんまげから目をそらすために俯き気味になる。と、細目で見ていたのか、サイラがそんな彼らの姿に気づき目を開ける。怪訝そうな顔で、三人を見ると話の腰を折って黙り込む。

サイラ「…… 貴殿ら、ちゃんと聞いているでござるか？」

大島「も、もちろんだお……」

浜田「う、うん。聞いているよ聞いている」

サイラのほうを向くも、目は笑みを装い決して開かぬ二人。同じように一向に怪訝の表情を崩さないサイラ。一息つくくと、なんとも

やりづらそうにもう一度目をつぶるサイラ。話を再開する気になつたらしく、内心三人は胸をなでおろすような心地であった。

浜田（なんとか、誤魔化せたや……）

山崎（とはいえ、迂闊に見るとまた噴出しちまいそうだな……）

ちらりと、前を向く山崎。と、見ればサイラの首元辺りがなにやら蠢いている。よくよく見れば、それは魚特有の鰓である。

この魚、陸だというのに鰓呼吸している。そう思うと急におかしくなり、山崎は思わずむせ返ってしまった。

サイラ「!? ど、どうしたでござるか」

山崎「い、いや何でも」

口をパクパクさせて山崎を気遣うサイラ。その姿に、今度は大島が撃沈する。しかも、大爆笑で。

大島「うはつwwwwwwww!!」

サイラ「!? うお!!! ど、どうしたでござるか、いったいなんだというのでござるか!!」

大島「（声にならない声で大爆笑）」

大島の笑いで堰を切ったかのように笑い出す山崎と浜田。ごろごろと転げ周り、もう既に收拾がつかないほどの状況下に陥っている。むしろ、サイラが何かすればするほど、三人の笑いに拍車がかかるような状態だ。

幸い臆してしまったサイラは、動こうにも動けないため、被害は今のところ最小限に収まっている。が、自分が笑われているということに気づいてか気づいていないのか、徐々にだがその心的ストレ

その怒りをかおに表し始める。だが、それすらも大島や浜田たちを笑わせる要因でしかないということに、サイラは気づいていなかった。

.....

ひとしきり笑い終えた後、三人は改めてサイラを囲む。げっそりと疲れ果てた秋刀魚の宇宙人に、三人は少しひどいことをしたと思っただのか、哀れみの顔を浮かべている。

浜田「ご、ごめんなさいサイラさん。その、僕たち悪気があって笑ったわけじゃ」

サイラ「いいえ、どうせ私はエリマキ秋刀魚ですよ…… どうせ」

大島「悪かったお、このとおり謝るお」

そういつて土下座する大島。が、そっぽを向いて一向大島を見ようともしない。はあ、と山崎がため息をついた。

山崎「サイラさん悪かったって。俺たちも何も悪気があった訳じゃないんだ。許してくれよ、このとおりだ」

サイラ「人の身体的特徴をとやかく言うのはどうかと思うでござる」

山崎「仕方ないじゃん、身体的特徴とか言う前に、サイラさん地球人とは根本的に違う宇宙人なんだし。それに、サイラさんに似た地球上の生物を考えると、どうしてもおかしく思えてくるんだよ」

サイラ「詭弁でござるな」

ぷっくりと胸ビレを膨らませて怒るサイラ。思わずまた、噴出しそうになるも今度はぐっとこらえる三人。ここで怒らせてはこちら

にとって何の意味も無い。

山崎「大丈夫、今度はちゃんと聞くから。安心してくれ」

サイラ「本当か？」

浜田「本当、本当」

大島「ちゃんと最後まで話を聞きましょう」

腕を組み考え始めるサイラ。なんともむかつく奴らではあるが、今は一人でも協力者がほしいとでも言いたそうな表情である。

サイラ「…… わかったところがある。ただ、これで最後でござるか
らよく聞くでござるよ」

山崎・浜田・大島「」「うん」「」

サイラ「それではまず……」

と、ここでいきなり何故か突風が吹いた。その突風がサイラの尾びれを吹き飛ばす。

シユールに、風に踊らされる、尾びれ。というか、尾びれカツラ。

山崎・浜田・大島「」「お、尾びれカツラだ〜!!!」「お」

再び笑い始める三人。だが、既にサイラは怒髪店であった。

サイラ「おぬしら、ちったあ時間て言うものを大切にしたらどう
だ!!!」

そんなんでは、その写真の奴らに、地球の半分をきのこ農園にさ
せられてしまっぞ!!!」

山崎・浜田・大島の動きが止まった。

第二十六話 秋の味覚編 Part 6

山崎「き、きのご農園」

浜田「世界の半分が……」

サイラ「そうでござる、すでにこの山は奴らの手によって、あちらこちらにキノコの胞子がばら撒かれている！！キノコの山になるのも時間の問題でござる……！！」

一瞬の沈黙。すぐに三人口元を隠して、笑い出した。

大島「有名なCMのフレーズが頭に浮かんだお」

浜田「僕も……」

サイラ「笑っている場合じゃないでござるよ……！！」

いそいそと鬘の方に、体を揺らしてにじり寄りながらサイラは櫛を飛ばす。

と、思い当たる節があるのかここで山崎が口元に手をやった。

山崎「たしかに、カモフラージュにしてはキノコの量は異常だったよな……」

大島「まあ、それは確かにそうだよ……山が一面キノコばっかりって感じだったおカモフラージュするだけなら、もっと局所的にやれば済むことだよ」

浜田「けどキノコを増やしてどうするのさ？それこそ、意味が無いんじゃないの？」

山崎「それもそうだな」

大島「苦しい言い訳っぽいお……」

一生懸命自分の頭に鬘を載せることが出来ないか模索しているサイラ。山崎は近づくと、カツラを持ち上げサイラの頭にかぶせた。

浜田「逆に僕はキノコ好きだから、毎日キノコでも別に良いんだよね……」

大島「まあ、確かに。キノコはおいしいお。それにあいつマツタケを栽培している感じだったお」

浜田「あ、僕シメジ派」

大島「なに」。シメジ派がお、浜田。マツタケのほうが美味しいお」

なんだか話題が外れて口喧嘩をしだす二人。そんな二人を尻目に、一人サイラの元に居た山崎はだるそうに笑った。

山崎「まあ、よく考えればキノコなんてそこら中に生えてるし、対して危惧するもんでもないんじゃないの？」

サイラ「な！！ 貴殿らはキノコの怖さを知らん！！」

山崎「怖さって？ 毒キノコとかそういうのか？ まあ、確かに怖いっちゃ怖いが…… 気をつければ別に」

ふと、顔を真っ赤にし、鬼気迫る表情のサイラに山崎は気づく。それが、敵意によるものではないことは長年戦場を渡り歩いてきた山崎には良く分かった。これは、過去の過ちを苦とする戦士の目だ。山崎は、息こそ呑まなかったが、すっと目つきを細める。

山崎「ただのキノコってわけじゃないんだな？ いったい、何なんだあれは」

サイラ「初めてあれが拙者の星にやってきたときも、皆そういつたでござるよ。たかがキノコと……」

サイラは憤怒に顔をゆがめる。感慨深い物を感じ取ったのか、山崎は腕を組んだ。

と、不意に後ろから弾丸のごとく何か飛んでくる。すんでの所で山崎がかわずと、それが直撃した地面が大きく窪んだ。見ればめり込んでいるのは、件のキノコである。

???「そこから先は、我々が話さしてもらおう」

山崎「な!?! 誰だ!?!」

振り返る山崎、そこに現れたのは……

山崎「き、キノコ!?!」

大島「うわあ、任天堂の某キャラクターみたいなキノコがワラワラと出てきたお!?!」

浜田「ちなみに悪いほうのキノコね」

木の上に無数に陣取るキノコたち。見た感じマツタケが少し太くなったような風貌のそいつらは、クリクリの両目でこちらを睨みつけている。そして、こちらに先ほど飛んできたキノコと、その風貌は瓜二つ。いや、まったく同じだ。

???「我ら、父オトコダケ博士に作られた、改造特攻キノコ軍団。その名も、タケタケ団!?!」

山崎「タケタケ団!?!」

ズイズイと前に出る三匹のキノコ。頭には鉢巻、軸の部分にはガクランという、なんだか気合の入ったいでたちであるが、身長の小ささからギャグにしか思えない。とはいえ、流石にこの状況で笑いはしないが。

タケタケ団1「我ら作られたときよりその使命は一つ」

タケタケ団2「この星をわれらがキノコの故郷とする為」
タケタケ団3「玉碎覚悟のこの身を持って、敵に当たって花と散るのみ」

山崎「な、まさか。特攻部隊って……」

サイラ「そうでござる、奴らはその身を高速射出して体当たりをするキノコ部隊。オトコダケ博士とその助手クリンクリンが作った悪魔の生物兵器でござる。奴らは、個の保全をよりも種の保全を優先するよう人格形成をされてある。そして当たればあの威力だ。とても、普通の相手では太刀打ちできない……」

浜田「そ、そんな……自分の作った生命に、なんて残酷なことを……」

タケタケ団1「黙れ！！ 我らはほかならぬ誰の為でもなく自分たちの意思でやっている」

タケタケ団2「博士は父であり、また同志だ！！ お前たちの言うような、浅はかな存在ではない……」

大島「完全に洗脳されてるお。こいつは、手ごわいお……」

じりじりとサイラを中心にじり寄る三人。果たして前方のキノコがいつせいにこちらに向かって攻撃を仕掛けてきて、それを耐え切ることが出来るのか。

山崎「やばいんじゃないの？ もしかして」

浜田「もしかしても何も、やばいでしょ」

大島「どうするお二人とも。奴らから逃げるにしても、あの数だお。さらに山中に奴らが居ることを考えれば、とても無事に逃げられるかどうか。それに、言っていることがホントだった以上、この秋刀魚星人を放っておくのも何だお」

タケタケ団2「ふ、我らがそう易々とお前たちを逃がすと思うのか？」

ジリリと動いた大島の足元に、キノコが穿たれる。警告の意の現れか。

タケタケ団1「それ以上動けば、問答無用で殺す」

大島「動かなければどうなるお？」

タケタケ団2「しばし、待ってやろう。お前たちの神に祈る程度の時間はな」

山崎「キノコが言う言葉とは思えないな……」

大島「生憎、漏れには祈る神も居なければ、相手もないお」

タケタケ団1「ならば、すぐ死ね!!!」

一斉に飛び上がるキノコたち。紅く染まったジャングルが、鳥の群れが一斉に飛び立つようにざわめいた。

浜田「お、大島!!! どうするんだよ!!!」

山崎「落ち着け浜田、どっちにしろ攻撃されるのは目に見えてるんだ!!!」

浜田「でも、どうやってこの攻撃から逃げるって言うんですか!!!」

山崎「そ、それは……」

と、そんな風に慌てふためく山崎と浜田に、気がつけば無数のキノコが襲い掛かる。

浜田・山崎「う、うわっあああああ!!!」

貫かれる。そう二人が思った瞬間であった。

空間が一瞬裂け、飛んでくる無数のキノコを一口に飲み込んだ。

そう、まるで十字のような裂け目が空に一瞬にして現れたのだ。

そのあまりに不自然な出来事に、ぽかんと同じく口をあけて二人はその光景を見守るばかり。

空間が閉じたときになって、初めて瞬きをする、やっと思考が動き出したのか浜田はぺたりと膝をつき、山崎はしりもちをついた。

浜田「へ!？」

山崎「た、助かった？」

へたり込む二人に差し掛かる影。振り向けば其処に立っているのは、手に長刀を携えたサイラと余裕の表情の大島であった。

サイラ「間一髪でござった」

浜田「い、いったいどういうこと？」

いまだわけの分からない浜田は二人の顔を見回すと、大島に尋ねる。まるでさも当然のごとく表情一つ変えずに、大島はぼりぼりと頭をかいた。

大島「ん〜、あいつらを倒しに来たというからにはそれなりの策があるかと思つて、秋刀魚星人の縄を解いてみたお。そしたら、やつぱりちゃんとあいつらについての対応はしてあったらしくって、それで助かった見たいお」

山崎「いつたい、どうやって……」

サイラ「これでござるよ」

そういつて山崎の前に日本刀を差し出すサイラ。鞘には日本語で「空返し」と書かれている。

サイラ「この武器はいわゆる超古代の武器でしてな、空間を引き裂く能力があるでござる。これで、空間と空間の狭間の中に奴らを

誘導して、封じ込めたのでござるよ」

山崎「そ、そんな簡単に?」

サイラ「いや、もちろん普通に斬ったのでは回避される。奴らが視認できぬすばやさで居合いにて空間を切り申したゆえに、奴らも気づかず狭間へと誘導されたのだ。いや、中々骨が折れたでござる」

まったくもって意味の分からない二人を置いてけぼりに、サイラはパンパンと手を払う。そうして、山崎と浜田を引き上げた。

第二十七話 秋の味覚編 Part 7

サイラ「とにかく、これで拙者の言っていたことが正しいと証明されたわけでござるな」

山崎「え、ああ。まあな」

大島「助けてもらっておいて、いまさら信じないわけにはいかな
いお」

浜田「だよな」

そういつて辺りを見回す三人。どうやら、先ほどの攻撃は全軍突撃だったらしく、辺りにキノコの気配は無い。それで安心したのか、ほっと浜田はため息をついた。山崎も大島もそれは同じであろう。

大島「それにしても、恐ろしい奴らだったお」

サイラ「そうでござろう。たかがキノコ、されどキノコ。奴らは自分たちの種が残るためなら、何だってする。たとえ自分のみが滅びようとも、自分たちの敵になるものは徹底的に排除するのだ」

浜田「もしかして、ここ最近動物を見かけないのも」

サイラ「奴らの仕業だろう。おそらく、隣の山辺りに移動していると思うぞ」

ふと、浜田が山崎のほうを見て驚く。みれば、山崎は真っ赤に見えそうなくらいに怒気を体を使って現している。

山崎「俺たちを騙した上に、大切な蛋白源がいなくなった元凶だ
っただと!!!」

浜田「ちょ、大島!!! 山さんが!!!」

大島の方を向く浜田。だが、先ほどと同じように固まりつく。や

はり大島も蛋白源を遠ざけられた怒りに震えていた。

大島「キノコばっかり食べさせられて、正直辟易してたお!!
元凶は取り除くお!!」

浜田「そういえば、二人とも肉好きだもんね……」

山崎・大島「サイラさんよ!! とつと倒しにいこうぜキノ
コ野郎とクリ野郎を!!」お!!!!」

サイラ「と、とりあえず落ち着くでござるよ二人とも。せいでも
事は始まらんでござるからに……」

復讐に来た人より熱になってしまっではどうしようもないなと思
う浜田。

と、そのとき。林を動く影に気がつく。

浜田「だ、誰だ!!」

山崎「キノコ野郎か!!」

醤油「くくくく、そうじゃたわけどもめ!! そちらから出向か
ずとも、こちらから出向いてやったわ」

林から姿を現す醤油。そして、その隣には白衣に身を包んだ栗。
数で圧倒的に劣るというのに、いたって冷静な二人の表情に浜田は
嫌な予感を覚える。しかし、そんな浜田をよそに、残り三人は既に
怒り心頭といった様相。身構えて襲いかかるき満々である。

山崎「とんだ間抜けだなこのキノコ野郎!! ぶっ殺して今日の
夕飯にしてくれる!!」

大島「お前たちが追いやった鶏と一緒に鍋にしてやるお!!」

栗「ふん。もう少し動いてくれるかと思っただが、案外使えない奴
らだった。もう用は無い、殺してやるよ」

醤油「ん、どうやら懐かしい顔がいるじゃないか？」

醤油はサイラを見据えてくいと首をしゃくる。そのしぐさに、サイラが剣を携え身構えた。

サイラ「貴様等に滅ぼされた故郷の恨み。今日こそ晴らさん！
覚悟しろオトコダケ！！ クリンクリン！！！」

一人冷静な浜田は、栗の本名に思わず噴出しそうになるが、あたりの真剣ムードに押されて笑い出すにも笑い出せなかった。とはいえ、空気は一触即発すぐにでも戦いが始まりかねない。

これを回避しようとは浜田は思わないが、醤油側に何か考えがあるのは明らかだ。血気盛んに仲間を突っ込ませるのは得策ではないが、はたしてこの三人が、ただ止まれといって止まるかというのと、止まらないだろう。何か、止まるにいたる明確な理由と証拠が必要だ。

では、いったいやつらは何を仕組んでいるというのだろうか。先ほどのキノコの群れは辺りには見当たらない。戦闘力こそ皆無の彼等がこうも堂々と我々の前に何故立っているのか。

伏兵だ、これは。おそらく、先ほどの突撃キノコがそこら辺一帯に潜んでいるはずなのだ。そして、三人が襲い掛かるよりも早く、三人に襲い掛かる。彼等の創造主を守るために。

だとすれば、どこにいる。醤油たちの後ろか、それとも僕等の後ろなのか。空か、地下か。

そのとき、浜田は気づいた。

既にこの山全体に、キノコの胞子がばら撒かれていることに。

逃げ道など無い。

襲い来るは無限のキノコ。それが一斉に自分たちに襲い掛かってくるのだ。

浜田「駄目だ皆!!　これは罨だ!!」

浜田は叫ぶ、だが既に遅かった。三人は既に走り出し、今まさに醤油たちに飛び掛ろうとしていた。

醤油の口元がにやりとつりあがる。浜田は南無三と目をつぶった。

醤油「かかったなボケが!!　くらえ、アンリミテッド・キ……
ホブア!!」

醤油が言うよりも早く、山崎のパンチがその頬を襲った。時同じくして、大島の一撃が栗を襲う。二人を峰打ちで成敗するサイラ。目を開けた浜田が見たのは、そんな予想外の光景だった。

浜田「あ、あれ?　キノコは?」

山崎「オラオラ!!　余裕ぶつといて、何だこのざまは!!」

大島「泣いて謝るお!!」

サイラ「これは、父さんのぶん!!　これは母さんのぶん!!

これとこれは、死んだクリ　ンのぶんだ!!」

ぼこぼこにされていく醤油と栗。日が沈むまで、その一方的なり
ンチは続いた。

サイラ「ほら、早く来い!!」

顔が原形をとどめていない醤油と栗を、手錠でつないで宇宙船へ

と連行するサイラ。そんなサイラを見つめる三人。

醤油と栗を宇宙船の中に押入れると、サイラはこちらに戻ってきて手を差し出した。

ぐつと握手を交わす四人。随分と短い、本当に短い間であったが、同じ気持ちの下に戦った仲間には違いない（一人を除いて）。言葉は要らなかった。

最後にサイラは一枚の紙切れを胸から取り出す。そうして、また宇宙船に乗り込むと、手を振りハッチを閉める。

銀色の円盤は回転し、夜の闇へと消えていった。

山崎「いつちまったな…… あいつ」

大島「いい奴だったお、本当に……」

浜田「…… そうかな？」

山崎が小さい紙切れを見る。大島と浜田もその紙切れを覗き込んだ。

紙切れには、明朝体でこう書かれている。

宇宙警察 刑事

サイラ・シーマ

電話番号 8921 - 34 - 23 - 4

89

大島「なるほど、ギャンの仲間だったかお」

山崎「納得だな」

浜田「いや、違うでしょ絶対」

はははと笑う三人。ただ一人だけ、疲れた笑いではあったが。

山崎「それにしても、あいつ等の罪状って何なんだろうな。侵略罪とかなんだろうか？」

浜田「もしかすると遺伝子操作とかそういうのかもかもしれないね、あんな奇妙な生き物作るくらいなんだし」

大島「いや、きつと著作権法違反だお」

夜空を横切る流れ星一つを見上げ、男たちはいつまでも笑っていた。

- - - - -

五十嵐「もう、遅いよみんな。

それより今日のご飯だけど、みてよこれ。

キノコご飯に、キノコ汁。キノコのステーキに、キノコの煮物。

キノコの煮つ転がしに、キノコのつみれ団子！！

今日はいっぱい取れたから、キノコパーティーだよ！！

あと、料理し切れなかったキノコは天日干しにしておいたから、水で戻せば使えるからね

これで一年はキノコには苦労しないよー！！」

第二十八話 暑がり？寒がり？

何でこんなことをしているのだろう。

炎天下の真つ只中、轟々と燃える薪を前に、布団に包まった男が二人。女が一人。

浜田は、いったいぜんたい何故こんなことになったのか、そのことを必死に思い出そうとした。

そう、あれは確か、今日の朝食が終わってすぐの出来事だった。

五十嵐「なんか、いつきに暑さが戻ってきたよね」

浜田「そうだね。元々ジャングルだから仕方ないとはいえ、ちょっときついね」

大島「ちよつと浜田、少しずれるお。漏れに扇風機が当たらないお」

浜田「ああ、ごめん大島。ちよつと待ってね」

山崎「つたく、あいつら倒したらまた熱帯地域に戻りやがった。あつちーな」

山崎はTシャツをパタパタとはためかせ、服と体の間に空気を送り込む。あいもかわらず三人は扇風機の前でまとまって、声を揺らしている。まあ、年中熱帯のジャングルではこうなってしまうのも無理はないだろう。

件の宇宙人を倒してからというものの、山はもとの青々しさを取り戻し、いつの間にもやら気候も夏に逆戻り。いらなくなったかと思われた扇風機をもう一度取り出してかけ始めるのに、そうそう時間がかからなかった。なんせここは赤道直下にある地域だ、普通に考え

れば秋など来るはずも無ければ、気候が変わることはまず無いのだ。

山崎「ああくそ！！　なんかこう、もっと快適に過ごせねえもんな。どうにも四季が無いって言うのは、歯がゆいっていうかもどかしいっていうか。調子狂うんだよね。」

大島「激しく同意だお。」

浜田「僕の場合は、季節の変わり目に体調崩すからこっちのほうがいいんだけどな。」

五十嵐「あたしも。夜中に暑くて毛布脱ぎ出しちゃう派。」

浜田「あ、それ分かる。で、朝方冷え込んできて目を覚ますんだよね。」

五十嵐「そうそう。毛布って早く出しすぎると、寝るときは寒いから良いんだけど、そのうち暑すぎるようになるんだよね。」

浜田「かといって出さないと、今度は寒くて寝付けないしね。」

たかが毛布のことで嬉々として騒ぐ二人を、元気だなあという表情で見つめる山崎。同じく、話から完全に外されて、扇風機に向かっただだひたすら単調というか単音で話しかける大島。そんなことはいざ知らず、二人の会話はまだまだ続く。果てはストーブに、おこたに湯たんぼの話となり、ついにはホットカイロは服に貼るか貼らないかの話までに及んだ。

と、そこで大島がふとつぶやいた。

大島「ん？　もしかして、二人は寒がりかお？」

ホットカイロの会話を断ち切るように入ったその質問に、二人は顔をしかめる。

五十嵐「ん？どっちかって言うそうかな？」

浜田「確かに、僕もどっちかって言うそうと夏のほうが好きかも。」

浜田は対して気にも留めずに言ったただけだろう。しかし、どうやら、夏のほうが好きというのを気に食わない男が、一人いたらしい。そう、三人から離れて座っている山崎だ。

山崎「聞き捨てならねえな。夏のほうが良いだと？」

浜田「や、山さん？」

つかつかと浜田に歩み寄るとどっしりと座る山崎。突然の話への乱入に少し、浜田は気おされている。

山崎「いいか、夏なんかより冬のほうがよっぽど良いぞ。考えても見る。照りつける太陽、地面から立つ放射熱。揺らめく塵気楼に、ただただ続く砂漠。暑いことなんて何にもいいことなんてねえじゃねえか」

大島「山崎…… それは、何か夏のイメージとは違う気が」

山崎「この炎天下の中、敵の野営地目指して昼夜無く行軍する歩兵の気持ちがお前に分かるか？ 太陽に照らされ、闇に熱を奪われ、それでもなを前に進むしかない歩兵の気持ちが」

浜田「は、はあ……」

山崎「わかんねえだろうな、お前たちじゃ、きつと。あんな行軍に耐えられるはずが無い。というか、俺自身でもいまだにあの行軍から生きて帰れたことが信じられない。いや、それはまあいいとして。いいか。お前らが思うよりも、暑いってのは過酷で、残酷なものなんだよ。軽々しく、暑い夏のほうが良いとか言うんじゃないよ」

山崎の熱演にただただ呆然とする浜田と大島。が、五十嵐だけは腑に落ちないといった表情で、山崎を睨みつけている。

五十嵐「けどそれは、山ちゃんの主観の話じゃないの？」

山崎「いいや、これは絶対だな。寒いほうが絶対に良い」

五十嵐「そんなこと無いよ!! 暑いほうがきつと良いに決まってる!!!」

山崎「ほほう。それじゃへ〜ちよは、さっき言ったような暑さに耐えられるとでも言うのか?」

うーとうなる五十嵐。浜田もこればかりはと目を瞑った。耐える自信などあるわけが無いのだ。同じく大島も口を閉じる。

が、五十嵐だけはやはり引こうとはしなかった。

五十嵐「耐えられる!!!」

自信満々でそっぴい切る五十嵐。だが、それを待ってましたといわんばかりに、山崎は残酷に笑った。

山崎「よっしゃ。それじゃやってみようじゃねえか」

そう。そういう理由で五十嵐たちは、本当にそんな炎天下を体験しても夏が好きと言い切れると実証するために、このようなことをしているのだ。

ガンガンと木を焚き火へと入れる大島。付き合いと称して一緒に焚き火に当たっている浜田と山さん、そしてメインの五十嵐は既にゆで蛸と言っていていいほどに顔を真っ赤にしている。おまけに、意識も朦朧としているのか、五十嵐の動きは既におかしい。唯一まだまとまな山崎も、顔中に汗を染み出させて苦悶の表情にいつ変わってもおかしくなくらいに、顔を引きつらせている。

五十嵐「な、なっちゃん。だいひょうぶ!?!」

浜田「へ〜ちよこそ、大丈夫なの？ 顔真つ赤だよ？」

五十嵐「あたしはだいじょうぶらる〜 らって、暑いのだいすきだも〜ん」

山崎「その割りにはへばってるように見えるがな」

浜田「ですよね」

五十嵐「だ、大丈夫！！ あたしはまだやいへるほ！！」

浜田「るれつが回ってないよ、へ〜ちよ！！」

頭をぐわんぐわん回す、五十嵐。と、そんな五十嵐をからかうように、大島はどんと木をくべていく。

大島「燃えるお燃えるお！！ どんどん、燃えるお！！」

山崎「ノリノリだな大島…… いっそ怖いくらいだ」

大島「そうかお、それじゃ魔女笑いでもしてみるお。 イ〜ヒッヒッヒオ！！ イ〜ヒッヒッヒオ！！」

浜田「うわあ！！ 大島、炎を大きくしすぎだよ！！ もっと抑えて」

浜田の忠告も無視してさらに木をくべる大島。少しトランス入っているのか、山崎たちの声が届いているのかさえ非常に怪しい。むしろ聞こえていても確信犯的に、聞こえていないフリをしているとも十分に大島のことだから考えられる。

なににせよ、焚き木の周りは既に人が耐えられるような状態ではなかった。

と、ここで、ついに我慢の限界を振り切ったのか五十嵐が、布団から飛び出した。

五十嵐「も！！ もうう、むりはるー！！！！」

山崎「なんだ？ ギブアップかへ〜ちよ！！」

五十嵐「うにゅん！！ なっひゃんあひよははんはっへれ！！」

ほひはあー!!」

そういつて、焚き火から少しはなれた所にある木まで走ると、バタリと前倒れにうつ伏せる五十嵐。顔は真っ赤に湯であがり体中から汗が噴出している。

そんな五十嵐のだらしない姿に、山崎は勝ちを確信し大きな顔で笑い始める。五十嵐からしてみれば、言った手前この体たらく、山崎の笑い声を恥ずべきなのだが、それよりも暑さのほうに勝ったのか一向弁解する気配どころか、動く気配すら無い。

山崎「まったくあれだけやる気満々だったくせに、情けねーな」

浜田「大丈夫かな、へーちよ……」

山崎「人の心配より、自分の心配だろ？ お前は大丈夫なのかよ

浜田「

浜田「うーん。実のところ僕も、いつぱいいつぱいなんだよね…

…」

浜田の額を伝う汗。いつもの浜田の笑みにもどこと無く元気が無い。平静を装っていながらも、やはり浜田も結構効いているらしい。

大島「どうするお？ もうやめるお、浜田？」

山崎「あとはお前しただいぜ、浜田？」

五十嵐「うーん」

そういつて、五十嵐のほうを見る浜田。そうしてしばらく考えた後、すっと布団から出て立ち上がる。

浜田「ん〜。へーちよのこと心配だしね。ここでやめとくよ」

山崎「なんだよ、その余裕ぶり。納得いかねえな」

浜田「いやいや、僕も限界だつていつてたじゃん山さん。暑いほ

うが良いなんて、僕が間違ってたよ」

山崎「本当か？ 単に、へ〜ちよの事が心配なだけじゃないのか〜!!」

浜田「からかわないでよ山さん…… とにかくほら、大島、火の始末して？ 山さんも体くらい洗ってきなよ」

大島「わかったお」

山崎「そだな……」

山崎は立ち上がり布団を折って片付けると、まだまだ余裕といった表情で川のほうへと歩いていく。大島はあらかじめバケツに用意していた水を薪に浴びせ、消化をしはじめた。

一方の浜田は、タオルと消火用の水を一桶だけ持って五十嵐の下へ。ぎゅつと水を含んだタオルを絞ると、五十嵐の頭に載せてあげる。

五十嵐「なっひゃん。ありがほ〜」

浜田「もう、無茶しちゃ駄目だよへ〜ちよ。女の子なんだから」

五十嵐「ご、ごへ〜ん……」

浜田「ほら、仰向けに寝たほうが楽だよ……」

そういつて五十嵐の体を回転させて、浜田が固まる。

というのも、汗で服がスケスケになり五十嵐のボディラインがくつきりと浮き出してしまっていたからだ。健全青年である浜田はごくりと唾を飲んでしまう。

胸こそツルツルのペタンペタンであるが、その引き締まったくびれに、整ったおへそ。そして、少しばかり上ずった息遣いと、うつすら紅がかった肌の色。そんな姿を見せられて平静でいられる男のほうがどうかしている。ある種男の性なのだ。そして、それでもそれに抗おうというのも青年・青少年の性である。

浜田「ほ、ほらへ〜ちよ。楽になったでしょ……」
五十嵐「ふへ？ ほ、ほんほら〜…… さふがなっひゃんはね、なんへもひっへる」

見ないように見ないようにと、五十嵐から視線をそらす浜田。冷静になるうと大島のほうを見て、関係ないことを考え始めたりします。

浜田（落ち着け、落ち着くんだ僕。そう、こういうときこそ、何か無いか…… 九九とか。うん、九九とかやるう、一の段から九の段まで順に言っていけば落ち着くはずだ。そう、まずは深呼吸だ深呼吸……）

浜田「スー、ハー。スー、ハー」

大島（何やってるお浜田は？）

いぶかしげな表情で浜田を見る大島。火は既に消し終わったが、灰やら燃え残った木々やらの片づけがまだ残っているので忙しいのか、しばらく見つめた後すぐ作業に戻った。

と、大島が作業を終えるときにも深呼吸を終える浜田。

浜田「よし、行くぞ、いんいちがいち、いんにがに、いんさんがさん……」

五十嵐「うう！……！」

びっくりと浜田飛び上がった、今度は違う意味でびっくりしたのだ。というのも五十嵐が浜田の背中に、ぺったりと張り付いているのだ。胸^{うぶ}ごと。

それはもちろん、整った心臓の鼓動もとたんに暴走し始めても無

理は無い。

五十嵐「なっちゃんの体つめたーい。きもちいー……」

浜田「ちよっと、へーちよー！！ や、やめてよ、そのちよっと！
！ いろいろ…… 当たってるよ、その……」

夢と希望でたわには実ってはいないが、むずかゆいような先端
が当たる感覚が、さっきから背中に感じ取られて……

ものすごい勢いで浜田の緊張と欲望のバロメータが上がっていく。

五十嵐「ふえ？ 何が？」

浜田「な、なんでもない！！ とにかくやめてよ！！」

がばりと、五十嵐を振り払おうとする浜田。もうバロメータは振
り切れる寸前である。はあはあと、息を荒げて五十嵐を無理やりに
引き離す。

五十嵐「うー、痛いよなっちゃん…… せっかく気持ちよかった
のに……」

浜田「僕だって暑いのー！！」

心にも無いことを言っでごまかす浜田。幾分そっけなく、そして
突き放すように五十嵐に言ってみせる。

と、とたんにむくれっ面になる、五十嵐。

五十嵐「あゝもー！！！！ 暑いー！！！！」

バツという何かのはぜる音。

幾つかのボタンが宙を舞った。

そして、いくらかの赤い液体も同時に宙を舞った。

- - - - -

山崎「おう、どうした浜田。お前も、汗流しに着たのか？」

顔に手を当て白シャツ一枚で向かってくる浜田に、山崎は声をかける。

声をかけられた浜田は、山崎の前で歩みを止め、空いているほうの手を前に開いた状態で突き出した。

浜田「前言撤回」

それだけ言うと、鼻血をたらしながら川へと歩き出す浜田。

山崎「な、何だ？」

ポカンとした表情の山崎だけが其処には残された。

山崎「お子ちゃまだな。まったく。そういうの含めて、楽しいんじゃないかよ」

大島「五月蠅いお、おっぱい星人。な、浜田お？」

浜田「なんで僕に話を振るのさ!？」

じつと浜田の本を見る大島。嫌な予感に浜田の肌にさぶいぼが立つ。すると、あとと言わぬ間に山崎が、浜田の持っていた本を取り上げた。

山崎「何々？ 激撮スレンダー天国く南国水着編く？ はあ、お前も結構変わった趣味してるな」

浜田「ほ、ほつといてよ山さん!!」

山崎「何？ お前胸が小さいのが好みなの？」

浜田「そ、そんなこと……」

じとめで浜田を見つめる二人。気おされて、とても嘘をつけないと思ったのか、浜田はうなだれた。

浜田「あります（泣）」

大島「いいおな、別にそんなこと。人の性癖にいちいち難癖なんてつけて欲しくないお」

山崎「いやまあそうだがよ。けど、大島は……」

大島「五月蠅いお!!」（怒）」

山崎「いや、俺はお前のことを心配してだな……」

と、そういいかけたところで山崎にガンを飛ばす大島。そろそろ本気で怒りそうなので、それ以上言うまいと山崎は言葉をとめる。そして気晴らしにと浜田から奪った雑誌に目を通す。

山崎「うわー。見事にぺったんこなのはっかだな。俺にしてみり

や、目の毒だ」

大島「どれどれ…… そうでもないお、AからBくらい。嘗ての日本人の平均くらいだお」

山崎「しかしまあ、なんでまたこういうのが好きなんだ浜田」

浜田「な、何でって…… それは、その……」

大島「もしかしてロリコンかお？」

浜田「違うよ！！ だいたい、好きなものは好きで良いじゃないですか。山さんや大島だって、それが好きなことに理由があるの？」

山崎「俺はやわらかくて癒されるから好きだぜ」

大島「日常生活じゃありえない展開とかが好きだお」

浜田「う……」

一言も詰まることなく言いかけた山崎と大島。うるたえる浜田に、にやりと微笑み二人はにじり寄る。

大島「さあ、何で好きなのかお？」

山崎「へ〜ちょには言わないからさ、言ってみるよ浜田？」

浜田「ちょ、二人とも落ち着いてよ！！！！」

大島「いたって平静だお」

山崎「同じく」

ワキワキと手を鳴らして歩み寄る、その動きに更なる危機感を覚える浜田。覚悟を決めて口を開いた。

浜田「べ、別に…… その、あんまり大きいのが好きじゃないし。

それに、華奢なほうが女の子って感じだし……」

大島「見るを、ここだけ紙が擦れてるお！！ よくここら辺を使ってるお……」

山崎「何！？ どこだどこだ！？ 何々々 紺色の甘い誘惑 ス

クール水着……」

大島「やっぱりロリコンだお!!」

浜田「き、聞いてよ!!! 二人とも!!!」

浜田の必死の表情に大爆笑する二人。当然怒る浜田をなだめて、話を元に戻す。

山崎「なるほど、お前の好きな女性のタイプというわけか……
女の子の子している娘が好きってことな」

浜田「う…… うん。だって、可愛いじゃない…… あ、元気な娘も好きだけど……」

大島「へへちよ見たいにかお?」

ぼつと浜田の顔が赤くなる。それを見て、またケラケラと笑い出す、二人。今度は何も言う気になれなかったのか、浜田は恥ずかしそうにツカツカと一人先に歩いていった。そんな様子にまたケラケラと笑う山崎と大島。

山崎「まったく、反応がかわいいね、あいつは」

大島「まったくだお。からかい甲斐があるってものだお。で、どうおもうお。あの二人? 上手く良くと思うかお?」

山崎「いくだろ多分。二人とも、多かれ少なかれ意識してることだし。ただ、こいつを見つかつちまうとなんていわれるかは知らないがな……」

大島「へへちよの事だから、大激怒間違いないお」

五十嵐「誰が大激怒なの?」

懐中電灯を持ったへちよがいきなり現れる。びっくりして、飛びのいた山崎と大島。と、ここで本を落としてしまう。

大島「へ、へ〜ちよ!! 何故ここにいるお!？」
五十嵐「起きたら皆いなくて、心配になって探してたんだよ。それより、何か落としたよ?」

そういつて、山崎が落とした本を見て、五十嵐が硬直する。
ヤバイ、そう思つて瞬時に二人も硬直した。

五十嵐「山ちゃん? 島ちゃん? これはいったい何かな……」

山崎「えーとその。しゃ、写真集?」

大島「そ、そうだお。しゃしゃ写真集だお、ちよつと過激なだけの……」

そう言いかけた所で、二人の顔が恐怖に引きつる。彼らの視線の先には、へーちよが鬼のような形相で笑っていたのだ。

五十嵐「言い訳するなんて、みつともないよ!!!!」

山崎・大島「「ご、御免なさい!!!」お!!!」

五十嵐「まったく!! 男の子つてば不潔なんだから!!」

しゅんとした表情で燃やされる雑誌を見つめる三人。相当のお気に入らしく、山崎・大島は涙をこぼしていた。唯一、浜田だけは、笑っているように装っていたが。それは、五十嵐がそばにいる為であつて、本心はそれはもうなきたくて仕方がなかった。

五十嵐「なっちゃんからも言つて上げてよ!! エツチなのは駄

目だって!!」

浜田「いや〜その……」

涙混じりに睨みつける二人を前にしては流石に声も出ない浜田。

浜田「そのね…… 男の子にはこういうのも必要だから……」

五十嵐「駄目なの!! エッチなのは地球の敵なの!!」

浜田「はぁ……」

五十嵐「分かった？ なっちゃん？」

浜田「分かりました……」

五十嵐「山ちゃんも島ちゃんも分かった？」

山崎・大島「分かりました」お（泣）

メラメラと燃えていく雑誌。

揺らめく炎を見つめながら、男たちは言い知れぬ虚脱感を感じていた。

五十嵐「もし、なっちゃんもあんな事したら、ただじゃおかないんだからね!!」

浜田「う、うん。わかったよへ〜ちよ」

浜田（よかった〜 ばれなくて……）

第三十話 COOLorSWEEET

五十嵐「聞いてください、高部大佐!!!」

カメラを取り付けたノートパソコンの画面を前に頬をぷくりと膨らませた五十嵐は、画面に映し出された高部に向かって話しかける。いきなり話しかけられて困惑している。というよりも、あちらの画面に突然五十嵐の顔が表示されたので、困惑したのだろう。高部は目を見開いて一瞬身を引いた。

高部「ど、どうした五十嵐兵長。何をそんなにむくれているのだ」
五十嵐「どうもこうもないです!!! 男の子ってどうしてあんなんだろ!!!」

高部「??」
五十嵐「あんなモノをこっそり隠し持って!!! 本当にいやらしいんだから!!! ねえ、高部大佐!!! 許せませんよね?」

高部「その、五十嵐兵長? 順を追って話してくれないと、私としても何も言えんのだが」

五十嵐「え、ああ。それもそうですね……」

興奮してただただ喋るだけだった五十嵐が、何とか落ち着きだす。画面の向こうの、高部もほっと息をついた。

高部「で、何があったんだね?」

五十嵐「実は昨日の夜起きたらですね、私の隊の男の子たちが突然居なくなっていたんですよ」

高部「ふむ。突然居なくなる」

五十嵐「最初は私、もしかしたらトイレにでも行ったのかなーと思っただけですけど。あんまりにも帰ってくるのが遅いので、探し

に行くことにしたんです。隊長として、部下たちの身に何かあったらまずいですし」

高部「それで？ エイリアンの襲来か何かか？ それとも、何か事故にあつてたのか？」

五十嵐「違うんですよそれが…… 何してたと思います？」

高部「…… 分からんな。何をしていたんだ!!」

五十嵐「それが…… エッチな本を読んだんです」

頬を赤らめて、ぼそりと五十嵐が小声で言う。高部は、最初キョトンとしていたが、しばらくして堰を切ったように笑い出した。

五十嵐「な、何がおかしいんですか大佐!!」

先ほどよりもいつそう頬を赤く染め上げ、なおかつ大きく膨らませる五十嵐。くくくと、笑いを締めると、高部は落ち着き払った様子で、目をつぶる。

高部「五十嵐兵長。元来、男とはそういうものだ。かく言う私の父上も、そういう男であつた。あれは性なのだよ」

五十嵐「性？ ですか？」

高部「綺麗な女子が居れば、振り向きたくなる。私たちだって、かつこいい男が居れば振り返るだろう？」

五十嵐「それは、そうかもしれないけど……」

高部「だつたら、とやかく言うことはあるまい。それにたまには男たちにも息抜きをさせてやらんと、息が詰まるぞ。体調面の管理も重要だが、精神面の管理も上官としては大切な仕事の一つじゃないのか？」

五十嵐「むうゝ それはそうかもしれませんが……」

高部「それとも？ 部下に意中の者でも居るのか？」

意地悪に微笑む高部。その細く艶やかな赤に挟まれた口のラインが、ほのかにつり上がる。

五十嵐「え……」

目をぱちくりとさせた後、キョトンと固まる五十嵐。一方半ば冗談のつもりで言ったはずが、凶星なのかと驚きに転じてしまい同じく固まる高部。

そして、突然鳴り出すヤカンのように、一瞬にして顔を真っ赤にした五十嵐の顔から湯気が立ち込める。

五十嵐「ええええええ！！！！　そ、そ、そんな、わけわけわけ！！！！」

あたふたと体を左右に振り恥ずかしさに身悶える五十嵐。そんな五十嵐を見かねて、高部の顔が蒼白になる。

高部「お、落ち着きたまえ、五十嵐君！！」

五十嵐「すす、すすすす、すぎ、好きだなんて！！！！　そそそそ、そんな、そそそんなこと……！！！！」

その激しい動きにちゃぶ台が揺れる。さぞ、高部のほうに流れている映像は悲惨な事になっているだろう。

五十嵐「たたた、た、確かに……　なっちゃんのこと、ちょっと……　ほんのちょっとだけ、良いかな……って思ってるけど。思ってるけど……」

高部「い？　五十嵐君？」

五十嵐「けどけど、なっちゃんは元からああゆう優しい人だから……　別にあたしだけに特別優しいわけじゃないし……　第一、あ

たしみたいなドンくさくて、スタイル悪い女の子、好きなわけ……」

スタイルに関しては実のところ無問題

高部「五十嵐！！ 落ち着け！！」

五十嵐「え！！ あ、はい」

高部の威圧感ある怒声にやっとわれを取り戻す五十嵐。やれやれといった表情で、五十嵐のパソコンにはあきれ果てている高部の表情が映っている。

高部「まったく、上官の前で取り乱すなんてみっとも無いぞ。軍人なら恥を知りたまえ、恥を」

五十嵐「す、すみません……」

高部「どうやら、意中の男が居るらしいな」

五十嵐「は、はい……」

高部「名はなんと云う？」

高部の顔が少し怖くなる。まっとうな軍人ならば、その少しの表情に恐怖し、言葉を発せられなくなるであろう。だが、まっとうな軍人らしからぬ五十嵐からしてみれば、そんな事は取るに足らない。むしろ、たずねられた事のほうがよくほど重要であった。

五十嵐「そ、その……」

高部「……」

五十嵐「なっちゃん…… じゃなかった、浜田夏雄二等兵です……」

と、ここで、高部の眉間から本当にうっすらとかかっていた筋が一本消える。随分と穏やかな顔に変わった後、まるで仏のような顔で五十嵐に向かい微笑みかけた。さっきの表情とはまさに雲泥の差

である。

高部「そうか。なら良い……」

五十嵐「??? 何がですか?」

高部「五十嵐兵長には関係の無い話だ。それより、その男に告白はしたのか? うかうかしていると、誰かにとられてしまっぞ」

五十嵐「え!!! そ、そんなあゝ!!!」

高部「馬鹿者、冗談だ。冗談。このジャングルにおぬし以外の女子などおらぬであろうに。しかし、何時までも悩んでいては何も進まぬぞ。後になって後悔しても遅いのだ……」

高部（私の様にな……）

五十嵐「そ、それもそうですよねゝ よ、よろしー!!」

ぐっと立ち上がり握りこぶしを作る五十嵐。

高部「告白する気になったか?」

五十嵐「…… やっぱり、無理……」

勇ましい姿は五秒と持たず、五十嵐はちゃぶ台に突っ伏した。そんな姿をカメラ越しに見て、高部もまたカメラ越しに微笑みかけた。

高部「…… まあ、あせらずやる事も大事だ」

五十嵐「そ、そうですよね…… あ、ありがとうございます、高部大佐!!! おかげで少し気が晴れました」

高部「うむ。まあ、私も意外と暇をしている人間だ、これに懲りずまた何かあればかけてくれば良いだろう。五十嵐兵長の話は中々面白かったぞ」

五十嵐「は、はい。ありがとうございます…… 高部……」

高部「由紀子でよい」

五十嵐「え！？ それだと、階級が……」

高部「上官に愚痴の電話をかけてくる者が何を言うか。上官が許すのだ、素直に従え」

五十嵐「わ、わかりました…… それじゃあ、ありがとうございます
ユキちゃん」

高部「む、流石にそれは…… 少しむず痒いな……」

五十嵐「えへへ。それじゃあ、私のことも下の名前、奈由って呼んでくださいね？」

高部「わかった、奈由」

五十嵐「えへへ……」

高部「ふふふ……」

にこにこ楽しそうに笑いあう二人の顔が、ノートパソコンの液晶画面に重なって映えていた。

.....

浜田「へくしゅん！！ ぶえつくつしゅん！！」

大島「うお。浜田汚いお！！」

山崎「どうした、風邪でも引いたか？」

.....

五十嵐の日記

10月 日

今日、初めてお友達ができました。名前は、高部由紀子ちゃん。

私より階級上の人だけど、とってもかっこよくってとっても優しい。
いいお友達になれそう。

高部の日記

10月 日

奈由と友達になった 嬉しい
ユキちゃんと呼ばれた 凄く嬉しい

大島は安全 安心

…*… () …*…

と、ここまで書いたところで高部の筆が止まる。

高部(そういえば、男子は全員居なくなったといっていたな……)

高部(大島も!!!???)

五十嵐「むにゅむにゅ…… もひもひ、誰でふかこんな夜中に」

高部「私だ、奈由!!」

五十嵐「へ? ああ、ユキちゃん。どうしたの?」

高部「大島は? 大島は、その…… そのような雑誌を讀んでいたのか?」

五十嵐「え、あ、うん…… よ、讀んでたよ」

高部「な、なにい!!!! あ、あの男…… 許せん!!!!」

五十嵐「えっ!? え? ユキちゃん、どうしたの!?」

高部「奈由!! 私が許す、大島を血祭りに上げる!! そんな地球の敵のような奴、八つ裂きにしてしまえ!!!!」

五十嵐「え、けど!! それは男の性なんじゃ……」

高部「駄目だ!! エツチなのは地球の敵だ!!」

五十嵐「ユキちゃん!? 昼間と言ってることが無茶苦茶だよ!」

第三十一話 クロネコだったり、ペリカンだったり、飛脚だったり

五十嵐「うわー ついに届いた」

山崎「パラシュートで投下とは、やるな……」

浜田「ちゃんと四つ小包があるよ」

大島「それにしても、流石民間だけあって、宇宙人に容赦が無い
お……」

今や世界の航空事情おも掌握してしまつた宅急便業界に、彼らがこれほど感謝した日は無かつただろう。会社のロゴマークがペイントされている戦闘機は、そのまま飛行系宇宙人の群れを撃墜しながら本国へと帰つていった。その後姿に手を振る三人。

この日、三人に届いたのは、先日の救出作戦での褒章品である。それは約、一週間ほど前に高部を通して、軍の上層部に提出したものだ。おそらく、複雑な処理を隔てた為だろうか、はたまた戦時下だからか。随分と届くのにか時間がかった。

大島「それじゃ、早速開けてみるお」

大島の場合

大島の小ぶりの包みを音を立てた破る山崎。なにやら本らしいものが出てきたので、表紙のほうをしてみる。

山崎「え、何々？ Java2 (Exam Cram) ? なんだこれ、洋書じゃねえか。こんなもの読むのかお前？」

大島「そうだよ、Javaの参考書だよ。そろそろ本格的にJa

v aを勉強しようと思って、買ってみたお」

やたら難しそうな参考書。しげしげと手に取り見つめる山崎からそれを奪い取ると、大島はちゃぶ台の前に座りPCをつける。場所が場所ならなんと絵になる光景である。五十嵐も浜田も、そのいつもとは違う真面目ぶりに、おおと感嘆の声をあげる。

五十嵐「島ちゃん凄いな。そんな難しい本読めちゃうんだ」

大島「別にこんなの普通だよ」

山崎「いや、お前の事だから、漫画とかそういうのを頼んだもんだとばかり思ってた」

浜田「僕も僕も」

五十嵐「あたしも」

大島「お前ら、人を馬鹿にしてるのかお？」

仮にも、士官学校での男にそれは無いだろう。

青筋を立てて起こる大島。まったく、偏見というのはされた本人からしてみれば、不快以外の何物でもない。

だが、言った本人たちは対して悪気が無いというのも、嫌味を言っても取り合わないのも事実である。

全然悪びれた様子も無い五十嵐や山崎に、大島は大きいため息をついた。

五十嵐「けど、どうしよ。あたし、島ちゃんがどうせそういうの頼むだろうからって思って、おもいつきり嗜好品頼んじゃった」

山崎「俺も思いつきり嗜好品を頼んじゃったな……」

浜田「それなら僕も娯楽品だよ」

五十嵐「あれ？ じゃあ、何も気にする事ないんじゃない……」

な〜んだ」

五十嵐・山崎・浜田「「「あははははははは」」」

大島「こいつら、戦時中だって事を分かってるのかお」

呆れた顔で三人を見つめる大島。

しかしながら、彼の内情はそんな顔とは裏腹に、落胆に満ちていた。

大島（しまったお。こんな事なら、漫画を頼んでおくべきだったお……）

五十嵐の場合

.....

五十嵐「じゃーん。あたしは、美味すぎる棒30本セット×20だよ」

一番大きい包みを開けると、たしかにそこには美味すぎる棒の袋詰めが20個入っている。

浜田「凄いな、美味すぎる棒を600個。1個10円だからって、買いすぎじゃない？ん、これもしかして……」

五十嵐「そうだよ、なっちゃん！！なんと、全種類集めちゃいました！！」

浜田「うわ〜。凄いな……あ、これはじめて見る。何々、「マグロステーキ味」？ 凄い味もあるんだな」

山崎「よくやるな、まったく」

五十嵐「えへへ、一度やってみたかったの。こういつときでないと、中々全種類って集められないからね」

箱の中から取り出され、ずらりと並ぶ美味すぎる棒の詰め合わせ袋。

その異様な光景に、プログラミング中だった大島も思わずやってきた。

大島「へへ。すごいお、へへちよ。良くこんな事思いついたお……
流石へへちよだお」

五十嵐「いやいや、そんな事ないよ」

大島（あんな命がけの作戦の代価に、こんな馬鹿なこと普通思いつかないお）

浜田「僕は美味すぎる棒は、サラダ味とめんたいこ味がすきなんだよね」

山崎「俺も子供の頃よく食べたな。チーズとポタージユ。後はチヨコを良く食べてたな」

大島「漏れも、チーズは好きだお。あと、納豆も」

浜田「ああ、あれね…… 凄いよね、本当に納豆みたいな味がするんだもん（汗）」

山崎「何？ そんなのあるのか」

大島「あるお。他にもおにぎり梅干味とか色々あるお。今は売ってないけど」

浜田「おにぎり梅干味は食べてみたいな」

じゅるりとよだれをすする大島。そういえば、ここ最近こういった類のジャンクフードを食べていなかった事に三人は気づく。すると、たとえ元が10円のものでも、凄くおいしそうなものに見えて

くるから不思議だ。

山崎・浜田・大島「っ、ねえ、へちよ。少し分けて？」「お？」
五十嵐「だ、駄目だよ！！これは、あたしが一人で全部食べるの！！！」誰にも分けてあげないんだから」

そういつて、美味すぎる棒の前に立ちはだかる五十嵐。目は本気だ。

山崎（まあ、へちよの事だし）

大島（そのうちきつと根をあげるお）

五十嵐「絶対、ぜったい。あげないんだからね」

浜田「いじちゃん、へちよ。少しくらい」

五十嵐「なつちゃんでも、駄目なものは駄目なのー！！」

浜田の場合

浜田「僕のはこれ。どんな所でも壊れない、どんなに振り回しても狂わない、超頑丈で有名な、T (Time) Shock!!」

一番小ぶりの小包から、時計を取り出す浜田。だが、そんな浜田のテンションとは裏腹にシーンと静まり返る、三人。
そんな三人の反応に、浜田は思わずキョトンとする。

浜田「み、みんな、どうしたの？」

山崎「いや、フツーだなと思って」

大島「フツーすぎてつままないお」

五十嵐「ごめんね、なっちゃん。あたしも、フツーだなんて思っ
ちやった……」

五十嵐・山崎・大島「、「総じて、地味!」「だお!」

浜田「え、えええええ!?!?!??」

浜田「じ、地味…… 僕って地味なのか……」

いじいじと体育座りで落ち込む浜田。見かねた五十嵐が、すぐさま駆け寄る。

五十嵐「な、なっちゃん!! 気にしちゃ駄目だよ。それに、地味なのは個性であって、別に悪い事じゃないよ!」

浜田「慰めなんていらないよへ〜ちよ……」

五十嵐「いじけないでよ、なっちゃん。もう!! 山ちゃんも、島ちゃんも何とか言って上げてよ!」

流石に言った手前良心が痛んだのか、山崎や大島も浜田の元に近づく。

山崎「そ、そう落ち込むな浜田。へ〜ちよの言うとおり、地味なのは悪い事じゃないぞ」

大島「そうだお。逆にプラスに考えるお。地味で良かったって」

山崎「うんうん。きつと、地味でよかったーって事がこの先あるって」

浜田「…… たとえば、地味だとどんな良い事があるのさ」

シンと辺りが静まり返る。四人とも、ピクリともせず、沈黙の時間が過ぎた。

浜田「ほら、やっぱり!! どうせ、地味なんて、何のメリットも無いんだ〜!!!!」

大島「は、浜田、落ち着くお。まずは落ち着くお!!」

五十嵐「そうだよ、なっちゃん。落ち着いて!! 山ちゃんも、早く何か地味で良いこと考えて!!」

山崎「え、俺に振るの!? ちよ、まって…… そ、そうだ!!」

山崎がびしりと浜田を指差す。と、取り乱していた浜田の動きが止まる。

山崎「バレンタインデーの日に、チョコが1個ももらえなくても、気にされない!!」

五十嵐・大島、そして浜田の周りの空気が一瞬にして固まった。

山崎の場合

山崎「さて、打ちひしがれている浜田は放っておいて」
五十嵐「む、無責任だよ山ちゃん!!」

皆から離れたところでいじいじとしている浜田。それを言ったとおり放っておいて、山崎は自分の荷物を開ける。

山崎「最後の俺は、これだ！！ 日本銘酒5本！！」

そういつて山崎は箱の中から、一升瓶を豪快な音を立てて抜き出した。何故こんな、割れ物危険な物品をパラシュートで投下したのかは疑問が残るが、その割には一升瓶は綺麗だった。

大島「お。山崎らしいといえば、山崎らしいお」

五十嵐「山ちゃんって、お酒好きそうな感じだもんね。それにしても、高そうな名前のばっかだね」

山崎「まあな。一本、五千円とかそれくらいだぞ。前回のミッシヨンで一番体張ったからな、これくらいはしてもらわなくちゃ割りにあわねえさ」

大島「それにしても、変な名前のお酒ばかりだお」

五十嵐「これは、森…… 外?? この真ん中の字ってなんて読むの」

大島「これは、おうって読むお。って！！ これ、人の名前だお！！ 森鷗外だお！！」

山崎「いやー。名前のインパクトに負けて、買っちゃった。確か7000円位だったかな、これ」

大島「た、高すぎるお！！ 肖像権もへったくれもないお。うお！！ こ、こっちは「我輩は猫である」って書いてあるお！！！！」

山崎「焼酎って、たまに変な名前のお酒があったりするよな」

五十嵐「ねえねえ、我輩は猫であるっていったい何なの」

浜田「有名な小説だよ、中学校の教科書とかで見なかった？」

五十嵐「あたし、知らない……」

へらへらと笑いながら、箱の中を漁る山崎。次々と変な名前の酒が、箱の中からは取り出される。

浜田「中納言」、「天下布武」、「ポーツマス条約」……」

大島「全部変な名前のばかりだお。ギャ、ギャンプラーだお……」

山崎「普通の酒はほとんど飲んじまったからな、こういう変わった酒でも飲まねえと!!」

ケラケラケラと山崎はあっけにとられて目を丸くしている浜田・大島を笑った。

高部の場合

高部「つ、ついに届いたか……」

高部は届いた小包を抱え辺りを、見回す。誰も居ないので、確認するとチラッと箱の中身を覗こうとする。無論、テープで目張りされているため、中は見えるはずはない。

仕方が無いので、そのまま自分に与えられたテントへと駆けていく。

高部「ふふふ、待って居ろよ大島……」

ニヤニヤと楽しそうに笑う高部に、すれ違った兵士たちは只ならぬ恐怖を感じて、みな硬直するように敬礼を続けた。

第三十二話 渚に現るプリン(セ)ス 前編

山崎「いくぞ〜!!」

五十嵐「いいよ〜!! さー!! ばん回するよ、なっちゃん!!」

浜田「ど、どんとこーい……」

ジャングルから少し抜けたところに、海岸。人が住まなくなつて久しいためか、澄んだ色をした海を背に、五十嵐一行は少し遅めのバカンスに勤しんでいた。故に、全員水着だ。とはいえ、海パンの男が3人に、子供のようなピラピラの付いた水着を着た女一人では、色気があるとはいえないが。

山崎「そ〜れ!!」

山崎がボールを打つ。それは、大きな放物線を描き、砂に描いたラインすれすれの所に落下する。

と、ここに持ち前の運動神経で、五十嵐が飛びついた。うまくレシーブすると、それを浜田に回す。回された浜田は、五十嵐がすぐには起き上がれないと判断したのか、軽く上に上げて相手コートに返す。が、それをめがけてものすごい勢いで、山崎が突っ込んでくる。弓引くように体をしなせると、その右手をバレーボールに当てるべく狙いを定めた。

山崎の体が一瞬にしてしなる。

強烈なスパイクが、五十嵐・浜田のコートに打ち付けられた。

山崎「よし、これでゲームセット!!」

ガッツポーズで喜ぶ山崎。それを横でボーッと見つめる大島。

一方の五十嵐といえば悔しそうに土で汚れた水着とTシャツを
払っている。

五十嵐「うう。くやしー……」

浜田「やっぱリスポートやらせると強いな、山さん」

五十嵐「酷いよー こっちは女の子なんだから、ハンデくらいつ
けてよー!」

よほど負けたのが悔しいのか、むくれっ面で山崎に抗議する五十
嵐。

山崎「ハンデって言うか……」

そういつて横を向く山崎。其処に居るのは、レシーブの構えのま
まで今だ立っている大島。

よく見れば汗一つかいていない様子がない。

大島「さつきから、一步も動いてないですがなにかお？」

山崎「ということだ」

五十嵐「う、うー!!! それでも納得できないー!!!」

途端に泣き出す五十嵐。どうにも彼女には負けず嫌いの気がある
ことに、男衆が気づいたのは最近の事だ。

しかしながら、浜田や大島（でもどうかは分からないが）ならい
ざ知らず、相手は山崎である。女が泣いたところで、どうと思うは
ずも無い。

慰める浜田にその場を任せ、大島と一緒にコートから少し離れた
場所に座り、粉末製のスポーツドリンクを溶き、作り置きしておい
たドリンクボトルに手を伸ばした。

山崎「しかし、ビーチバレーセットまで輸送するなんて…… 上の奴らはいったい何考えてんだろうな」

大島「前も言ったけど何も考えてなさそうなお」

飲み終えたドリンクボトルを大島に回す。そうすると、砂の上に頭を降ろし天を仰ぐ山崎。

空は晴天。絶好のバカンス日和。

山崎「こんないいところがあるなら、もっと早く来るべきだったな」

大島「そうだお…… ここは、自然が残ってていい所だお」

聞こえてくる波の音と木々のせせらぎ。心地よい揺らぎにいざなわれ、山崎は眠りの世界に落ちていく。

大島「山崎？ 眠ったかお……」

一瞬山崎のほうに目をやった大島であるが、穏やかな寝息を立てる山崎を見るとすぐに視線を前に移した。

何時の間にやらコートでは、五十嵐と浜田が交互に打ち合っている。

五十嵐「なっちゃん、こうなったら徹底的に練習するよ！！ 打倒、山ちゃん！！！」

浜田「そ、それはいいけど、ちょっと休まないへっちょ？」

五十嵐「駄目よ！！ 勝までやるの、それまで絶対に休ませないんだから！！！」

浜田「えっ！！！」

五十嵐「えっって！！ なっちゃん！？ そんな軟弱な事だから、山ちゃんに負けちゃうんだよ！！！」

浜田「た、たすけて〜大島・山さ〜ん!!!」

大島「観念するお、浜田〜!!!」

浜田「そ、そんな〜……」

五十嵐「ほら行くよなっちゃん!!! まずはスパイクを取る練習から!!!」

容赦なく浜田に打ち込まれるスパイクの嵐。

大島は、正視に耐えかねて、山崎同様に天を仰いだ。

波の音にまぎれて、時々肉を打つような音が聞こえてきた。

浜田「いい、天気だお……」

照りつける太陽の光さえも心地よい。大島がそう思ったときであった。

五十嵐「キャ…… キャー!!!」

浜田「う、うわー!!!」

大島「ど、どうしたお!!! へ〜ちよ、浜田!!!」

がばりと起き上がる大島と山崎。すると、五十嵐・浜田の傍に何か妙なものが居るのが見える。そう、まるでふんどしの様なものを締めた、角刈りの男と、帽子をかぶった男。紛れもなくそれは……

五十嵐・山崎・浜田・大島「……へ、変態だー!!!」
「……お
!……」

そう、ふんどしの男が二人、其処には立っていたのだ。しかも、二人寄り添うように。

「???」「ふ、変態とはまた酷く言われたものだ……」

「???」「俺たちに対する侮辱と、その言葉受け取ったぜ……」

大島「へ、変態以外の何だというんだお!!」

高部「いやー!!! 来ないで、寄らないでー!!! なつちやーん、助けてー!!!」

浜田「へ、へ〜ちよ!!! 早くこっちにー!!!」

逃げるようにしてこっちにやってくる二人。それをまるでむかつく笑みを浮かべ目で追う、ふんどし二人組み。

「???」「くくく、何も逃げなくていいのに…… ねえ、先輩?」

「???」「そうだな。俺たちは、女には興味ないのに…… まあ、そっちの男の方は少し魅力的ではあるがね」

バチンと浜田にウィンクを送る角刈りの方のふんどし。

モロにそれを食らった浜田は、バタリとまるで気絶するかのよう
に砂浜に倒れこんだ。口からは泡を吹いている。

浜田「う…… き、気持ち悪い……」

五十嵐「なつちやん!! いやだ、死んじゃ嫌だよ!!!」

浜田「ご、ごめんへ〜ちよ。僕は、もう駄目だ……」

大島「し、しっかりするお、浜田〜!!!」

「???」「やーね、照れちゃって可愛い」

「???」「もう、首輪つけてペットにしちゃいたいわ」

浜田「ゴフアー!!!」

五十嵐・大島「な、なっちゃん!!!!」「浜田!!!!」

血を吐いて倒れる浜田。享年、23歳であった。

気絶しただけです

大島「くそ、なんて奴らだお……」

五十嵐「よくも、よくもあたしのなっちゃんを…… ゆるせない

!!!!」

????「ふふふ、そうだ。そう。その感じ。もっと恥じろ、もっと苦しめ。だがな、俺が受けた屈辱はこんなものじゃないぞ!!!!」
????「そうだな王子。お前が受けた屈辱は、こんな物じゃないな……」

山崎「…… 屈辱? 王子? …… まさかお前!!!!」

そういつて立ち上がる山崎。そうだ、この男たちに、山崎たちは既に会っている。それも、つい最近。

王子「そう、やっと思い出したか、山崎。お前に倒された、卓球王子だよ!!!!」

先輩「同じく、王子の一つ上の先輩だ!!!!」

そう、そいつらは二月ほど前に前に、山崎が古今東西ゲームで破った男たちであった。あの後、まるで最初から居なかったかのごとく去っていったので、というよりもポットでの使い切りキャラだと思っていたので、まるで気づかなかったが、確かにあのときの二人に間違いない。

王子「お前を倒すため、俺は卓球の道をあきらめた。そして、このビーチバレーでお前を倒すべく、先輩と血の滲む様な練習を繰り返してきたんだ……ここで、あつたが百年目……今度こそ勝たせてもらうぞ!!」山崎「!!」

ふんどしを翻し、こちらを指差す二人。その挑発的な態度、そしておそらくこの勝負をしなければ、奴らは有無も言わず地球侵略を始めるに違いない。ここは、受けるより他に手は無い。が、改めて周りを見回してみると。

浜田は死亡中。

五十嵐は浜田について離れない。

大島は役に立つか分からない上に、やる気も無ささそう。

山崎「こ、これは……勝てないかもしれない……」

山崎の額を一筋の汗が伝った。果たして、こんなろくでもない戦力で、勝てるというのか。

王子「どうした!! はやく出て来い山崎!! それとも怖気づいたか!!」

先輩「ふっ、もっとも。出てきたところで、俺たちの敵ではないだろうがな……」

山崎「く、くっそー!!!!」

山崎が、下唇を噛もうとしたその時であった。

????「その勝負、私が預かる!!!!」

山崎・大島・王子・先輩「」「」「だ、誰だ!!!!」「お!!!!」

急にどこからともなく声がある。皆が皆、声の主を探し四方を見る。そのとき、死んでいるはずの浜田の指先が天を指差した。咄嗟に見上げる、五十嵐たち。其処には、大きな音で翼をはためさせる、黒い機影が浮かんでいた。

飛んでいるのは、日本軍の主力空中兵器のヘリコプター。声の主は、まさしく其処に居る。

と、ヘリから飛び降りる一つの影が。それは、五十嵐たちのすぐ手前に、静かに舞い降りる。

そう、その者こそ、声の主。

紺色のスクール水着ではちきれんばかりの胸と身体を包み込み、胸にひらがなで「ゆきこ」と描かれた白い布を張った、高部であった。

高部「ふっ…… こうやって会うのは久しぶりだな、大島……」

大島「た、高部……」

大島（気でも狂ったかお!!??）

第三十三話 渚に現るプリン(セ)ス 中編

高部の異様な格好にドン引きする、一向。そんな視線すら気にせずにかずかと歩み寄ってくる高部。五十嵐たちの前に立つと、宇宙人方を向きびしりと指を刺す。

高部「お前たち、その男に変わって、私がお相手しよう」

王子「ハア？ 女。何を言っている？」

先輩「いきなり出てきて、何を言い出すかと思えば……俺たちが用があるのは、その山崎だ。女は黙ってな？」

高部「ほう。この私では、不服というのか？」

王子「不服も何も、まず君はいつたい誰なんだ？」

先輩「そつだ、まずは名を名乗れ」

ふつと王子たちをあざ笑うと、さらりと長い髪の毛を流し高部は腰に手を当てる。そして、ありったけの眼力を持って、二人を威圧した。その、女にしてはやたら高圧的な視線に、余裕ぶっていた王子たちが一歩後ずさった。

高部「私は、陸軍大佐。高部由紀子！！人は私のことを鬼の高部と呼ぶ」

先輩「高部由紀子……聞いた事があるぞ」

王子「陸軍大佐ねえ……おもしろい。そうするって言うと、君を倒せば、事実上地球軍は倒したと見て良いのかな？」

高部「まあ、そういうことになるだろうな」

ふふんと、鼻を鳴らすと高部はまた髪を靡かせる。紺色をもってしても隠し切れないほどの、濡れたような黒髪が、太陽の光に照らされて、きらきらと瞬く。

そんな高部の後姿を見つめながら、今だそのショッキングな光景に馴染めない大島は、心の中でつぶやいた。

大島（地球軍じゃない、日本軍だ。何をえらそうに、余裕ぶつてるんだ高部！！）

大島（そもそも、何でこの女、こんな恥ずかしげも無い格好をしているんだ！？ しかも、さも自慢したげに。こんなの年頃の女からしてみれば、恥ずかしい以外の何者でもないというのに。しかも高部のスクール水着、よく見たら新品じゃないか。いったいどういう経路で手に入れたんだ……）

冷や汗を頬に伝わせ、深刻な表情で高部を見つめる大島。そしてその大島の背中越しに、高部を信じられないという目で見つめる者がもう一人。そう、高部の友人こと、五十嵐だ。

五十嵐（な、なんでユキちゃん、あんな大胆というか恥ずかしい格好をしているの…… ま、まさか！！ あの時の！！）

五十嵐の回想

つい先日、夜の話。

高部「そ、そそそ、それにしてもだな奈由…… その、大島は……
…… いったい、どういった雑誌を読んでいたのだ」

五十嵐「へ、あ。確か…… 水着の女の子が、たくさん載ってる雑誌だったかな」

高部「み、水着か、水着なんだな…… そうか、水着が好きなのか…… ふむ」

五十嵐「それでね。たしか、どこだったかのページが、凄くよ
れてたんだ。あれは何のページだったかな……」

高部「何!! それはまことか!! して、どのような水着が、
奴は好みなのだ!!」

五十嵐「ちよつとまっつて…… うん」

五十嵐「そうだ!! スクール水着よ!! スクール水着の女の
子が載ってるページだったわ」

高部「な!? ス、スクール水着!? な、な、なんて破廉恥な
…… し、しかし、あやつがそれが好きというなら……」

五十嵐「けどユキちゃん。こんな事聞いていたいどうするの?」

高部「ん、ま、まあ私ほどの役職ともなると、ここ、こうやって
末端の部下の事まで、詳しく知っておく必要があつてだな……」

五十嵐「そうなんだ、偉くなるって大変なんだね。もしかして、
今もお仕事なのユキちゃん」

高部「む…… ま、まあな。それよりありがとう奈由。おかげで
貴重な情報を仕入れる事が出来た。礼を言う」

五十嵐の回想 終わり

五十嵐（絶対に、あの時のだ〜!!）

五十嵐の頬を無数の汗が伝う。今思えば、スクール水着では無か
った気もしないでもない。こんな事になる事が分かっていたなら、
もつと無難な水着を言っておくべきだった。

さらに、大島の反応の無さが五十嵐の不安を助長する。今、高部
に振り向かれても、目を見て話す自身などともではないが無かつ
た。

と、そろそろ話の本筋に戻るとしよう。

高部の言葉の後少し考えた卓球王子は、先輩と相槌をうつと、高部のほうを向きなおす。

王子「いいだろう。元々私たちの目的は、地球征服だ。それを阻む軍の将を倒せるというなら、それに越した事は無い」

先輩「というわけで、もしお前たちが負けたら、この地球を我々が頂く」

高部「もし、私と大島が勝ったら、お前たちはおとなしく出て行く。それで良いな」

王子「良いだろう」

先輩「良いぞ」

大島「ちよつと待て！！ 何勝手に人をゲームに参加させるんだ、高部！！！！」

高部につかみかかると、左右に激しく揺らす。

高部「何を言う。私のパートナーといえば、終生お前しかおらぬでは無いか」

大島「それは、仕官候補生時代の話だ！！ そんなときの事を、振ってくるな！！」

王子「何が不服なんだい、ボーイ？」

大島「何のメリットも無いのに、こんなくだらない試合に参加させられる事だ！！」

高部「くだらないことは無いだろう、地球の命運が掛かっているんだぞ？」

大島「それこそ、俺なんかじゃなくて山崎にやらせればいいだろ！！ 第一、宇宙人たちも本当は山崎としたいんだろ！！ 何で俺

なんだ！！ 納得いかねえぞ！！」

大島は必死の形相であるが、試合メンバーの誰一人としてが、彼の目を見て居ない。それどころか、それがどうしたと開き直った様子で、さも何事も無かったかのように、試合を開始しそんな雰囲気である。

そんな、雰囲気がいよいよ大島をヒートアップさせる。

大島「嫌だぞ、俺は絶対やらねえぞ！！」

高部「我侂だぞ、大島。ほれ、さつさと位置に付かんか！！」

大島「だから！！ 絶対にやらないって言ってるだろ」

先輩「分かった、それじゃあこうしよう」

先輩「僕たちが勝ったら、君は僕らのペットになってもらう」

大島「余計やりたくねえよ！！！！」

大島「大体なんだよペットって、お前ら何する気だ！！」

先輩「それは、もう。ペットがしそうなこと全てさ」

王子「キャッ。先輩のエッチ。けど、そんなこと言つと妬いちゃうぞ？」

先輩「はははは。あくまで本命はお前一人だよ、王子」

王子「先輩」

先輩「王子」

がしりとそのたくましい肉体で抱きしめあう二人。その光景と、自分を無視して進む話の流れに、大島の顔の青筋に力が入る。

大島「だから、それじゃお前らが嬉しいだけで…… ああ！！

誰がやるかこんなもん！！！」

高部「さて、大島。だったら、こうしよう」

高部「私が勝ったら。お前の一日命令権をゲット」

高部が大島を指差してそう言う。

そのとき、大島の中で何かが音を立ててぶちぎれた。

大島「だから、俺に何のメリットも無いのに、こんなことできる
かあああああああ！！！！！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5234c/>

無謀突撃兵 五十嵐へ～ちょ

2010年10月10日11時01分発行